



東京專門學校  
英文學史  
坪内雄藏  
完

205046-000-1

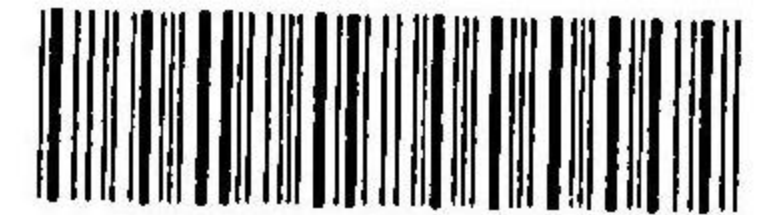
62-300口

英文学史

坪内 雄藏/述

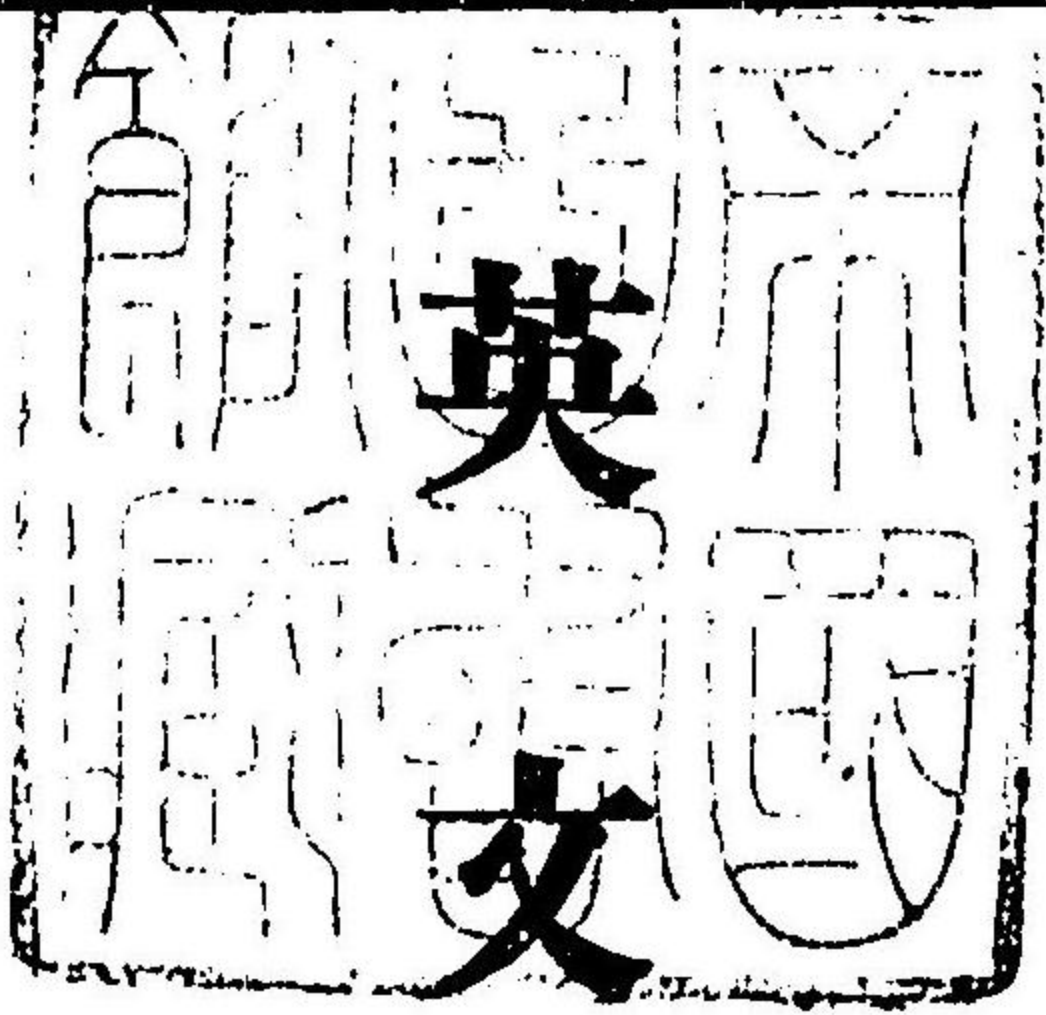
[刊年不明]

EDV-0039





坪内雄藏講述



學史

完



東京專門學校藏版



英文學史

目次

英文學史を講述すにつきて

第一編 上古期

第一章 英文學史の細分

第一期……………上古期の文學……………第二期……………エリザベス朝の文學……………

第三期……………内亂時代の文學……………第四期……………十八世紀の文學……………

第五期……………近世の文學……………

第二章 ノルマン征略以前

アングロサクソン時代の詩歌

同じく散文

第三章 ノルマン征略後

國文學再興の端緒

新國文學

一頁  
五  
五  
七  
八  
四  
一  
二  
二六



チヨウウサルの傑作

チヨウサルと同時代の詩文人

第四章 チヨウウサルの死後

チヨウウサル死後一百年

文運復興の遠因

ヘンリー八世の朝

ワイヤットとサリト

第二編 エリザベス朝の文學

第一章 本篇の細分

第一期……エリザベス文學 同 一千五百九十五年より

第二期……エリザベス文學 同 一千五百七十九年より

劇壇並びに脚本家 ……の英國劇の起原に及びりし一且劇壇

第二章 第一期エリザベス文學

詩歌

三五

四三

四五

四八

五〇

五九

六二

六三

六四

六四

六四

六四

六四

翻譯

脩史

海外の奇談

其の他の諸縁

第三章 第二期エリザベス文學

『ユーヒウエズ』物語と『アーカヂア』物語と

批評

詩歌

スペインサルの『神女王』

詩歌の四相

散文

フランス、ペーロン

第四章 劇壇並びに脚本家

神劇

英文學史 目次

六七

七〇

七二

七四

八三

八三

八三

八八

九一

九四

一一八

一二二

一二七

一三六



教劇 一四〇

正劇への機選 一四四

正劇 一四六

劇場 一五〇

リ、ー及び大學才子の作 一五五

クリストアアル、マアロウ 一五九

シエークスピア 一六八

ベンジャミン、ジョンソン 一七七

シエークスピア、ジョンソン以後の劇壇 一八五

第三編 内亂時代の文學

第一章 内亂時代の範圍 一九六

第二章 カロライン、ポーエツ 二〇〇

第三章 ジョン、ミルトン 二〇四

『失樂園』及び其の作 二一八

第四章 四文星

ジュレミー、テイロル 二二七

子爵トマス、ブラウン 二三二

クラレンドン 二三七

トマス、ホッブス 二三九

第五章 復位期の文學 二四五

第六章 サミュエル、バトラル 二五一

第七章 ジョン、バンヤン 二五七

第八章 ジョン、ドライデン 二六七

第九章 内亂時代補遺(散文學) 二七五

第四編 十八世紀の文學

第一章 概評 二七九

第二章 アジソンとスヰフト 二八五

第三章 擬古時代の詩王ポープ 三〇二



第四章 ポープの著作 三〇八

第五章 英國小説の濫觴 三一七

第六章 ダニエル・デフォー  
『ロビンソン・クルーソー』 三二八

第七章 サミュエル・リチャードソン  
其の著作 三三三

其の一……『パメラ』一名『徳のむくい』…… 三四五

其の二……『クラリッサ』サ・ハローウ…… 三四九

其の三……『ソル、チャールズ、グランサンソン』…… 三五一

第八章 ヘンリー・フィールディング  
其の略傳 三五八

第九章 スモーレットとストルン  
其の他の小説家 三六三

第十章 サミュエル・ジョンソン及び散文名家 三七四

第十一章 史傳の著者ヒウム、ロベルトソン、ギッボン、

ポスエル 三八三

第十二章 ポープ以後の詩人(トムソンよりグレ  
ーまで) 三九八

トマス・クレイ 四〇五

第十三章 第三期の詩人 四一一

第十四章 十八世紀の英國文學と外國文學 四二〇

第五編 近代の文學

第一章 歐洲近代の革命思潮 四三三

第二章 バルンス及びクーパー  
バルンス 四三六

クーパー 四四〇

第三章 ローマン派 四四三

サウシト 四四七

第四章 スコット 四四九



第五章 哲學派

チルゾネルス及びシエリー  
シエリー

八

第六章 バイロン

第七章 その他の詩人(テニソン以前)

コールリッヂ

キーツ

カムベル

第八章 新代小説家

第九章 ザッケンヌ及びサッカー

サッカー

第十章 その他の小説家

第十一章 定期出版物の發達

(一)非リアム、ユッスット……………五二二  
(二)デエフレイ……………五二六  
(三)シドニー、スミス……………五二九  
(四)ザボン、バルロー及びアイサックサス……………五二一

四五六

四五八

四七〇

四八一

四八一

四八五

四八六

四九〇

五〇五

五一〇

五一五

五二一

第十二章 歴史家

五五五

(一)ヘンリー、ハラム(一七七八—一八五九)……………五五七  
(二)非リアム、ロス  
ロー(一七五三—一八三二)……………五五八  
(三)非リアム、ミトフォード(一七四  
四—一八二七)……………五五九  
(四)Sharon Turner(一七六八—一八四七)及び  
John Lingard(一七七一—一八五一)……………五五九  
(五)フランシス、バルグレ  
ーブ(一七八八—一八六二)……………五六〇  
(六)Dr. Thomas M' Cleo(一七七一—  
一八三五)……………五六一  
(七)アイスマーノルド……………五六二

第十三章 マコーレー

五六三

第十四章 カーライル

五七五

第十五章 カーライル以後の歴史家

五八九

(一)アレキサンダル、キングレー(一八一—一八九一)……………五九〇  
(二)  
John Foster(一八一—一八七六)……………五九一  
(三)Henry Thomas Bueple……………五九



一……………(四)エドワルド、アウガスタス、フリーマン……………五九三……………(五)デボン、  
 リチャード、グリリン……………五九四  
 フルード  
 第十六章 テニソン 五九九  
 第十七章 ブラウニング及びブラウニング夫人 六一九  
 第十八章 其の他の詩人 六三二  
 (一)アーノルド 六三二  
 (二)ロセッチ及びロセッチ嬢 六三七  
 (三)オシヨウチシィ O'Shaughnessy 及びトムソン 六四四  
 (四)第二級の詩人 六四七  
 (一)タッパル……………六四七……………(二)テニソンが親交の詩人……………六四八……………  
 (三)トレンチ(一八〇七—一八八四)……………六四九(四)トマス、ゴルドン、ヘーク……………  
 ……六四九……………(五)エーツィン……………六五〇……………(六)スバスマガツク派(暫且  
 感動派即ち際物派)……………六五一  
 (五)クロー、ロツカル及びブリットン 六五三

(六)モルリス及びスフィンバイン 六五七  
 第十九章 最近小説家 六六三  
 (一)シャロット、ブロンテ女史 六六五  
 (二)ウォルチ、エリオット女史 六六八  
 (三)キングスレー 六七七  
 (四)Anthony Trollope (一七八〇—一八六三)……………六八三……………(五)チャールズ、リ  
 ード……………六八四……………(六)ヘンリー、キングスレー……………六八五……………(七)ス  
 テンソン……………六八六

第二十章 最近評論壇 六八九  
 ラスキン 六九六  
 第二十一章 哲學壇及神學壇 七〇九  
 第二十二章 科學壇の文才 七三六  
 第二十三章 脚本 七四七  
 第二十四章 總收 七五五

英文學史目次終



# 英文學史

## 講述の順序

予は英國の文學史を五期に分かちて講説せんとす次に擧ぐるが如し

第一期 上古期の文學

第二期 エリザベス朝の文學

第三期 内亂時代の文學

第四期 十八世紀の文學

第五期 近世の文學

第一期上古期文學を更に三小期に分かちて第一小期をノルマン征略以前の文學即ちアングロサクソン時代の文學とす紀元後六百七十年より同千〇六十六年までなり。第二小期をノルマン征略より英國詩壇の曉星と稱せられたるシオフレ一チヨウサルChaucerの時代までとす紀元後千〇六十六年より同四百年までなり。さて第三小期はチヨウサルよりエリザベス朝までこれは紀元後千四百年より同五百五十九年までなり。



其の他期毎に細分ありくはしくは毎期のはじめに説くべし。

年代の順序と文體の今古とを標準として我が朝の文學に比較すれば第一期アン  
グロサクソンの文學は我が奈良朝前後の文學に似て其の詞意も其の詞形も後世  
のとは著く異なり大概は外國の文を読むが如き思ひあり。又第二期エリサベス  
朝の文學はほゞ我が平安朝あたり若しくは鎌倉時代の文體ほどに後世のと異な  
れり。さてまた第三期内亂時代のは室町以後徳川時代の前半のに配當すべく第  
四期第五期のは徳川時代の後半より明治の時文までを含むものに比ぶべし。  
参考書には

エルシュの英文學史

アノールドの英文學史綱要

テーンの英文學史

シヨウの英文學史

ブルックの上代英文學史

モーレーの英文學報要

其の他モーレル、コリアル、レントンなど皆我が國に舶來しあり尠くも此の中の一  
二を座右に備ふべし。

講述者識

## 英文學史

### 第一篇 上古期

#### 第一章 英國の原住民

ヘンリー、モーレー其の著『英文學報要第一』の序中にいはく「一國民の文學はその國  
民の生活ライフを語るもの也。歴史もまた一國民の所爲を録すレカれども國民が情思、  
意見及び其の一層高尚なる精神の鼓動をさながら温あたなるまゝに示すものは特り  
文學あるのみ」と。蓋し一國民の真正なる經歷を知らんとせば皆に國史上に見え  
たる外面の事實のみを知るをもて足れりとすべからず其の内面の隱微即ち其の  
文學に見えたる精神上思想情感上の現象をも併せ知るの必要あり。所謂國史は  
一國民が客觀の歴史、文學史は其の主觀の歴史なり即ち思想情感、想像、理想、信仰等  
の進化變遷を叙するものなり。

此の意味よりいへば英國の原住民は其の文學の史に殆ど關係を有せざるもの也。  
彼等は何等の文學をも遺さざりし也。今の英語英文及び英國人の感想は殆ど彼  
等に負ふ所なし。



今をさること一千四百餘年前には今日英國と通稱せる島をブリテイノ島と稱し其の住民をブリットン族と呼べりき。ブリットン族は最も早く亞細亞より歐洲に西漸せしケルト蠻族の一派にしてゴール、キムブリ等と血脈を同らせり。紀元前五十五年羅馬の將シユリアス、シーザル北の方ゴール(今の佛國)を征せし後兵をひきゐて渡來しブリットンを克服すること二回に及べり是れ英國が羅馬の文明に接觸せし發端也。其の後まばく背叛せしが紀元後一世紀の頃に至りて全く羅馬國の版圖となれり。爾後羅馬政府は此の地に兵を置き内は歸順せる民を治め外はエールス地方の蠻民及び北方スコットランドなるピクト、スコットの侵掠を防げり。かくて第五世紀に至り歸順せるブリットンの漸く羅馬國の文化に浴せしころ南歐大に亂れて羅馬國殆ど危かりしかば此の地の戍兵は其の急を救はん爲皆本國に召還せられき。ピクト、スコット等これを機として劫掠をほしいまゝにし島民大に困めり。其のころ今の日耳曼國と丁抹との國界なるシユレス井ツグ、ホルスタイン地方にアングル族といふ強蠻住めり又其の同族にサクソン族といふあり共に海賊を業として北海に横行せり。はじめブリットン族のピクト、スコットに

苦められしや後患を慮るに遑なくて援を彼等に乞へり。蠻族等これを奇貨として陸續渡來しまづピクト、スコットを退け更にブリットンと戦端を開き鬭争二百年の後竟に全國を克服し殆ど原住民を族滅せり。これよりアングルの名に因みて此の國をアングラ、ランドと呼びやがて轉じて英蘭土イングランドと稱したり。ブリットン族の存へたりしものは殆ど悉く國外に離散し婦女若干のみは克服者の婢妾となりて残りぬ。勢ひかくの如くなりしかば政治上に於ても國語上に於てもブリットンは全く跡を絶ち僅にその片影を今のエールス地方に留めたるのみ。彼等の後の英國人に於ける關係はほゞ我がアイヌ、コロホツクルの大和民族に於けるが如し。眞の英國史は政治上よりいふも文學上よりいふもアングロ、サクソン移住以後にはじまるなり。

## 第二章 アングロ、サクソン族

アングロ、サクソンの故國は彼の風濤險惡なる北海に枕みたる林深く沼多き濕地なり。空曇り霧深く雨雪時を定めずして降れるゆゑ其の地の住民は多く室内に蟄伏するの必要を感じ若しくは平素蟄伏せる反動にてたま／＼天晴るゝとき



には野に山に河に海に縦横に奔馳して荒々しき遊獵を事とせり。彼等は自然を友とする能はざりしがゆゑに之れを敵としてよく戦ひ早くよりその勁敵たりし海を克服し海を家となし海を活動場となし竟には海賊を業となすに至りぬ。彼等の娛樂は耳目にあらずして口舌にありき。牛飲馬食は彼等の通性にして陰鬱嚴格は彼等の外貌なりき。彼等は筋骨逞しく忍耐強く最も冒險の勇に富めり卑怯懦弱は彼等の尤も惡む所なりき。彼等の弊をいへば殘忍冷酷なりしと也彼等の美德をいへば嚴格にして勇敢なりしと也。彼等は特行獨立の氣概に富み義務を重ざるの念いと厚かりき。彼等は戸内に黙居する日多かりし故に肉體の美よりも精神の美を重ざるの念すなはち君に忠、夫に貞、朋友に信、親に孝、などいふ義務の念早くより發達せり。

此の人種の移り住みしブリテイン島は地も氣候も頗る其の祖國に類して幾分か温和なるものなり、されば彼等の惡徳は年と共に其の甚しきを減じ文化の進むにつれて美德はやゝ發達せり。其の殘忍殺伐なる本性は容易に滅するに至らざりきと雖も勇敢義烈の美德と深沈謹嚴の性とは年を追うて化醇せり。彼等は戀愛

を娛樂とせざりしゆゑに上代には戀の歌殆ど無し、さりとて道を守り約を重ざる夫婦間の愛情は乏しかりしにあらず。彼等は人生を戦闘と思念し人間最上の美德は身を殺して仁をなすにありと思惟せり。『ビオウルフ物語』は後に説くべし如きは尤もよく此の情想を代表せるものなり。かゝる人種なれば宗教思想の如きも尋常の蠻族と同じからず上代にこそ若干の軍神イグナなどもありしが本來有形物に重きを置かざる性なりしかば夙に形なき物に心を傾け義勇又は任俠などいふを理想とせり。要するに肉體的な生活は彼等の目的にはあざりき。彼等は義を磐石に比し命を鴻毛よりも輕ずべしとせり。彼等の比較的早く基督教に歸依せしむる因果ありし故ならん。

アングル族とサクソン族とはもと分かれたる種族なれども合稱してアングロ、サクソンといひ其の國語をもアングロ、サクソン語といふ是れ實に今の英語の根源也。其の後種々の外國語入來たりて之れと混淆したるゆゑ純粹のアングロ、サクソン語の後の英語と異なるは我が今日の俗言の奈良朝時代の俗言に異なるが如く字形も語も語格も同じからぬとアングロ、サクソンの天性は千古依然とし



て貫徹し今日に至りても渝るとなし。されど外國境遇及び時勢が甚からず人種の性格に影響したれば外部の變遷は頗る著きものあり殊にノルマン征服前の英國民と今日の英國民とを對照すれば全く別人種の觀あれども尙仔細に檢すれば今の英人の性格中にも古代アングロサクソンが性の影隱然たり。文學に見れたる所はた然り。今日の英文學も其の外形こそ著く異なれど其の精髓は古代のアングロサクソン文學と相通へりといふを得べし。

純粹のアングロサクソン語の詩文をアングロサクソン文學ともノルマン征服前の文學とも稱す。我が允恭天皇の御宇の末より後冷泉天皇の御宇の末賴義に至る。まづ當時の詩文につきて其の如何ばかり後世の詩文と異なれるかを略説すべし。

### 第三章 ノルマン征服以前

#### アングロサクソンの詩歌

アングロサクソンの詩歌は希臘羅馬の詩歌の如く音の短長猶平仄によりて調を整へたるものにあらず又近代の詩歌の如く脚韻脚韻の法によりて律格を定めたるものにもあらず。其の普通せる特質の主なるものは一定の規律によりて語の頭に韻を置くことなり之れを頭韻頭韻と早稲田文學二十九及び三十一と參照と呼びぬ即ち毎句を二分して其の前半上の句主なる語二箇の頭文字を同一にし且其の後半下の句の最初の強音強音の頭字をも同じ文字とする法なり。尙此の外に一種の句拍子の法とも思はるゝは昂音昂音二度と低音低音二度とを句毎に設けて聲調に抑揚あるとなり而して件の律格句拍子の法に二種あり一は長く一は短し其の長きものは物語歌に用ひ其の短きは稍氣高く尊げに見えんと作者が期望せる場合に用ひたりたゞし大概は二者を混用せること多し。其のころの寫本を見るに當時の詩歌は行を分かつたで散文のやうに書流したるが例なれど概して句讀を施して句の別目を明にせり。

ストツホオド、ブルツク曰はく今の詩歌は一定の格によりて音の數を限り且句脚に韻を踏むを通例とすれどもサクソンの古詩歌は然らず其の詩歌たる所以は主に音の昂低と頭韻とを用ふるにあり。總して長き句は句讀によりて二分し上句下句おのゝ昂音二箇を具ふ低音の數には定限無し而して上の句と下の句とを維々に頭韻の法を以てし上の句の昂音二箇と下の句の昂音一箇とは概して母音概して異母音を以てはトまるか否ざれば同ト子音を以てはトまるを例とせり例へば左の如し



Heofon to hrofe,

Halg Scipend.

[Heaven for roof,

Holy Creator.

且といふ文字の上の句に二度、下の句に一度ある是れ頭韻なり次に擧げたるは其の譯なり。

「然れども時として上の句に頭韻僅に一箇のみなることもあり又時としては四箇以上の昂音あるともあり、たゞしいと長き句にても五箇以上には及ばず。さてまた莊嚴若しくは激越の情感を表せんが爲には別に一種の律格を用ふ、が、る場合には昂音の数を増加し且一定の規律によりて其の間に低音を挿入せり。又稀には脚韻をも用ひたる例あり。之れによりて案するに當時の律格は一二にのみ止まらざりしなり只常に四昂音三頭韻の法を以て根本の定格となせるのみ」と。

之れを要するに當時に詩歌には後世の詩歌に於けるが如き嚴密なる律格なかりしなり爰に原作を掲げて之れを證明せんも煩しければ省きつ。さて當時の詩歌には古風なる語と語格との多かるべきはいふまでも無きとながら間々用ひられたる隱喩も熟語も異やうなり譬へは矢の<sup>フク</sup>ことを<sup>アサ</sup>戦<sup>ク</sup>と<sup>アサ</sup>いひ<sup>ク</sup>海<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>とを<sup>ホエール</sup>鯨<sup>ク</sup>路<sup>ク</sup>といひ<sup>ク</sup>國<sup>ク</sup>王<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>とを<sup>マン</sup>人<sup>ク</sup>間の<sup>ク</sup>金<sup>ク</sup>友<sup>ク</sup>といへるなど是れなり。其の他古詩歌にありがちな<sup>ク</sup>聯

句<sup>ク</sup>并<sup>ク</sup>び<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>同<sup>ク</sup>じ<sup>ク</sup>こ<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>語<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>換<sup>ク</sup>へ<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>繰<sup>ク</sup>返<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>ふ<sup>ク</sup>こ<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>な<sup>ク</sup>ど<sup>ク</sup>屢<sup>ク</sup>々<sup>ク</sup>あり

万葉集の例又は  
ホアルウの古歌

「な<sup>ク</sup>き<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>例<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>同<sup>ク</sup>然<sup>ク</sup>れ<sup>ク</sup>ど<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>詩<sup>ク</sup>歌<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>皆<sup>ク</sup>簡<sup>ク</sup>潔<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>素<sup>ク</sup>樸<sup>ク</sup>な<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>蓋<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>形<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>意<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>重<sup>ク</sup>ん<sup>ク</sup>じ<sup>ク</sup>風<sup>ク</sup>姿<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>風<sup>ク</sup>情<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>主<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>せ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>當<sup>ク</sup>時<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>何<sup>ク</sup>事<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>簡<sup>ク</sup>短<sup>ク</sup>な<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>言<sup>ク</sup>葉<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>れ<sup>ク</sup>たり<sup>ク</sup>。總<sup>ク</sup>じて<sup>ク</sup>直<sup>ク</sup>喩<sup>ク</sup>ひ<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>比<sup>ク</sup>喩<sup>ク</sup>する<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>直<sup>ク</sup>喩<sup>ク</sup>とい<sup>ク</sup>ふ<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>稀<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>隱<sup>ク</sup>喩<sup>ク</sup>風<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>打<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>で<sup>ク</sup>た<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>尠<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>暗<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>比<sup>ク</sup>喩<sup>ク</sup>した<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>ふ<sup>ク</sup>是<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>英<sup>ク</sup>國<sup>ク</sup>人<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>特<sup>ク</sup>性<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>然<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>め<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>所<sup>ク</sup>な<sup>ク</sup>らん<sup>ク</sup>。

因にいふ此の古代の律格はノルマンシ族來襲して此の國を略せし後おひ／＼に廢れたりノルマン人は佛蘭西人なれば彼等と共に佛蘭西風の韻法、律格の此の國に渡來せしが故なり後に叙説する詩祖チヨウサル<sup>ク</sup>の作<sup>ク</sup>の如<sup>ク</sup>きは<sup>ク</sup>此<sup>ク</sup>等<sup>ク</sup>新<sup>ク</sup>原<sup>ク</sup>素<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>和<sup>ク</sup>熟<sup>ク</sup>せる<sup>ク</sup>形<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>作<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>れた<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>もの<sup>ク</sup>なり<sup>ク</sup>但<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>脚<sup>ク</sup>韻<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>頭<sup>ク</sup>韻<sup>ク</sup>法<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>シ<sup>ク</sup>ョ<sup>ク</sup>ン<sup>ク</sup>王<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>朝<sup>ク</sup>(<sup>ク</sup>土<sup>ク</sup>御<sup>ク</sup>門<sup>ク</sup>帝<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>御<sup>ク</sup>宇<sup>ク</sup>頼<sup>ク</sup>家<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>頭<sup>ク</sup>)<sup>ク</sup>まで<sup>ク</sup>遺<sup>ク</sup>存<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>之<sup>ク</sup>エ<sup>ク</sup>ド<sup>ク</sup>ワ<sup>ク</sup>ルド<sup>ク</sup>三<sup>ク</sup>世<sup>ク</sup>及<sup>ク</sup>び<sup>ク</sup>リ<sup>ク</sup>チ<sup>ク</sup>ャ<sup>ク</sup>ルド<sup>ク</sup>二<sup>ク</sup>世<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>こ<sup>ク</sup>ろ<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>再<sup>ク</sup>興<sup>ク</sup>せ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>れ<sup>ク</sup>十<sup>ク</sup>六<sup>ク</sup>世<sup>ク</sup>紀<sup>ク</sup>(<sup>ク</sup>元<sup>ク</sup>龜<sup>ク</sup>天<sup>ク</sup>正<sup>ク</sup>)<sup>ク</sup>まで<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>兩<sup>ク</sup>様<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>韻<sup>ク</sup>法<sup>ク</sup>併<sup>ク</sup>用<sup>ク</sup>せ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>れた<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>き<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>ふ<sup>ク</sup>近<sup>ク</sup>代<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>詩<sup>ク</sup>歌<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>頭<sup>ク</sup>韻<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>法<sup>ク</sup>間<sup>ク</sup>々<sup>ク</sup>利<sup>ク</sup>用<sup>ク</sup>せ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>れた<sup>ク</sup>れ<sup>ク</sup>ど<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>そ<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>古<sup>ク</sup>代<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>さ<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>や<sup>ク</sup>趣<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>異<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>した<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>もの<sup>ク</sup>なり

今尙傳はれる最も古き詩歌の一は『ビオウルフ』と題したる物語、歌なり。ビオウルフは此の物語の主人公としたる一英雄の名なり彼れは古代の北蠻の神オーディンの血統をひきたる皇族なりしが其のところグレンデルといふ怪物ありて當國の王宮に夜毎に來たり眠れるに乗じてあまた武士を取喰ひぬとなり。『ビオウルフ』



物語はヒオウルフが件の妖怪を退治するを叙したるものなり。思ふに此の歌はサクソン族が英島を攻寄せし前即ち第五世紀中に成りしものなるべし其の筆記せられて讀みものとなりしは彼等が英島に移りて後のことなれど實に其の前より口頭にて唱傳せられたりしものとあぼし。件の歌の價値はサクソン族の太古の習俗を瞥見するに足るところにあり例へば我が『古事記』の我が神代の風俗を窺ふの料となるが如し。

總じてサクソンの古詩歌には尙武の氣むしろ慘憺たる弑伐の意氣みち／＼たり。羅馬人嘗て彼等を評して海狼といひけるが此等の詩歌を讀めばげに海狼の氣稟の躍々たるを見る。こは彼等の本來の職業が攻伐掠奪にありしが故なり。後年基督教の此の國に入るに及びて多少サクソン族の性習の上に變化を生じ甚しき残忍刻薄の氣風は減じたりしが凍々たる尙武の精神は尙些も衰へざりき。例へば當代の名家ケドモン若しくはキチウルフの作を見るに其の主題としたる事柄は基督教的敬神の旨意にいでたるにも係らず尙武勇猛の氣脈尙歴々たり。此のケドモンといふは傳によれば我が天智帝の御宇第二年ごろにみまがりし者なり。

彼れはじめは在家の僧なりしが一夜夢に神人にあうて眠りながら天帝并に世界の開闢に關する詩題を感得し加之夢の中に其の緒數句を作りて歌ひぬ。醒めて後明に其の句を記臆したりければ深く感じ人の勸にまがひて出家し夢中感得の歌を完成しぬ是れ有名なる『聖書』の律解（スクリプチュール・イン・プロゼ）即ち舊約全書と新約全書とを材料にして長篇の物語歌となせるものなり。ケスレリはケドモンをたゞへて我が祖先時代のミルトンといへり。或は謂ふツヨ、ミルトンが『失樂園』の詩は此の『律解』に負ふ所ありきと、さりながらこはたゞ臆測の説たるにといまれり（ケドモンは要はエルシユ又はアルサテケドモン以後となりては基督教いよく廣く行はるるやうになりしかば宗教の旨を歌ふもの大に増加し前に擧げたるキチウルフ（一千八年死）の如きも此の種の詩歌に盛名あり。さりながら其のころに至りても軍歌俗歌はた相並びて行はれたりき現にアルフレッド大王の御宇には『マルドン役の歌』をはじめとして二三の長篇の軍歌あり其の以前にも尙あまたありしならんが其のころは總て口傳へに歌ひ傳へしのみなれば傳はらざりしなり。學問の十分に開けざる世のならひにて筆把りて物かき得るは寺院の僧侶ばかりなりき而



して僧侶の軍歌を好まざりしは勿論の事なり。

上代詩歌の最も秀でたるは前に擧げたる『ビオウルフ物語』と『フィンスマルケの合戦』と題したる物語歌とケドモンの『律語解』と『マルドン役の歌』となるべし前二者と最後の二とは其の作者詳ならず。

### 同じく散文

古代英文の最も古きものを求めればエドモンド、ペルクが『英國の學問の祖』と稱したるビードの著作を推さざるべからず固より彼れの時代よりも前に幾多の散文のありしこと明なれど荷も文章と稱するに足るべきものはビードの作れるを嚆矢とす。ビードは又ビードとも稱す紀元後六百七十三年ダルハムといふ處に生まれ齡七歳にてセント、ピータルの聖院に入り十歳の時セント、ポールの聖院に移り身を終ふるまで勤行怠ることなく博識の高僧として一世に知られたりき。六百七十三年は恰も我が天武帝御即位の年に當たり。ビードの著作はよそ四五部當時行はれたりし諸學藝、音樂、修辭、醫學、數學、星學、物理學等は一として其の材料とならざりしものなし。彼れ其のはじめは専ら羅甸文をもて著作したりしが晩年シヨウ尊者が經典を翻譯するに及びて初めて此の國の國文をもてものしぬ

最古の英文をいふものは皆此の翻譯文を英國々文の基礎とす。羅甸文にてものしたる彼れが傑作は『英國國民之宗教史』なり。

ビードがみまかりしころには其の生國なるノルサムブリア州は散文學の本地となりて羅甸文をよくする者輩出せりき。加ふるに該地には寺院毎に僧舎の設ありて文庫なども處々に出來にき。ビードの門に遊びて學問を修めし學生ばかりにても數百人に及びきといふ。然るに紀元後第九世紀我が仁帝文德帝の御宇のころに當るに至り北方の強蠻デーン族來たり寇し屢々國內を侵掠せしかば學問の事一時全く地に墜ちたり。英主アルフレッド位に即くに及びて數々デーン族と戦ひて終に之を國外に退け又も文藝學術の講習を再興せしがノルサムブリアの文學は此の時凋枯して舊日の榮觀無く南方なるエッセックス州彼れに代りて學問の本地となりぬ。件のアルフレッド王は文武兼備の君にて中興の明主として政治上の史に彰傳せられたるのみならず文學の史上にも大功ありし人なり。王がみづからものせし其書一二のみならず就中歴史、修德等に關する著譯くさくあり而して其の文はすべて當時の國文なりしかば此の國に於ける散文學の發達を促がまゝ功



績は實にヒードにも優りぬべし。王は處々に登舎を設立し海外より博識の學者を招聘し大に教育を奨励しき。史家王をもて英國散文の祖とす當を得たりといふべし。

アルフレッド崩じて後デーン族又襲來し大に此の國を蹂躪すこれによりて學問藝術の花再び凋みて第十世紀の中ごろの村上天皇にエドガル平和王が國を治むるに至りしまでは根幹共に全く枯れ果てたるが如くなりき。王の御宇に井ンチエスタルの僧正エサルワルドといふもの盛に羅匈書の翻譯に従事し學校擴張の策を講じければ文學又蘇り次いで名高きダンスタンといふ高位の僧が時の大臣となるに及びて文學漸く榮えたりき。されど當時の傑作といふはエツフワックがものせし聖書の翻譯なりしを見ても學問の主まに宗旨上の翻譯の業に傾けしを察するに足れり。

以上畧説せるが如くアングロサクソン時代に於ける著譯はくさくさなれど其の中最も重大なるものは『サクソンクロニクル』なり。『サクソンクロニクル』とは『サクソン紀』の義なり。こはいと古き時代よりの事蹟を編年牒の綴りかたにて紀元後

一千五十四年まで頗る詳密に叙したるものなり。固より作者は一人にあらざんや歳々相繼ぎて記録し竟に一大編となりしものなり。傳説によれば紀元後八百九十一年までの記録はカンタルベリー院の大僧正プレグマンドの編輯に係るといふ。而してそれより後の分は處々の寺院の僧が相承けてものせしなりとぞ。其の記録の大かたは記者の目撃又は傳聞になれるものなれば歴史としてはまづ精確に近き者なりサクソンの舊史を探るものは必ず此の書を憑據とす是れ其の世に名高く且重視せらるゝ所以なり。全篇中アルフレッドの自記に係る分は最も卓越せる所ありといふ。さて其の文章は文脈語格に於ては近世の英文とさまでに大なる差ちがなけれど綴字の法、字形、發音等は著く今代のと異なりたれば到底殊なる講習を経ざるものには讀み得がたし。はじめは其の一例を爰に示さんかと思ひしが活字を新に造らするもことごとくしければ不本意ながら止みたり、これはたモーレルにもアーノルドの『英文學撮要』にも其の一斑は見えたれば就きて見るべし。

#### 第四章 ノルマン征略後



紀元後一千〇六十六年後冷泉帝の御宇、佛蘭西なるノルマンデーの公爵リリア  
 大軍をひきゐて此の國に襲來しサセクス州なるヘスチングスが原の一戦にて  
 時の國王ハロルドをほろぼし、やがて此の國の君となりぬ。之れを史にてはノル  
 マン、ノルマン 征略の變と稱す。當時リリアムに従ひて渡來せし者の多數は其の原名ノル  
 マン(Northman)といふ名稱にても知らるべきが如く元は北方ノルマン 抹略ノルマン 威ノルマン 瑞典等に  
 居住したりし蠻民なりしが紀元後九百五十年故ありて佛蘭西に移りノルマンデー  
 といふ地方に定住し多年佛人と交はるうちにいつしか佛蘭西の風俗に化せら  
 れしものなり。されば當時のノルマン族の國語と文學と制度とは殆ど佛蘭西の  
 に異なることなく、勤くとも彼等の上流なるものは常に佛語、羅匈語を語り加之此  
 の三國語をもて自在に文を作るを得たりき。  
 夫のアングロサクソン族の此の國を攻略せしや元の文物は悉く彼等が爲に化せ  
 られ殆ど原住民の印跡を留めざりき。アングロサクソンは實に英國をして豹變  
 せしめきといひつべし。然るにアイン族とノルマン族とは其の此の國を攻略せ  
 しことはサクソンに異なることなく就中ノルマン族の如きは政治と文學との上

に未曾有の變動を生ぜしに似たれど其の化の實際は此れ彼れ大に異なるものあり。  
アイン族の如きも一時はサクソン皇室を顛覆して全國に君臨せりき有名なるカニウト王はアイン朝の君なりき

案ずるに後の二者は其の皮相に於てこそ痛くサクソン族と相異なる所あるに似  
 たれど其の本來の性質に至りては三者共にチウトン族の血統にて其の祖を同じ  
 うし大に相背く所無かりし也。すなはちノルマンとサクソンとは相化すべき者  
 といはんよりはむしろ相和すべき質ありしなり。之れを要するにノルマン征略  
 の結果は只外面に於て此の國を變化せしのみにとまり内部を覆すには至らざ  
 りきとは政事史の上にも著明なる事實なり。されば又文學の如きも其の皮相の  
 みを觀れば第十一世紀以後著大なる變遷を経しが如く見ゆれど其の實は文脈、發  
 音、綴字法等の變遷たるに過ぎず此の期(第二小期)の末に出でしチヨウサルチヨウサルの作す  
 らも單に其の風調の外面に(即ち詞藻調格等の上)佛蘭西、伊太利の時尚を現せし  
 のみ其の根本の着想と觀念とはあくまでも依然たるアングロサクソンの特質な  
 り。固よりかくの如く鎮定したる結果に達せしまでにはサクソン風とノルマン  
 風との間に政治上にても文學上にても頗る激烈にして困難なる多年間の軋轢あり



りて一時は外國の文學の爲に在來の國文の滅絶せんとせしともありしが政治上に於てサクソン原素の勝を制せしと同時に文學上に於てもサクソンの原素凱歌を奏しぬ。さりながらこははるかに後の事なり、ノルマン政略の當時はサクソン文學は悉く地に墮ちたり。モールル當時を叙して曰はく、英語サクソン語は最早主治者の用ひざる語となりて到る處に侮蔑せらるゝと之れを用ふる庶民サクソン人の侮蔑せらるゝが如くにて何人も之をもて著作の用に供するものなかりき、即ち文章語としては、全く棄却せられき。第十一世紀の末より一千三百六十二年に至るまで具にいへば殆ど三百年間はひとり佛蘭西語のみを教會、法庭、並びに政治上にては用ひたり剩へ小學校の幼童すらも其の學ぶ所の羅匈語を譯するに佛蘭西語を用ひざるべからずと嚴命せられて國語は蠻舎よりも退けられき。所詮一千〇六十六年政略のより一千二百年に至るまでは英人サクソン人は或は其の自由を恢復せんと力むることに全力を傾け或は黙從して其の數奇を悲しむことに心を奪はれたりしかば英文學即ちアングロサクソン文學は一時全く跡を絶てりきと。案ずるに當時佛蘭西文物の此の國に跋扈せりし有様は其の渡來の因縁こそ大に

異なりたれど我が朝に支那の文物の渡來せし當時の状態に稍似たり。ノルマン朝の公用文が悉く羅匈語若しくはノルマン語によりてもせられしのみにあらず公卿貴紳の用語と庶民サクソン人の用語とは其のはじめは外國語の如く異なり稍後に至りても物の名の如きは上下其の稱を異にせし程なれば第十三世紀のはじめまでは國文學の史上に記すべき著譯はなし。

### 國文學再興の端緒

ノルマン朝となりて後新に盛になりし者は宗旨の歌と物語の歌となり。宗旨の歌はノルマン族が深く基督教を信奉せしに基きて起りき。其のはじめ主治者たるノルマン族は強ひてサクソンの文物を排斥し羅匈、佛蘭西の文學をして在來の國文學に代はらしめんと力めたりしにも係らず被治者の大多數は依然としてサクソンなりしが爲に教化上の自然の必要は先づサクソン文學の蘇生を促し更に翻譯文學の流行を招きぬ。一千二百十五年大憲章の時代に成りし僧オルム又の名ホルミンが作『オルミラム』といふ宗旨の歌は新式の聲律によりてものしたるサクソン律語なり、こは經文及び祈禱文を律語に翻譯して作者の述懐を加へたる



が如きものなり。オルムは頭韻の法をも脚韻の法をも用ひずしてひとり音の低昂のみを律格とせり。尙此の外にも翻譯せられたる書類夥多ありしがサクソン國粹の復興煥發すると共に國文學の氣焰漸く盛になり終には形式のみを外國に取ることとなりぬ。例へば一千三百六十二年に成りし有名なる『ビアルス、セ、プロウマンの夢』(The Dream of William the Conqueror)といふ物語歌の如きも同じく宗旨上の寓意談なれど其の精神と着眼とは全くサクソンの特質より成れりといふ。サクソンの特質とは庶人的文學主義なり彼の佛蘭西、伊太利等の文學の主(若しくは専ら)朝廷及び精神のもてあそび則にとてもせられたるとはあなじからず。

物語の歌はノルマン精神の深く史談小説を愛好せしに由來す。彼等は山獵野獵の後荒唐なる物語を聽くことを好みしなり。物語歌の泉源は正史及び野乘にて所謂物語歌の行はるゝに至りし前に羅旬語をもてものせられたる夥多の史談ありき。志かれどもそれは皆國文學に密接せざるものなれば今爰に語るに及ばず。さるほどにヘンリー一世王の朝に至りて此の史談のうちより所謂物語歌生まれ出でたり例へばモンマスのジョアンと稱せられたる僧の戯に正史物語と題し

てもものしたる英國古代史の如き是れなり。これは一千百四十七年のころにユールス地方の傳説を元として羅旬文もて綴りたるものなりしが叙する所大かた荒唐無稽の甚しきものにて殆ど小説にひとしかりしかば當時の史家はいづれも史の名を濫用せられたりとて怒り罵りきといふ。然るに此の書痛く上流の人々にもてはやされゲイマルといふもの或貴婦人の爲に之れを佛蘭西の律語に翻譯せしが其の翻譯いつしか佛蘭西に流行しやがて彼處にて種々の修飾を被り題名も變はり外形も變はり年經てノルマン詩人リチャード、ワースといふものゝ名作といふ名義にて故國英吉利へ歸り來たりぬ。此の時ウィストルシヨア州にレアモンと假號せる僧ありしがはじめて此の詩を英語に譯して『レアモンのブラット』と命題しき。實に此の物語歌はノルマン征服以後はじめて世にいでし英詩とも稱すべし。蓋し當時に謂ふ翻譯は最も自由放埒なる意譯なれば翻譯といはば翻譯なれど或は翻案といはんも差支なかるべし。現に此の『ブラット』の如きはワースのは全篇一万五千行(句)より成れどレアモンのは三万二千五百行(句)より成れりレアモンの律語は嚴格なる律格にまたがひたるものにはあらずされど概して三



昂音と六又は七音とを以て律とし専ら頭韻を用ひたり脚韻の如きは殆ど無し。且此の長篇の律語中佛蘭西語を挿用したる數僅に五十に過ぎざといふ。

此の『アラット』に叙したる事柄は概して架空の談たる勿論なり。蓋し歐洲列國の由來をトロイ國の滅亡に歸せんとするは當時史家の間に行はれたる一種の流行なりしか此の物語の如きもブリテイン國の開祖アラット(アルータス)をトロイの英傑エニアスの曾孫なりと做し其本國トロイ城陥落の後『早稲田文學』の名著梗概及イリテッド物語のを落し其の曾祖父エニアスが落行きし處伊太利より一層西方へ船にて落ち行き遂にブリテインの島に着しこゝに新國を開きぬとせり。譬へば我が朝の戯作者が美經爲朝の後談を作り設くると同じ趣なり。

さて件の翻譯の成りしは一千二百五年なりと聞こえたれば彼の政治上一大革命の緒いとちとなりし大憲章承認の時代よりはおほよそ十年ばかり以前の事なりされば又純粹の英語にてもオグソンのせられたるオルムが宗旨の歌に先つとも十年あまり也。此の二大篇の成りし時をもて英佛二文學調和の期とすすれば英の國文學は其の國憲と生誕の期を同じうせりともいふべく又英佛兩原素の混同融和せしは政

治上も文學上も其の機會を一にせりともいふべし。さりながら『英詩の曉星』と稱せらるゝソオフレー、チヨウサルが出世以前には眞の國文學といふべきもの尙成立せざりきといふが更に精確なる評也何となれば當時の文學は總じて翻譯案にあらざれば佛伊の諸作を摸倣したるものに外ならざればなり。

## 第五章 新國文學

以上叙説したるは英國新文學の端緒たるに過ぎず此の國の二大要素たるサクソンとノルマンとが眞に融會混濬して相固着し一團の英吉利民族となりしは第十四世紀の間なり隨うて眞は英國新文學の地盤を固め十九世紀の今日に至るまで英國文を修むるものゝ爲に推重景仰せらるゝ價値を具へたる新國文學の開祖は詩歌に於てはソオフレー、チヨウサル、散文に於てはジョン、井クツツフなり。而して件の二名家は共に十四世紀以後にいでたり。

サクソン、ノルマン二要素を調和するに與りて力ありし事件一二のみならざれども其のやゝ近因とも見做すべきはエドワード王の佛蘭西征討なるべし。此の役に於てサクソン族とノルマン族とは互に相敬重すべき所以を覺りぬ。例へばサ



クソン歩卒並びに射手は此の時初めて其のノルマン將校の老功と勇武とを知り、ノルマン將校もまた其サクソン兵の不撓不屈なる勇氣を知りて一致協同の重要を感じ漸く互に相依らんとする念を生じき。之れと同時に社交政治等の必要はノルマン族を驅りて自然にサクソンの情感言語を用ひしむるに至りしかばサクソン語次第に勢力を得一千三百六十二年に至りては政府新に令を發して法庭學校等の公なる場處に用ふる國語をすらノルマン語を廢してサクソン語たらしめき。加ふるに一千三百八十年に及びては下に語るショヨン、井クリツフの翻譯せるサクソン語の聖書行はるゝに至りますくサクソン國文學興隆の運を促しぬ。其の以前教會にて用ひられたりしはすべて羅甸文にて成れりきといふ。ショヨン、井クリツフは紀元後一千三百二十四年後醍醐帝の御宇正成在世ヨルクシヨア州なるチリス河畔に生まれ齡十六歳の時ロンドンに出で修學多年の後一千三百七十二年にオクスホオド大學にて神學博士の學位を得て英國宗義革新の曉明星たるの基を立てき。彼れは實に基督教に關して革弊の必要を唱道し信仰の自由を痛論せし卒先者なり。其が著書夥多あるが中に著書は概して羅甸文にてのせり最も新國文學の興

隆に裨益を與へしは前に擧げたる聖書の英譯なりこれ純粹のサクソン語をもて物したるものなり。而して此の英譯書が洽く國內に行はれて彼のラングランドが宗旨の歌『ヒヤース、ゼ、プロウマンが夢物語』とにも上下の人々に讀まれたりし時に當たりて彼れはひとり挺身して激しく羅馬教會を攻撃し其制度教義を刺訛し新に一宗門を建立せんと力めき。然れども當時は羅馬法皇の威力廣大にして時勢はた井クリツフに利ならざりしが爲に空しく中道に於て頓挫し遂に其本願を達すること能はざりしが彼れが國文學の再興と弘布とに關して成就せし功蹟は勤くとも前代に無比なりと稱すべし。

此の時に當たりて英國の威武西歐に冠たり時の國王エドワード三世は方に佛蘭西と戦ひ勝ちて彼の國王ショヨンを虜にし又北のかた蘇格蘭スコットランドを征して其の王ダット、ブルースをも生擒し之れを國都ロンドンに拘致し加之勢威日輪の如き羅馬法皇に抗論して貢を拒み嚴然として四海を睥睨せり。こゝに於てや上の行ふところ下之れに倣ひ國內到る處に新英氣新思想鬱勃と磅礴し恰も新表白をつかさどる新詩人の出世を待つものゝ如し。此の機に乗じて現れしものを



とす。ジョフレイ、チヨウサルは英軍が佛蘭西なるクレシの平原に於て佛軍と戦ひて名高き大勝利を得たりし前六年即ち一千三百四十年にロンドンに生れきといひ傳ふ。其の精確周密なる來歴は之れを知るに由なけれど按ずるは其の父はロンドンなる葡萄製造商ジョン、チヨウサルといふものなりしならん。史家の推定によればチヨウサルはカムブリッジ。オクスホオド等の諸大學に歴遊せしものゝ如し又はじめは狀師たらんの念ありて法學中院の一員たりしともありしが如し。一千三百五十九年齡十九歳のときエドワード三世の外征の役に從ひて佛蘭西に赴きレチエーの攻圍の際敵の爲に虜とせられしが一千三百六十年兩國の和議成るに及びて本國に歸るを得たり。さて二十七歳の時所謂グレンツト（屈從に擧げられ終身二十マルクの扶持を賜はり又時の權家ランカストル公ガウントのジョンに知遇せられ其の後皇后の宮に仕へたりし女房フヒリツバといふを娶りぬ。此の女房の同胞カザンはランカストル公が後妻なりしかばチヨウサルは此の内

縁によりていよく公の扶助を得たり。齡三十歳のとき彼れは外交官に任ぜられ其年より十年間は七たび以上こゝかしこへ公使として派遣せられき。此の官遊の間に彼れは伊太利の諸市を遍歴し有名なるペトラルク（伊太利に會ひて彼れが作中の傑作と稱せらるる『ベシエント、グリゼルダ』チヨウサルの傑作『カントルベ』の原話を聞きぬといふ傳説ありしかはベトラルクの實はホカチオの十日物語に關する種本なるがベシヨウ）さて又一千三百七十四年にはロンドンの港に於ける羊毛、獸皮、柔革及び葡萄酒の輸稅調査の官に任ぜられ自ら帳簿に記入することをつかさどれりし事明證ありとぞ。エドワード三世王崩じてリチャード二世位に即くに及びてチヨウサルは王の侍士（エドワード）の一員となりぬ。後また再び小輸稅の調査官に任ぜられ前の羊毛葡萄酒の調査官をも兼ねたりしが此たびは代役を使ふことを許されければ彼れは十分の餘暇を得て此の時其の傑作『カントルベリ物語』の粗稿（？）を作りきといふ。一千三百八十六年彼れは選ばれてクント州の代議士となりて國會に出でき其のころは代議士といはで某州の士爵と呼びぬ。此の歳は實にチヨウサルが其の青雲の頂點に達して盛えたりし時なり。彼れはガウント



のジョン公爵より給せられたる一年十磅終身の扶持の外に尙種々の扶持及び俸給あり加ふるに特に皇室より賜はれる諸種の恩給ありしかば其の家頗る富み榮えたりき。一千三百八十七年或は此のあたり此のあたり此のあたりに彼れはウツドストックの里に退きこゝにて『カンタルベリー物語』の著作に着手し閑日月を樂しまんとせし間もなく不慮の變動チヨウサルが身上に起り來たりぬ。其ころ國王リチャードは尙いとけなくチヨウサルが無二の保護者ガウントのジョン公爵は權力衰へて國外にありしかば政權は悉く時の攝政クロウスタル公爵の掌裡にありき。かかる此のクロウスタル公爵はチヨウサルと不和なりしかば從來チヨウサルがつかさどれりし官は突然に免ぜられて収入俄に減少せしに其の同じ年チヨウサルが妻みまかりぬ。或は謂ふ此の際國事犯の嫌疑を受けてロンドン獄に投ぜられき。いづれにもせよ此れ彼れが最不幸の期なりき。さりながら後幾ばくもなくてリチャード王が政を親するに至りてチヨウサル又殊遇を蒙り一千三百九十四年には一年二十磅の終身扶持を賜ひ同じ九十九年には嗣王ヘンリー四世より之れを倍にすといふ恩命を得き。一千四百年十月廿五日エントミンスタルの

家にて死す齡六十歳後小松帝御宇金剛寺落成後三年。

チヨウサルは英國文學の紫式部とも稱すべし。彼れが傑作『カンタルベリー物語』の長篇は其の古文の軌範たると同時に万古不易の價值を有して後人に推重せらるゝところ其の質の甚しく我が『源語』と異なるにも拘らず又彼れは律語に成り此れは散文に成れるにも係らず將作者の性の相同じからざるにも關らず其の國文に於ける地位は二者頗る相似たり。思ふに世に謂ふ四大英詩人のうち客觀詩人としてシェイクスピアに次ぐものはチヨウサルなるべし。

案ずるにチヨウサルは十四世紀中の何人よりも最も廣く又最も雜駁に人世を経験せし者なるべし。彼れは狀師たり武人たり廷臣たり外交官たり國會議員たり實務家たり又詩人たりき。此等の諸點に於ては其の境遇或はスペンサルに比すべく或はミルトンに比すべく或はシェイクスピアに比すべし。要するに其の豊富なる經見と其の事業とが彼れをして上は王侯の尊きより下は最下等に勞力者の賤しきに至るまでの諸階級の諸種の人々に密接することを得しめ大僧正、僧正等の風采性癖をも法庭の吏員若しくは市井の賤民が諸の特質にも通せしめき。



而して此等泰平、戦亂、教會、武事、政事、社交、國內、國外、富貴、貧賤、榮達、落魄の諸種の境遇に於ける彼れが實驗はすべて溶解せる黄金白金の流と化して其の傑作『カンタルベリ』物語に注入せられたり。彼れは人生の快活、晴朗なる方面も、幽鬱、暗澹たる方面も、双ながらいと備に觀破して公平周到に描きたり。其の觀察の陂險ならで普遍圓滿なるところ頗るシエイクスピアの無私無偏なるに似たり。就中その從容優樂、温厚端雅なるところ古今能く及ぶもの鮮し。只彼のシエイクスピアは且廣く且遠きにチヨウサルはひとり其の前者を縦にして後者を自在にする能はざりしのみ。予は此の略史に於て此の大詩人の明細なる月旦を試むべき餘地なければ爰には一二の批評家の言を引抄して讀者の參照に供し且其の文致の大要を評しやがて彼れが諸著の談に移るべし。

ハズリットはチヨウサルを評して曰はく、チヨウサルは諸大詩人中最も實際の事に長じたる者なりき最も實務に老い最も世故に通じたる者なりき。彼れが詩を讀めば正史を讀む心地す。米國の詩人ロウエルもまた曰はく、チヨウサルは猶陽春のごとし新鮮しき氣と青々としたる句とが其の全篇に漲れり。彼れの觸る

しや物皆忽焉として満開の花となる。彼れの悅樂と諷諧と悲哀とは譬へば一の噴水泉の如く抑えどいむべからざるの概あり。チヨウサルが作を讀むは旭のいまだ上らざるに露深き千艸を分けて行くらん如し物皆新しく艶しくかぐわし。彼れが第一の長所は諸術の最も重なる誠實なり、彼れは強に旨意の深からんをば寫し、いれさんと力めざれど本來明瞭なる旨意其の心にあるがゆゑに寫し、いれさるゝ所の物皆おのづから明瞭なる象を具す。彼れは最も虛式を脱したる公明質直の詩人なり。尙チヨウサルに就きての最近年の批評を代表するものは『ヨウソヘールズ』の『毎週評論』三年八月の號に載せたるものなるべし。ヘールズはチヨウサルとシエイクスピアとを對照して前者を小シエイクスピアと稱せり。案ずるにチヨウサルの文致は善く其の想念と符合したり。彼れが文致は質樸平易なり其の特質は誠實なり。彼れは一事一物を寫さん爲に詞句を作らんと力めたることなし。彼れはさながらに直に狀寫す其の辭は皆最も單純なるものなり而して其の狀寫の精緻にして其の細微の眞實をすら誤らざる所殆ど寫眞術に似たり。其の文談諧に宜しく又感慨によるしく其の律調もまたいと妙なり。加ふ



るに彼れは當代に於ける最も廣大なる語林を領したり。彼れの豊富なる詞藻は  
一は内外の書籍に起源し一は其現在生活の經驗に由來せり。さてチヨウサルが  
最も多く用ひたる律格は五歩の有脚韻低昂格なり作詩法に謂ふ昂起五步格なり。

昂起五步格又五歩の低昂格といふは低音と昂音との一聯を以て一組となすこと猶ほ  
平聲と仄聲とを以て一組となすがごとくして之れを五組作りて一句とする格なりさ  
れば一句のうちに昂音五つと低音五つとあるを定格とすれど低音は増加するも妨な  
きものとす我が國歌にア行の聲の字餘を許すと同理なり其の詳細は作詩法の大要を  
説かざれば解しがたかるければ今説明するに由なれど大體をいへば

低昂低昂低昂低昂低昂

さやうに十音相連りて一句をなすを低昂五步格といふ支那の詩の平平仄仄平平を  
以て平起格の正式の起句とするがごとくして英語にては此の格を句毎に用ふるを  
通例とすさて脚韻ある時は之れを英雄律格といふは勇ましき物語歌に應じ用ひら  
れたるに由る二つにはさるたぐひの詩に用ひて宜しきが故なり又脚韻無き時は没韻  
律格といふ。

此の律格はほゞ我が五七又は七五調に相當し最も多く彼の國の詩人に用ひられたる  
格なれど古來チヨウサルは此の格を自在に用ひたるはなかるべし同ト五七又は七  
五の調にても用ふる人の技倆次第にて千句一律の單調ともなり波瀾多き句拍子とも

チヨウサルの傑作

チヨウサルが壯年の諸作は主に羅句并びに佛蘭西の諸名作の翻譯たるに過ぎず。  
こはチヨウサル又は英國の詩人に限りたることにあらで總て此のところには創作  
といふことは極めて稀なりしなり佛、伊、英等の作家は常に互に其の思想と文章と  
を相貸借したりき。チヨウサルの如きものはじめは佛蘭西の物語を祖として著譯  
し中ごろ伊太利に官遊して多く彼の地の名著(就中ボカチオの作)を讀むに及びて  
深く其旨の微妙なるに感じ翻然伊太利風の詩人となりしが千三百八十四年以後  
に至りてはまた大に悟る所ありてにや斷然伊太利風の詩歌をも抛擲して純粹の  
英國詩人となりぬ。これ即ち其の傑作『カンタルベリ物語』の成りし時なり。此  
の作の梗概は下に説くべきがまづ第二等以下の作のあらましをいへば長篇のも  
ののうち八篇は純粹なる外國の傳奇歌を翻譯又は翻案せるものにて三篇は伊太  
利風の物語歌を模範として作りたるものなり。所謂八篇とは『薔薇花物語』『戀の  
宮』『食の議會』『郭公とナイチンゲール』『花と葉』チヨウサルの夢』公爵夫人の



書『魯の殿』をいひ三篇とは『善女物語』『トロイラスとクレシイド』『アネライダとアルサイト』をいふ昔物語歌なり。但し最近の精査によれば此の八篇のうち『戀の宮』『郭公』『花と葉』『チヨウサル』の『夢』等は後人の作に係り之れをチヨウサルの作とせしは甚しき謬傳なりといふ。總じてこのころは寓意の物語いたく行はれたり例へば『薔薇花物語』の如きはもと佛蘭西に行はれたりし比喩の物語歌なるが其の主人公が夢のうちを得んと力むる魔力をもてる薔薇花は正しく情人に比したるにて花園は即ち世間なり而して全體を作者又は人物の夢に取做したる曲亭前後の作にありがちなる夢物語の趣向と同一なり。憎怨、貪吝、悲哀、貧窮、懶惰などいふ特質も各々或表章を得て篇中に活動せり。『禽の議會』『花と葉』『魯の殿』なども多少相似たる筋立なり。例へば『花と葉』にては花は色々のものに擬せられたれど概していへば假美又は浮きたる快樂を代表し葉は眞實の美即ち淑徳及び精勵になぞらへたりとさばし。爰には此等物語歌のあらましの筋をも擧ぐる能はず。チヨウサルの最大傑作は『カンタルベリー物語』なり。此の作は十四世紀に於ける英吉利の國民的敘事詩とも稱すべきものにて其の意匠の根底は伊太利の詩人ホ

カチオが十日物語に胚胎したると明なれど其の精神は大に異なれり。『十日物語』は伊太利のフロレンスに悪疫の流行しける時そを市外に避けたる七人の宮女と三人の紳士とが徒然を慰めんとてかたみ代りに物したる物語を集めたるやうに取做したる趣向なれどチヨウサルのは英京ロンドンよりカンタルベリーの聖院に賽詣せんとする都合三十五人の香客が旅途の無聊を慰めんとて馬上にて物語りたる面白き小話を集めたるやうに作り做せり。さて此等の物語は一つ一つに引離して見るも江島屋、八文字屋又は西鶴又は『今昔物語』『宇治拾遺』などの最も面白き小話を讀むが如き興趣あるのみにあらず其の物語る人物の人品と物語の筋どがいとよく調和してさながら個々の特質ある人々の直話を聞くらんやうの趣あれば旨味ひとしほに深し。加ふるに旅行の途次に種々の出来事あり且また香客が種々の物語に就きての種々の批評さへ巧に綴りあはせられたれば一種の複雑なる旅行記としても見どころあり。此の作の發端の巻をプロ、リーグといふ。プロ、リーグとは序の巻の義なり。此の巻のはじめに春景色の簡淨靈活なる叙狀ありさて作者が其のころの習慣にまたがひてカンタルベリーなるトマス、ア、ベケット尊







進めながら我がいふ所を離れ、その言葉の下より一同馬を進むれば彼れはやがていさたのしげに其の物語をはり下りの如くにぞ語りける

此の最後の句は實に序の卷第八百六十行目の句にて本編の緒なり。文字の綴りかたの如何ばかり近世の英語のと異なれるかはこゝに挙げたる一節によりても察せらるべし。本編の筋は諸香客がいまださしてゆくカンタルベリーの聖院に達せざるうちに中絶したれども一種の物語毎に序の卷添はりて前後の連絡を整へたれば頗る長く而して其の間に物せられたる二十四種の物語のうち下の四編のごときはそれのみ引きはなして見るも尙十二分の趣味あり。總じて物語は律語にてもものせられたれど寺領僧のとチヨウサルの第二の物語とのみは散文なり。又律語の如きも一つ／＼に調の變化ありて絶えて一律單調の弊に流れたることなしといふ、こゝは學者の定説なり、これ一は物語の旨趣の千變万化なるにも由れるなるべし。チヨウサルは實に詞藻に富みたるのみにあらで談諧にも悲哀にも長じたり。四傑

作のうち

「パルモン、アサイト物語」

は士爵の語れる最も長き最も哀絶なる物語にて

「カスヤン、カスヤン物語」

は法律家の語れるいと美しく且哀なる物語なり。又

「カナヒ物語」

は侍士の語れるものにて物すごく勇ましくうつくしく有名なる

「グリセルド堪忍物語」

はオクスホオアの學者が語れるものにて其の源はボカチオよりいでたれどチヨウサルの想像添はりて一段の光彩を増し貞女の神貌躍如たり。評者間と此の篇をもてチヨウサルが傑作と稱す。今こゝに此等物語の大要をも叙すること能はざれど所詮チヨウサルの美なる所以はもとより物語の筋にあらねば大要を叙すとも甲斐なかるべし。且や此等物語の筋は概してチヨウサルが創案にはあらず。例へば士爵の物語の如きも明にボカチオのシセイダ物語に基き法律家の物語の



如きも作者の友たりし同代の詩人ジョシ、カウアルの作を元とせりかゝるたぐひ  
 數ふるに違あらず。後世の詩人若は、ジョウサルの此の物語の或部分を近世  
 律語に翻譯せんと試みつれど、ジョウサルの如きは全く失敗しタルズニス、の如  
 きすらも尙原作の妙に及ぶこと能はざりき以て此の物語の美妙は専らジョウサ  
 ルの天才に原因せむことを知るべし。ジョウサルの翻譯體は、其の體裁を以て  
 并白ウサルの物せり散文の作も若干あれど取柄いせりいふべきほどにあらねば  
 茲には省きつ。ジョウサルの翻譯體は、其の體裁を以て

同代の詩文人ジョウサルの作を元とせりかゝるたぐひ  
 チヨウサルと同時の名を著し、詩文人からざれど其の等位は假に下れり。散  
 文にては、ジョウサルの外にジョウサ、ジョウサ、ジョウサと士爵ジョウ、マンドギルとあり。  
 詩人にはジョウ、カウアルとジョウ、バアポウルと非リアム、ラングランドとあり。  
 カウアルは其の傑作『ジョウ、カウアル』をもて名を知られラングランド  
 は其の作『ジョウ、カウアル』の夢『物語にて、バアポウルは一二の史詩によりて  
 其の名を傳へたり。』ジョウ、カウアルの趣向は懺悔をつかさどる僧が

一情人を訓誨せんが爲にくさく、の物語をすといふにありて大體は『カンタルベ  
 リ』の物語にひとしき物語集たるに外ならねど作者の手腕も想像もいたくジョウ  
 サルに劣りたれば物語は、平坦に流れ剩り純然たる箇々別々の小話となり  
 たり。ラングランドの傑作は例の夢物語の趣向なり、ピアルスとは近世語に謂ふ  
 ピョタルの義にて人名なり、アラウマンとは農夫の義なり即ち作者が此の假名を  
 戴きて此の篇の主人公となれるなり此の作の筋立は、夢想兵衛蝴蝶物語など  
 にひとし。ピアルスが五月のあるあしたマルセルンが岡にてうたゝねしたる間  
 に二十種の夢を見るといふが發端なり其の着想は、パンヤンの『天路歷程』に似たり  
 とのことなり即ち宗旨の隱喻物語なり。ジョウ、カウアルの僧ラル、ピョタルが羅甸文の『列國史』を翻譯し  
 て一世に譽を得、ジョウ、マンドギルは三十四年間海外に漫遊し歸國の後羅甸文を  
 もて一大紀行を綴り更にそを佛文と英文とに翻譯して冷く世間に示しき。此の  
 書は主に基督が靈地ジョエルサレムの里に到る道路の案内を明に記したるものなれ  
 ど作者が漫遊中に見聞せる事物を悉く併せ録したれば極東は支那地方のことに







と此の業の英國に行はるゝに至りしは一千四百七十四年をはじめとす即ち日耳曼人が活字を用ふることを發明せし後凡そ三十一年なり我が應仁亂平定の後一年即ち文明六年に當たる。英國にての最初の印刷所は今のエズトミンヌアル院の近傍にありき。はじめて印刷せられしは我が象棋に類したる遊戯の指南書なりしがあひくゝに有用なる書類をも出版するにいたりき。されど一方に於ては宗旨上の議論かしましく一方に於ては荒唐なる傳奇小説を喜ぶの念いまだ衰へざりしかば當時印刷せられしは概して宗旨の書と奇傳となり。チヨウサル、カウアル、リドゲート等の傑作も此の際多く印刷せられて後世に傳はりたり。一千四百七十一年より同九十一年までに印刷せられし書は六十三種以上なりきといふ此等の書の多數は佛蘭西又は羅甸の書の翻譯にてオクストンみづから物せしものいとも多かり。一千四百八十二年に彼れが再譯して出版せし『列國史』は『クアテンの』『ボム各邦ニヨシ』にて曾てトレサが翻譯せしものゝ再譯なりトレサが彼の書を譯せしは六千三百五十年にて此の時をさること僅に百三十年ほどに過ぎざりけれど國語の變遷の頻

りなりしが爲に此の舉ありき。言文二途の國にてはかゝる必要をおぼゆること稀なれど他の國の文章は言文一致なるだけに百餘年を経れば殆ど解すべからざることを問あるなり。

### 文運復興の遠因

案ずるに印刷術の發明は後のエリザベス文學を誘致すべき一大遠因なりしこと疑なし。チヨウサル死後の百餘年は實に名高き黨激亂の起こりし時代にてさらぬだに民心一日も安ぜざりしに一方にては宗教改革の氣焰漸く盛になりて物情騒然たりしかば皮相より觀れば學問の道は地を拂ふべかりし筈なれど實際はさもなくて却りて古文學の研究盛に行はれき。これ一は印刷術の便宜に由り、一は當代の大勢の然らしめし所なり。もとより第十五世紀の末三分の二の間には創作と稱すべき詩文の寥々として晨星の微なるにも劣りたりしことは事實なれど文學研究の熱度はなか／＼に奮に倍しヨオク家とランカストル家との間に起こりし系統の争は前にいへる薔薇亂の慘刻を襲し我が南北朝の争亂にひとしく此の國の全局を騷擾せしことも事實なれど書を讀み文をもてあそぶの心は毫もこ



れが爲に滅せざりき。現にヘンリー六世王、エドワード四世王をはじめとして當代の諸侯のうち、深く書を好み文を愛せしもの夥多あり例へばグロースタルの公爵ハムフレードのごときは領内處々に圖書館を設立しわざく伊太利より博學の士を招聘し盛に希臘の古書を譯せしめき又ウィスタル伯ジョン、リンコルンの僧ロバート、フレミンクなどは頗る傑出せる宏學の士にてみづから希臘羅馬の古書を翻譯し若しくは世に稀なる謄寫本を蒐集して英國の圖書を増加せしこと尠少ならず。而して此の古學熱の漸く此の國に盛ならんとせし時に當たりて所謂學藝復興の大勢伊太利地方に發源して不學蒙昧の堤防を破り英國の文壇に傾瀉し來たりぬ。所謂學藝復興とは原語にリネサンスといふものにて西歐文學史を講ずる者の決して忘るべからざる大事實也。其の由來をいへば土耳其蠻族今の土耳古帝の祖なり。東羅馬帝國の所領を蠶食し竟に其の首都コンスタンチノープルをおとしいる。東羅馬帝國又は希臘帝國とも稱す。當時學問藝術の淵源たりさればコンスタンチノープルのおちあるや希臘帝國の治下にありし多數の學者詞客皆急に亂を避けて伊太利國に走り其の生計を維持せん爲にフロレンスの諸

蠻舎にて専ら古文學を講じたりしが此の事ゆくりなくも不學の蒙霧を拂ふべき學問の曙光となりしなり。これはこれ千四百五十三年足利義政以後の事なり。其のころ英國の學者等は多く山川千里を遠しとせざして伊太利に學遊し此等希臘の古學者に就きて親しく古文學を學びければ其の果年を経て次第にあらはれ希臘羅馬の名著陸續相つぎて英文に翻譯せられ後の諸創作の好標本を作りぬ。エリザベス朝の文學はふと見れば突爾に起こりしが如くなれど遠く此の標本製作の時代に胚胎したりしこと明なり

### ヘンリー八世の朝

ヘンリー八世王はスチュアルト系統第二の君にてエリザベス女王の父なり一千五百〇九年位に即きぬ我が後柏原天皇の御宇足利義植復任の第二年に當たり。王學を好み文を善くせり。ルーテルが宗教改革論の強盛なるや王一篇の辯難を作りて大に新教を破す羅馬法皇其の功徳を稱美して王に贈るに「教會の干城」といふ榮號をもてしき。王の朝は獨逸なる宗教改革の潮流の漸く英國に注入せんとしたりし時期なり此の際に於て文學はた一百年の懶眠を破りて大に興起せんと



せる姿あり。現に一千五百年より次第に宗教革新の機運の盛になりし一千五百十七八年の頃までに高等學校の新設せられしもの、二十箇所に及びしをもても教育講學の盛大になりしを見るべし。此の際有名なる和國オランダの碩學デシグリアスエラスマスErasmusの佛のバリーより此の國に來遊して學問を奨励するあり且宰相ウエルシーの大に公財を擲ちて講學の便宜を補くるなどのことありて古文學研鑽の道次第に弘通し、ケムブリッジの大學の如きもチーク並びにスミスといふ兩學者の盡力によりて此のころ大に發達し、擧ぐとも希臘文學の講習に於てはオクスホオド大學をすら凌ぐに至りき。さて此の新學問の太氣のうち最初に發育せしものは散文の文學にして其の最も卓越せる代表者を士爵トマス、モリアとす。士爵トマス、モリアはチヨウサルChaucerの生誕後一百四十一年に英京ロンドンにて生まれたり。さて十五歳の時カンタルベリーの大僧正たりしジョン、モルトンの侍童となり其の庇によりてオクスホオドの大學に入り此の國にてはじめて希臘語を教へし學者グロウソンといふに従ひて古文學を修め彼の碩學エラスマスとも屢々交遊し其の後大學を去るに及びては在家僧となり法律家となり代狀師となり法學

講師となりロンドン市の判官代となり衆議院議官となり竟には衆議院の議長となりき。かくて又ヘンリー八世の御宇に至りては次第に登用せられ終に最高法官の榮職にまでも經登りけるが史に有名なるアンブリーソンAmbrisonに關する結婚上の紛議起るに及びてヘンリー王の忌諱に觸れて辭職し後更に王の爲に憎まれて咎を得、罪なうして斬に處せられき時に千五百三十五年六月。モリア爲人廉正高潔學博く才秀で而して胸懷頗る洒落頓才に名ありき。傳にいふ彼れの將に斬首せられんとするや莞爾として太刀取を顧みていはく此の髯何等の罪もなきに主と共に斬られんこと憫れむべしまばらく猶豫を與へよとて徐に長髯を掻きのけてやがて斷頭臺に其の頭を横よこたへきと以て其の死に臨めるまでも磊々たりしを見るべし。

モリアが著作の中最も重立ちたるは千五百十三年に物しきと傳へたる『エドワード五世紀』と『リチャード三世紀』となり。件の二紀の材料は大僧正モルトンが供せし者にて所謂原史とも稱するに足る者なればにや多少の甚しき政治上の偏見の爲に事實の謬寫せられたるにも係らず學者大抵は此の二紀を稱美して眞の英語



もて綴られたる最初の正史なりとせり。ハラムの如きも此の二紀の文章を評して善良なる英語の最初の模範なりとし純正明晰精選なる文字、卑野の嫌なく街學の弊無しとたゞへたり蓋し當代の諸著は動もすれば古文學上の要無き引抄をもて充塞せられ花多くして實乏しく大かたは浮誇街學の嫌多かるにひとりモーアの作のみは能く此の醜をまぬがれたればなるべし。シェイクスピアの史劇『リチャード三世』は全くモーアの『リチャード三世』を基礎とせるなり。千五百十六年に至りモーア更に一書を著し『ユートーピア』と題しき彼れの最も善く後世に知られたるは此の『ユートーピア』によりてなり。此の書もとは羅甸文にて物したりしが千五百五十一年に至りてラルフ、ロビンソンといふもの之れを英文に譯して流布せしめき今廣くもてはやさるゝは件の譯書なり。そもく『ユートーピア』は希臘語にてあらぬ處といふ義なり即ち作者は此の無何有郷をもて一種の理想的共和國を代表せしめやゝ小説めく筆法をもて子細に理想的制度文物風俗人情を狀寫せり。モーアの記する所によれば『ユートーピア』といへるは半月形をなせる孤島にて長さは二百英里、市の數は五十有四、皆相ひとしきものなり島中いづこにゆ

くも酒樓といふものなく狀師といふもの無し又流行の變易といふこと無く虚飾の行はるゝこと無し粧飾用の珠玉又は浮靡華麗なる綺羅を着することはひとり幼少の間にのみ行はれたり。又人々皆寡欲にて敢て奢侈贅澤を樂はざれば島民が一日の勞働時間六時に越ゆるの必要無し且富豪は獵をみづからせで之れを屠丁に一任す。戦争は流石に絶えたるにあらぬと將軍は人を殺すことの拙くて勝利を得るをば最も大なる譽とせり。又金銀珠玉に心を牽かるゝ者絶えて無し罪人も死刑に處せらるゝこと嘗て無し彼等は皆奴とせられて傭役に従事す。彼等は或特殊なる衣服を着す其の耳の端を切り取られたるが罪人の證なりさはれはしいまゝに逃走する時には刑せらるゝことあり。宗教は總じて自由なり云々。以上は大畧の大畧たるに過ぎざれどほのかに作者の理想の在る所を察するに足るべし。要するに此の作は著く十六世紀の時勢を反映したるもの蓋し當代の著書尠からずといへどもモーアが『ユートーピア』ほどに當時の新學問が喚起せりし生活、社交、政治、宗教等に關する諸種の新問題と新概念とを著く反射し得たるものは殆ど無し。又理想國を想像して狀寫せるものは東西古今に其の例あまたあれ



ど英國にてはモリアのを最も古しとす所詮『エートピア』は英國に於ける學藝復興熱の頂點を代表する者と評すべし。

併しながら英國散文のかくの如く俄に進歩せしは一は國王ヘンリー八世の保護獎勵の餘澤なりといふべし。佛の史家フルワザールの有名なる封建期の歴史をベルナルス卿をして翻譯せしめしも王なり又教育制度の改善に就きて士爵トマス、エリオットを扶助し并に不學蒙昧なる國俗を樂しません爲めにとて専ら俗語をもて著述することを同じ人に勤めしも王なり。或は古學家リランドを獎勵し或はロイヤル、アスカムを外國に遣はして新知識を英國に輸入せしめしもまた王の意より出でたり。アスカムは當代屈指の古文學者にて後に有名なる『學師』といふ書を著しし者なり。

ヘンリー八世の朝に至りて新學問の氣焔上にいへる如く盛なりしが新舊兩教の軋轢の漸く酷しきに至りしや學問の進歩又まばらく停滞せり。されど又一方より見れば彼の井リアム、チンデールが『新約全書』を翻譯して(千五百二十五年)英語の確然たる基礎と標準とを定むるに至りしは其の實此の軋轢の結果なれば件の宗

教上の鬭争も強に文學の發暢を妨害せしものとはいふべからず。チンデールは當時の散文家中に鋒々たりしもの、マリンは彼れが著を評していはく「チンデールが『新約全書』の翻譯は第十六世紀の初半に於ける最も最要なる言語學上の記念碑なり否あるひはチヨウサルとシエイクスピアとの間にあらはれたる最も大切な記念碑なりといふを得べし第一に歴史的遺物にして大切なり第二には英語もて神聖なる『バイブル』を翻譯するの格式を定めたるが故に大切なり一千六百十一年に成りし『聖書』の翻譯の最良なる形象は總じてチンデールの翻譯に由來したり云々と。チンデールの用語はいづれも普通俗平易なる英國語なり彼れは力めて羅典語をも佛蘭語をも避けたり。彼れの文章と近世の英文とを對照するに其の相異なる所は殆ど綴字法にのみ限られたりといふことを得べし。左に其の例一二章を掲ぐ。

A certayne man descended from Jerusalem into Jericho And fell into the hondes of thevës whych robbed him off his rayment and wounded hym and departed levyng him halfe dead. And yt chaused that there cam a certayne preste that same waye and save hym and passet by.



思ふに綴字法の相異は猶我が假名づかひの相異のごとし外面のみを見ればチン  
 ナールの文と近文との間にはいと著き相異あるが如くなれど文脈語格の上より  
 見れば二者殆ど相異なる所なからんとす。而して件の翻譯は廣く當世に行はれ  
 たりしものなれば其の直接並びに間接に英語英文の上に及ばざりし影響の少  
 らざりしこと想見するに堪へたり。さて此の時に當たりて詩歌世界の模様はいか  
 なりしかといふに韻語は尙依然として不振の姿なりき。已に前にもいへる如く大詩人  
 チョウサル去りて後はまた彼れに及ぶべき俊豪のいづると無く偶々英才のあらはるゝ  
 とありしも彼等は皆徒に舊套を襲ひて只管にチョウサルの驥尾を追へりき。ヘンリー七世  
 王の朝に名聲ありしスチーヴン、ハウエス並びにジョン、ステルTONの如きも總じて  
 チョウサルの摸倣者なりき。其中ステルトンは中ごろ宗教改革の風潮に鼓吹せられ  
 翻然覺悟する所ありて更に一家の機軸を出だしをさく宗教上の自由を歌ひし  
 が其の作漸く詩歌の本領に遠ざかりしかば作家はた竟に大詩人と稱せらるゝに  
 至らざりき。

此の際蘇國の詩歌は日と發達の運に向かへり。蘇國はもと英國人と同じくケル  
 トン族の棲める國なりしがサクソン族の英に入りて後は英蘇の差別やうやく著  
 くなりゆき隨うて彼等の作る所の詩歌と英國のとは頗る相異なる質を具するに  
 至りき。其の一因は人情習俗の相同じからぬに在ること勿論ならめど一は彼の  
 國民の愛國心のいちじるく強かりしゆゑなるべし。案ずるに蘇國も英國も元は  
 共に獨立の王國なりしが蘇は動もすれば英の爲に凌虐せられて自由を失ひしこ  
 とも間々ありしかば彼れが自由獨立を重ずるの念はあつたから一層深かりしな  
 り是れ或は幾多有爲なる詞傑を此の國よりいだまし所以ならんか。其のはじめ  
 は蘇の詩人も大抵はチョウサルの摸倣者たるに過ぎざりしが有名なる士爵ギ  
 ヲフ、リンドセイのいづるに及びて詩歌の新天地にわかにかかれそれよりこのか  
 たますく進歩の運に向かひき。リンドセイは千四百九十年に生まれて種々の  
 作ありき彼れは英のステルトンと同じくをさく宗教上の自由の爲に唱歌せし  
 ものなり。併しながらリンドセイとステルトンとは只管に宗教上の事に熱心な  
 りしあまり兎角に詩歌を教化の機關の如くなしそれが爲に詩歌の本領をそこな



ひし趣ありこれ蓋し此の二人が秀でたる詩才ありながら竟に大名を成し得ざりし所以なるべし。……さるほどにヘンリー八世の御宇の末に至りて時機漸く熟して三個の新詞傑世にいでたり士爵トマス、ウィヤットと伯爵サリーとは是れなり。……ウィヤットとサリーとウィヤットとは二人ながら當代の精神にて共に久しく伊太利に遊びてかしの新詩學に薰染し其の本國に歸り來しや大に新體の詩の興とさるべきを唱へ詞壇の革新に従事しみづから其の率先者となりしものなり。近世に行はるゝ律格は概して此の二人の創始せし所なりともいふを得べし。二人共に抒情詩風の作に秀でたりウィヤットの作は深沈にして嚴格、サリーのは快活にして優婉なり。而して彼等の創唱せし詩歌の新體は所謂 *Amourist poetry* (戀の歌) なり即ち其の主題は男女の相思、其の中に含まれたる觀念はプラトンの哲理、其の師表は伊太利の詞宗ペトラルコなり。彼等が一たび此の戀歌の緒を發きしや此の體一般に流行し其の體に倣ふもの輩出せりワトソン、シドニー、ジェイクスピア、スペンサー

ル等の十四行體は總じてサリー等のと同旨同格のものなり。さてウィヤットとサリーとの功績はたゞに上にいへるのみにあらず就中サリーの如きは伊のヴルツルの『エミヤス物語』を翻譯するに當たりて其の第二篇と第四篇とに於て十音の無韻律語を創用して律語の自由を擴張するの緒を發きたり。たゞしサリーの用ひたる無韻律語は甚だ亂雜なるものなりしと勿論なりされど其の後彼のカスコインが之れを其の諷刺詩に應用しマアロウが其の傑作『タムバルレイン』の劇に利用し又マエークスピア、ボームント並びにマツシツヤルが之れを其の脚本に於て如意自在に使用するに及びて驚くべく便宜なる一種の格式となりぬ。さりながら其の正當の詩歌(敘事詩、抒情詩)に於て巧妙自在に利用せらるゝに至りしはマヨン、ミルトンいでも後のことなりとす。之れを要するにサリーとウィヤットとは創才の詩人としては大に重ざるに足らざるべけれど其の殆ど一定の詩律學無かりし時に生れては、調律の格式を整頓し且詩人の着想を一變せし功は没すべからざるなり。蓋し此の二人以前の詞壇に於ては寓意比喩の詩歌のみ盛に行はれ偶々男女の戀愛を歌へるものなきにあ



らぬと彼等は昔中古時代に行はれたりし通有の人情をほのめかしたるものにて活きたる感慨といはんよりはむしろ抽象的人情抽象的戀愛に種々の彩色を施して表現せる者ともいふべし。換言すれば活ける個人性パーソナリティといふもの殆ど感慨の詞句の中に見をざりしなり。酷評すれば彼等の作の多數は我が衷心の誠を表白せずしてむしろ在り來りの人情を歌ひたる趣あり。サリーとワイヤットとの相思歌は然らず直に我が衷心の苦惱を吐き思はぬを思ふ哀れを歌ひ聴く者をして句々言々悉く皆血肉かと思はしむるの概あり。すなはちサリー、ワイヤット以後の英國の詩歌はやゝ寫實の傾向を帯び來たりと雖も個人性の表白を旨とするに至れり。

サリー、ワイヤット以後チヨウナルを模倣する弊やうやく滅びてこゝに詩歌の氣運一變するに至りしがエドワード六世の朝とメリー女王の朝とは宗教上の動搖甚しく且之れに對する政府の處置酷薄を極めしかば詞壇の進歩はた之れが爲に障礙せられ再び停滯の姿ありき。是かれどもそは只一時の妨害たるにとゞまり一千五百五十九年にエリザベス女王の位に即くや恰も陽氣の來復を待てりし春

林の百花の如く詩歌文章一時に燦然として煥發し古今無比の偉觀を現じき。次々に説く所を見よ。

## 第二篇 エリザベス朝の文學

### 第一章 本篇の細分

サリー、ワイヤットの二人はエリザベス女王即位の年に少しく先さきちて其の諸作を公にせりきされども所謂エリザベス朝の文學を先導せしものは彼等二人なること明なれば史家或は彼等をもエリザベス朝の詞傑中に列せんとせり。されば叙事の順序を明瞭にせんにはエリザベス女王即位の年をもてエリザベス文學の第一年とせんかた穩なるべくや。さて此の區分に據る時は即位の當年即ち一千五百五十九年より我が永祿二年上杉輝元同七十九年まではエリザベス文學の第一期にて七十九年より一千六百二十五年までは其の第二期なり第二期はスペンサル、シエークスピア、ジョンソン等の盛えし時代なり。通常世人がエリザベス文學と特稱してもてはやせる諸傑作は總じて此の第二期中の作物なり。

さて第二期の文運の興隆は古今に比類なきばかりに盛なりしのみならずと見



れば其の俄然として起こりたるが恰も旭日の忽然と輝きいでたらんが如くなりしかば論者或は其の原因を求めかねて漠然と之れを天下の大勢に歸し全歐に於ける所謂學藝復興の餘波たるに外ならずと播撫に論じ去りたる者もあれど子細に考察すれば其の興隆に至れる次第并々整々として鑿々因縁を指すことを得べきなり。さればエリザベス朝の情勢を總論せん前にまづあらかじめ第一期の景勢を叙するを可とす蓋し第一期即ち第二期に先てる二十年間の作業のスペインサルシエリクスピタゴリソン等を生ずるに至りし最近の因縁なること明なればなり。

さて此の旨意にて叙説するに當たりては此の朝の文學を第一期と第二期とに分かつの外に梨園及び劇の詩(脚本)に關する事を別にして叙説するを便宜とす。蓋し當朝の文學は其の品類いと豊富にて律語も散文もこちたきたぐひの文學も洒落なるたぐひの文學も殆ど皆備はりたれど秀でて豊なりしは劇壇の諸作なり現に劇の詩の作家は十をもて數へ其の傑作のみを擧ぐるも四十餘篇に越えたれば他の詩文と混じて叙説せんは徒に紛雜を醸さんの恐あり。此の故に予は此の朝

の叙説を分かちて三段とす左の如し。

第一期 エリザベス文學 一千七百五十九年まで

第二期 エリザベス文學 一千七百五十九年まで

劇壇并びに脚本家

英國劇の起原に至りしまで

### 第二章 第一期エリザベス文學

上に説ける如く第一期の諸作業は第二期の業因なり第二期の傑作は偶然に生ぜしにあらず。第一期に於ける文學は總て當代の新想念を種子とし上古期の末に注入せられし諸種の豊なる肥料に育成せられしものなり而して第二期の文學はエリザベス時代の文學を一箇の有機體として見るときはこの種子の次第に發生暢達して花を着け實を結びしに外ならず。まづ第一期中にあらはれし重なる著譯を列擧して文學の如何に進歩しつゝありしかを示すべし。

### 詩歌

第一期中に録々たるものはパツクハルスト脚トマス、サツクギルとシオルツ、ガスコインとなり。サツクギルは『治者の鏡』と題したる長篇の物語歌を著して名あり。



彼れは一千五百三十六年サセックス州ベックハルストにて生れたり名族の出なり。はじめオクスホオドに修學し後にカムブリッヅに移り又法學内院インナー・テンプルに入り壯うして結婚し外國に歴遊し文壇に名を知られ三十一歳の時にベックハルスト卿となり多年の間エリザベス女王の重立ちたる顧問となりて政治の樞要に當たり女王崩じジョージマス王即位するに及びてはドルロットの伯爵に叙せられ一千六百〇八年に逝りき。其の傑作『治者の鏡』は専ら榮華名譽の浮雲の如く頼み難き由を英國の史に見えたる多數の悲しむべき實例によりて證明し君長の淑徳を奨誘せんとなるなり即ち明に教誨を旨としたる物語歌の一種なり。此の書はじめは非リア、ボヤド、井ンといふものゝ編輯出版に係りしが其の後五十年間に蛇足の作を添ふるものあまたいで來て近世に傳はれるは甚しき玉石の混淆にてふと見ればいづれをサックギルの作とも分きかねれど學者の定説によれば Induction (緒言) と題したる篇と、ベッキンガムの述懐とはたしかにサックギルの筆に成れりとぞ。最近の出版に係る『エリザベス文學史』の著者ツオルツ、セイソツペリーの如きは『治者の鏡』に載せたるサックギルの物語歌を評してサリー、ワイヤット等の新詩體の影響を蒙ら

ざる舊格の物語歌とし且チヨウサルとスペインサルとの間に於て英語にて物せられたる最良の詩なりと稱しスペインサルの最傑作の幾分は拙くとも此のうちより摸範を得たるならんと斷言せり。げにヤサックギルの作はスペインサルの作の如くをさく、寓意を旨としたるものなり。

ツオルツ、ガスコインの生誕年月は明ならず假定せられたる所によれば一千五百三十六年に生まれて一千五百七十七年に四十歳あまりにて逝りし者の如し。彼れは士爵たりし素封家の子にてカムブリッヅにて修學し二たびまでも衆議院の議員となり外國にも歴遊し戰場にも臨み頗る世故人情に通曉せしものなりきと傳へたり。其の作あまたある中にはじめて外國の作を翻案して喜劇悲劇を作りしは彼れなりといふ説あれどいかにや。但し一千五百七十六年に出版せられし『ステールグラス』と題する諷刺詩は學者の説によればたしかにガスコインの作なるが如し。『ステールグラス』とは銅鏡の義にてこの作は前代無比の長篇の諷刺詩なり其の主旨は當代の弊風を諷刺懲戒するにありて通篇無韻の律語より成れりさて件の二人の外に二の町に位すべき詩人尙あまたありき。今一々に姓名を擧



げされども彼等が作りし寓意歌、短篇の歌、讃の歌、戀の歌などに見るべきもの少からずこれらを一纏にしたるもの一千五百七十六年に至りて世にいで近世にも傳はりてもてはやされたりParadise of Dainty Devicesと題したるもの是れなり。案ずるに當時は諸名家の作を編纂して出版すること流行したりしなり上文にいへる『治者の鏡』の如きも其の實は同類の歌を雜纂したる一種の詩集なるが之れより先一千五百五十七年にもリチャード・トッテルとびふものTottel's Miscellanyと題する當代名家の詩集をいだしき。サリー等の小品は件のトッテルの雜纂によりて後世に傳はれり而して此等の諸集はいづれも第二期なる大詩人等に多少の材料を供せしものたるや疑ふべからざるなり。

## 翻譯

かく希臘羅馬の古文學が盛に研究せられしと共に古書の翻譯もまた頻に行はれしかば或はこのころを目して翻譯熱の時代と稱す。そもく古代の名著を翻譯することは已にヘンリー八世の朝并びにエドワード六世の御宇にも行はれたりしが此の期におよびては殆ど流行のやうになりて専ら此の業に従事せし者名家

のみにても十二人以上を數ふるに足れり。其のうちや、ぬきいでたるはフェール、タルバル、ギル、ゴールディングなどなり。さればデルサル、オギット、シセロ、デモスゼニスなどいふ傑出せる諸家の名作はいふも更なり院本の如きも希臘羅馬の名作として知られたるは一千五百七十九年以前に已に幾篇となく翻譯せられき。トマス、フェールのデルサルの譯、ゴールディングがオギットの譯などは其の尤なるものなりと云ふ。

これと同時に物語類を愛翫するの念舊日に倍し此の國の古事譚傳説等の喜びて讀誦せられしは更にもいはず當代に起これる政事、社交、宗旨上の種々の珍らしき出來事だに直に短篇の歌に綴られて毎週のやうに公にせられ世人が玩讀の料となりしこと猶近世の新聞紙雜誌類のもてはやさるゝが如くなりき。さてかゝる珍事奇説等を綴りたる歌を總稱して「バラッド」といへりき思ふに其の多數は我が近古の讀賣の巷説、即ち情死の顛末を綴りたる俗謡などにや似たりし。時俗の物語を嗜好する、かくばかり酷しかりしかば外國の奇話を翻譯することも次第に盛に行はれ一千五百六十六年には井リアム、ベイントルといふ者「快樂殿」The Palace



of Pleasure)と表題したる伊太利小話の翻譯集を出版し次いで翻譯家タルバルブルも『哀話集』といふ律語の翻譯を出したり其の他同類の翻譯物枚舉するに違あらず。而して其のころ最も多く入り來たりしは西班牙及び伊太利の物語にて彼の有名なる Amadis de Gaul の如き、サンナザロの『アルカツア物語』の如き又は『エシオピア物語』の如きも皆此の砌に輸入せられき。第二期の名作の一に數へられたる士爵アイリップ、シドニーの『アーカヂア』物語の如きは明に此等物語を種本として綴られしものなり。

必竟翻譯のかく熾なりしは一は俄に注入せられたりし外國思潮の餘波たりしに外ならぬと一は創才ある作家の未だ世に出でずして何事も皆試験の境界にありし故なり。換言すれば當期の諸翻譯は第二期の諸創作の粗材となり又は素絹となりし者にて暗に當期の詞人等が如何なる文體をもて如何なる思想を如何さまに表白すべきかを試験しつゝありしとを證するもの也。蓋し時人が咀嚼研究に熱衷したりし證據は上にいへる古文學の翻譯せられしと同時に過去の英詩人の傑作も浴くもてはやされ就中チヨウサル、リドゲイト、ラングランド等の名著の其

の最早摸倣せられざりしにも係らず尙も詩眼あるものゝ争ひて研鑽する所となりしにも見えたり。第二期の大詩宗スペンサルの如きも此等前代詩人の作に負ふ所鮮少なりきといふべからざるなり。

### 修史

之れより先ヘンリー八世の御宇のころより國史編纂に従事するもの次第に出でたり一千五百十二年に卒せしロンドン市の知事ロバート、ニアピアンの如き一千五百四十七年に高齡に達して逝りしロンドン市の判官エドワード、ホルルの如きはじめて英吉利國の史紀に着手せしものと稱して當然なるべし。さてこの紀絶正史と稱すべきものなはカリクソン、ノルマン、和合後の英國を指す。もとより彼等從へり爰に英國さといふはカリクソン、ノルマン、和合後の英國を指す。もとより彼等の重なる目的は仔細綿密に見聞の事蹟を叙記せんと欲せしに過ぎざりしかば措辭行文の上には何等の美妙なる所あるにあらず且は事實の眞偽を甄別するに必要なる史學上の炯眼ありしにもあらねば彼等の敘事中には謬妄なる叙説と無稽の記事とが間々眞事實の間に混雜したれど尠くとも當期の珍しき出來事と風紀習俗の明瞭なる説明とはひとへに彼等に據りてのみ知ることを得べし。ニアピ



アンの著は *The Concoherence of Stories* といふことは「英國全史」とも稱すべきものにて治く歴代の事蹟を詳叙したり。さてホルルのはランカストル、ヨオク兩統の紀とヘンリー七世及びヘンリー八世の紀と也。ホルルは流行習俗を記するに最も力めたり又總じてファビアンに優る所ありこは其の學識の彼れよりも一層高かりしに因るなるべし。此の二人につぎて出でたりしは前にいへるトマス、モリアなり其の著『エドワード五世及びリチャード三世の紀』は當時の史傳中の最なるものなり。かくて修史嗜好の漸く盛なるに及びては舊事蹟の探尋に従ふもの大に増加しエリザベス朝の第一期にはグラフトン、ストウ、ホルンシエッドなどいふ専門の史家輩出せり其中尤も名高きはホルンシエッドなれど其の傳は殆ど知るに由なく彼れの作として後世に傳はれるは所謂『ホルンシエッドの史紀』あるのみ。傳によればホルンシエッドと共に『史紀』の編纂に従事せしもの數人あり其中重なるものは僧井リアム、ハリソンとジョン、ブツカルとフランシス、ポート井ルとなり又前に擧げたるストウ(ジョン)の如きも其の幾分を參助しきといふ。さて此の『史紀』の重要な部分はホルンシエッドが筆に成れるノルマン政略以前の英國史、

リチャード、スタニハルストが物せし愛蘭アイランドの由來、そを補ひてブツカル、ホルンシエッド、スタニハルストの三人が別に物せし該國の紀、ヘクトルボイスが著る『蘇國スコットランドの史をホルンシエッド(或はハリソン)が譯したるもの、及びホルンシエッドが綴りたるノルマン政略以降一千五百七十七年までの英國の歴史等なり。此の書は其の同じ年即ち七十七年に世に出でしが偶々女皇エリザベスの忌諱に觸るゝ所ありしかば後に其のうちの幾分かを刪りて同八十七年に再版を出だしき。案ずるに此等紀傳家の諸著は概して眞偽のたしかならぬ事蹟をいと冗繁に記叙したるなれば考證稽古の念無くて之れを讀めば平板蕪雜にして頗る心のたゆまるゝ讀みものなれど其の當時の國俗の心に多少史的知識の好尚を喚び起こし且間接に愛國の想念を誘致するに與りて効用ありしことは想像するに堪へたり。拙くとも此等諸種の紀傳が第二期の脚本家マアロウ、シエイクスピア等の好材料となりしことは事實なり現にシエイクスピアの傑作の隨一なる『マクベス』の史劇の如きはホルンシエッドが譯したるボイスが蘇國史に據れること瞭然たり。

### 海外の奇談



學藝復興して希臘羅馬の古代に關する豊富なる知識の注入せられしと同時に亞米利加新大陸の發見以來月に年に頻々たりし洋中の諸發見が媒介となりて航海通商の道大に開け隨うて冒險探奇の旅行を千万里の海外に試みると當時一般の風習となれり。東洋印度會社の政府より特典を得て商權を專にせしむ此の頃なり。而して此等冒險者ポロネズの異郷より歸りしや前人未聞の奇事怪説を齎し來たり物語を愛玩する時好に投じて頻に驚くべき紀行を綴り荒唐無稽なる傳奇に見えたる神仙、矮魔、巨魔の外に幾多現實なる怪物を紹介して一世の視聽を駭かしぬ。例へば北西洋の奇談を詳録したる旅日記は千五百七十九年以前に出で又千五百八十年にはフロビシヤル、ドレークの徒多年の驚くべき航海をなし果ては恙なく歸り來たり或は世界周遊の奇談を傳へ或は西班牙海上の怪異を語りぬ。而して此等の談の大かたが浮虛謬妄にして信憑すべからざりしにも係らず大に當代の見聞を啓發し將に暢發せんとしたりし國俗の精神をますく奮起するに至らしめき。案ずるに北海南洋の驚くべき物語をききたる當時の國俗が愕然駭然として競うて新聞を渴望せし

形跡は第二期の諸著の上に散見せり。シエロクスピアの作中にも當時の感情を反射したりと思はるゝ所まばくあり『オセロ』の劇中に見えたるなど其の一例なり。

### 其の他の諸縁

著作の近縁となるべきことの以上説ける如く豊富なりし時に當たり他方には新舊兩敵の軋轢いよく激しく成り來しかば將に長せんとする新代の民族は皆爭うて舊敵攻撃の著述に従事し舊敵の徒はた之れに答ふるの必要を感じしかば筆を操りて論辨をものすること此の時より更に一層の昌盛を致し小冊子の出版の頻繁なること舊日に倍したり。蓋し當期以前には總て上流に位せる者は其の作を出版して世俗に見することを恥と思ふ習ありき此の故に身分高き徒はたとへ傑れたる著述をものし得たるも概して稿本のまゝに匣底に藏めおきて只二三の知交にのみ示し世に公にせざるをもて見識とするの風ありしが著作熱のかく甚しく成れるにつれて此の風いつしかに衰へゆき第二期のはじめにリ、いいで有名なる『ユーヒウエズ』物語を著し滿朝の上臈をめくつがへらせ次いで當代の



理想の紳士フィリップ・ジドニーが其の作『アーカディア物語』を出版して聲譽を一世に擡にせしが刺撃となり人々皆競うて其作を公にせんとし俄に案を構ふるもあれば急に舊稿を訂正して世に示さんとするもありき。所詮著作を譽と思ふやうになりしとは明に第二期に於ける文運隆盛の一縁なり。さてかく著述の頻なるに隨うて互に勝らんと願ふ心も鋭くなりて競争いと盛なりければ著書の批評といふこともはじめて起りぬ。第二期の章にて説かんとするジドニーが『詩辨』の如きは實に英國に於ける詩文批評の嚆矢なり。

志かしながら以上列擧して叙説したるは固よりエリザベス文學の最近縁と稱すべきもののみ第二期エリザベス文學の大に興隆するに至りし最大因縁を求むるときは到底之れを絶望厭世の時代たりし暗澹悵鬱なる中世的想念の反動と所謂學藝復興と宗教革新の影響とに歸せざるべからず。案ずるに之れより先一千年間即ち古羅馬帝國瓦解して列邦樹立し骨肉相嚼み君臣相殘ひ虎視狼貪ひとへに腕力のみをもて最大の權理とまつりし中古時代は基督教が其の間に希望の教を説きて人間の墮落を救はんと力めしにも拘らず尠くとも現在の生活に關する限

は暗黒なる絶望の雲霧に掩はれたりし時なり。當時の哲學者は論ずらく人寰は穢土なり苦海なり救ふべからざるの魔國なり之れに處するの方は冷然たる無頓着か幽玄なる驚歎か志からざれば未來未見の天上生活を希望して現在の穢界を脱離せん日を俟たんことのみと。彼の希望をもて生命とせる基督教會の識者すらも現在の世間には希望の影を求めかねて只管に他界の生活を推薦せしかば現に紀元後第一千年の如きは當世の大衆によりて全世界悉く壊滅して宇内の組織の根底より革新せらるべき年なりと妄信せられき。我が源平盛衰後の闇澹たる有様にも彌増したり。さて此弊は年を追うてますます長じ基督教會のいよ／＼腐敗して虚儀空文の叢窟となれりしや人心萎縮し神氣昏睡し煩瑣なる註疏の外に哲學といふもの無く拙劣なる摸倣の外に詩文といふもの無く人類の多數は殆ど一種の自動機械たるに外ならざる者とならんとせり。前に中古時代の大半は嘗てドゥテンが評したるが如く恐怖悲愁の時代にて人間の悅樂を悉く頼むべからずとして抛擲し未來靈界の來たらん日を惴々として懊惱惆悵の中に追求せし時代なり然らざれば或は徒に懷疑し或は徒に嘲侮し或は徒に感而下の樂欲に之



れ耽りて醉生夢死したりし時代なりき。彼等の先覺と稱すべきものだに人生をもて假の宿となし人類をもて穢土の旅客となし人間の悲喜哀歎に對しては現實なる活ける同感を抱かざりしものゝ如し。彼等の最も重ぜし所のものは未來の靈界なりき彼等の志がすがに人生を棄つる能はざりしは靈界に到るべき唯一の道路のこゝに存したるを信じたりしに因るのみ。詮ずるに中古の大半は絶望厭世の時代なりき。

まかるに十五世紀の末に至りて天下の大勢俄然として一變し基督教會の腐敗は其の反動を呼び起こしコンスタンチノールの滅亡は古學の伏魔洞を裂開し亞米利加新大陸の創見は全歐の視聽を震撼し印刷術の發明は思想の弘布を速にし見聞を擴張し希望を増加し世間の愛すべきを感ぜしめ生活の悦ばしきを覺えしめ感而下の樂みの浩蕩たるを示し人生の必しも穢土にあらざるを證し地獄極樂のひとり他界にのみ存せざるを諷示せしかば數百年來の絶望の反動は未曾有の勢力をもて全歐洲を震蕩し竟に大海嘯の勢をもてさらぬだに現實に執せんとする傾ある英國民族の心頭に奔瀉し來たりぬ。それよりこのかた古文學の研鑽は

新思念と新想像とをもて彼等の精神を富ましめたり。宗教の革新は彼等の勇猛精進の志氣を奮起したり。之れと同時に國皇エリザベス陛下に對する三回の逆謀は大事に至らずして挫敗したり。國皇の敵蘇國のメレーは脆くも刑場の露と消えたり。英國々教の大敵たりし西班牙フヒリッブが無敵必勝の大艦隊は神風の不可思議なる助によりて英國の灣頭に粉碎となりて此國の威武これより中天の大明の如く加ふるに幾多の冒險家者流は千万里の海外に航遊して異を探り奇を齎し貿易交商の道は日々に開けて國富み個人盛え知識暢達し意氣昂揚し農夫は二倍の收穫に鼓腹して太平を謳歌し諸侯伯縉紳は其の封建の餘夢の尙残りて確執軌轍の熄止せざりしにも係らず其の國君エリザベス陛下を愛敬するの念は家族の家長に於けるが如き者ありて常に女皇を中心とし能く一致團結の實を維持せり。之れを要するに英國の十六世紀の後半は進歩、擴張の時代なりき。人々皆現世間の頼もしきを感じ此の國の威力の強大なるを意識し人生の悅樂の日々に長ずるを見聞し又之れを獲るの道の必しも得がたからざるを知覺し人間の行為想欲の驚くべく重ざべく且旨味深きを覺りたりき。彼等は中古時代の知者の



如くに偏に靈界のみを景慕して現世間の生活を厭離貶証せんとはせざりき又彼の後の十八世紀の士人の如くに偏に中央の市府にのみ重きを置きて其の他を遺却せんとせざりしなり。エリザベス朝の國俗はおしなべて人間の行爲と想欲とに深き旨味あるを感じ其の美しきをも其の醜きをも其の高きをも其の卑しきをも其の悲しきをも其のをかしきをも悉く之れを歓迎せり。さればまた一方より觀れば當時は醜徳にも獎風にも富みたり或意味より言へば紛亂を極め甚じき不秩序に陥りたりし時なり。是れ大革新時代の哀しむべき、老かしながら止む能はざりし伴弊なり。げにテーンのいへる如く此の時に當たりて從來成立てりし各種の格式の苟も世道人倫を律すべきものは殆ど皆其の効力を失ひたり例へば舊基督教は已に虚儀の如くなりて新基督教は未だ十分に確立するに至らざりき。其の歎すべき一例を擧ぐればセント、ポールセント、ポールの聖院の如きも遊冶郎風流才子等が風流驕奢を衒ふ一種の公園の如き觀をなし尙甚しきに至りては神聖なる儀式の最中にも娼婦猾盜來往出沒して其の敗徳を行ふべき便宜を求めき。即ち教界も俗界も共に確定せる制規を失ひたる譬へが我が明治維新後の情勢に髣髴たり。

一言もて蔽へば隨意放埒の時代にして何事を行ふにも一定の模範なく、隨うて人皆摸倣せんとせざして創作せんとせり尠くとも其の當初に在りては風俗も好尙も人の行も人の説も其の面の如く多様なりき。蓋しかくの如き不秩序と放埒とは絶對に稱美すべからざる勿論なれどもエリザベス朝の民衆をして未曾有の發達を成就せしめしものは必竟此大自由の力に由る所謂一利一弊とは是れ也。若し夫れ人間の想欲は外界に於ける引力の強弱と多少とによりて増減する者なり而してエリザベス朝の英國は前に叙説せる大變動によりて其の局面俄然として變ぜしかば聞く物觀る物として新奇ならざるはなく感官に於ける引力も情緒に於ける引力も知識力に於ける引力も隨處隨時に具足したり。例へば諸工藝の勃興と有無交易の繁昌とは殷富なる大英國の市場に宇内の實用と奢侈とを網羅し印度、亞米利加の珍寶奇品光彩陸離として輻湊したりしかば上下之れが爲に眼眩み雅俗之れが爲に動顛せり。加ふるに古學藝復興の餘波は雜然として外國美術を此の國に打寄せ雲に冲る異風の樓閣輪奐たる奇巧の塔宇は呆然愕然たりし公衆をして殆ど應接に遑なからしめフランドルスの諸名工が畫きたる掛畫は宛ど



して室内に別乾坤を現し又奢侈を極め善美を盡くしたりし時様装の絢爛たるは内外の心目を駭かしロンドン全街を擧げて活きたる劇壇の光景たらしめ其織るが如き往來の雅俗上下男女老弱は居然無數の優人たりき。風流の心なき徒といへども常に此の間に棲息してまばく其想像を鼓吹せらるゝや竟に雅化して詩人たらざるを得ざりしなるべし。况や別に古希臘古羅馬の哲學、詩歌、雄辯のたぐひが已に前に叙したる如く或は譯せられ或は釋せられて冷く思想界に流布せしをや。知識の力もまた大に活動せざるを得ざりしなり。此に於てや人間が身心の機能縱横八面に發暢し其の結果は竟に古今空絶の駭くべきエリザベス文學となりて現はれたり。然れども人の身心のかく縦に發暢せしや其の結果の毎に善且美ならざりしこと勿論なり。蓋し美と善との大に暢びしや醜と惡とは大に暢び高と雅との大に發達せしや俗と卑と又大に發達し或部分は甚だ愛すべく敬すべく慕ふべく貴むべきが如く或部分は甚だ嫌ふべく厭ふべく惡むべく卑しむべきが如くに見えたり。失儀、狼狽、慘酷、殘忍等の諸惡徳は優美、嫺雅、慈仁、任俠等の諸淑徳と共に紛錯混交して雜然たりき。而して此の奇怪なる特質は當代社會の

全分の上にも又一個人の上にも貫透しヘンリー八世の如きエリザベス女皇の如きエリザベスの如きラウリーの如き正史的人物の上にも顯れフールスタッフ、クレオパトラ、アントニー以上皆シェイクスピア劇中の人物の如き假設的人物の上にも見えたり。之れを要するにエリザベス朝の社會は詩歌的社會なりき演劇的社會なりき。祭日祝日に於ける當時の英國はさながら絶大の畫圖の如く若しくは絶大の演劇壇の如くなりき。其の貴賤の晴衣裳の如何に我が元祿の扮装のはでやかなりしよりもはでやかにして其の看覽かんらんを好み盛觀せいかんを好み歌舞を好み摸寫もしやを好むの念、詮ずるに演劇的顯象を愛好するの念の如何に偏狂へんきやうの程度に達したりしかを知らば此の時に當たりて詩客吟人の輩出し劇の大に勃興せしことまた異しむに足らざるべし。予エリザベス朝に於ける機運と大勢とを我が明治維新後の機運と大勢とに比し其の繪畫的社會の狀況をば我が元祿以後の社會のに比す。元祿以後徳川全盛期の扮装の如何に演劇的なりしかを想へ男達のモサことばの如何に詩歌的なりしかを想へ。我が時代物の劇に用ふる錦繡羅綾の如何に一たびは現實の晴服なりしかを憶へ瓶兼の駒下駄、岩永左衛門の社禰の嘗て現實に見られたりしを



憶へ。此の比較の中らざといふとも遠からざるを察るに足るべし。以上をエリザベス文學の勃興に關する簡單なる解説とす尙劇壇の詩人并びに其の作に關して叙説せん折にこゝに説き洩したるを補ふことあるべし。今は假にかばかりをもて足れりとして直に第二期の叙説に移らん。

### 第二章 第二期エリザベス文學

第二期のエリザベス文學はジョン、リ、の『ユーヒウエズ』物語とエドマンド、スベンスナルの『牧者十二月記』をもて始まるといふべきなり。此の二書は一千五百七十九年の出版なり而して其の翌年と翌々年との間にはフィリップ、シドニーが『アーカヂア』物語と『詩辨』といふ詩論といでたり。此等四著のうちスベンスナルのを除けば餘は皆散文の作なれど今俗に謂ふ散文にはあらで予が謂ふ所の華文に屬すべきものなり。まづ華文の作を説くべし。

#### 『ユーヒウエズ』物語と『アーカヂア』物語と

ジョン、リ、は脚本の作家としても當代の名家の一人なれど其の後の世に知られたるは主に其の奇異なる物語『ユーヒウエズ』の殊なる文致に由りてなり。彼れ

の詳傳は殆ど探り知り難し一千五百五十四年のころに生まれ同六十九年にオクスホオドなるマクダレン大學に入り同七十三年に學位を得きといふ事だに多少揣摩の説たるを免れず但し其が『ユーヒウエズ』物語の上篇を一千五百七十九年に著し其の下篇を其の翌年に物せしこと、其のころ齡尙二十五六歳なりし事とははゞ信ずべき事實なるが如し。『ユーヒウエズ』は古今有數の奇異なる著作なり。其の物語の筋は平凡といはんよりはむしろ平板ともいふべき心たゆるいたぐひの事件より成りたれど其の一種異様な駢儷的文致、即ち過巧なる對照と浮靡綺麗なる直喩とは恰も當代の好尙に投合して上流社會を振蕩し僅々六年間に版を重ねること五回におよびき。其のころ朝廷に出入せし風流男女は此の書を知らざるを耻辱とし又其の名句を暗じたるを譽とし或は殊更に此の物語の過巧なる文致をまねびて談話し竟には『ユーヒウエズ』言葉といふ一種の名稱をさへに作り出だすに至りたり。思ふにリ、の殊なる文致は當時の宮中語の反影たるに外ならざるべし何となれば華麗過巧の弊の浮靡と矯飾とを喜べりしエリザベス朝の風流男女の舉止風采談話及び文章に見れしは此書のいでし後にあらで此書



の成りし前にあり。『ユーヒウエズ』物語はむしろ當時の殿上の粹人が理想の首文を實現せるものともいふべし彼のスコットが小説『モナスタリー』の中なる一人物ソル、ボルシー、シャントンの如きよく當時の活けるユーヒウエズ現せり。

此の書の上篇は Euphues, the Anatomy of Wit と題し下篇は Euphues and His England と題したりユーヒウエズとは主人公の名なり。作者上篇にては此の閑雅風流伶俐機慧なるアヘンスの貴公子を以太利なるネーブルスに滞留せるものとして叙説し下篇にては其の英吉利島に渡航せし道行を語りて航海中の出来事并びに英國の風俗の叙狀に及べり。必竟ずるに此の書の名高きは偏に其の異様なる文致に由るなればをさく、修身に關する教誨を陳述するの便宜にとて綴られたる平板單調なる筋立はこゝに取いで言ふべき價值なし。此の作一面より觀れば一種の情話なるが如くなれど他の面より觀れば一種の教訓文の集合なり。

『ユーヒウエズ』の文章の特質は二あり一は過巧なる對照にて二は繁褥なる比喩、三は頭韻法なり。今こゝに其の文例を擧ぐるの餘地なけれど其の長所と短所とは四六駢儷の得失によりて推測せば正鵠を得るに庶幾からん。所謂ユーヒウエズ

體は所詮は一層律調の自由を得たる儷語體に外ならざればなり。

『ユーヒウエズ』につぎて一世を聳動せしは士爵フィリップ、シドニーが『アロカヂア』物語なり。シドニーは一千五百五十四年ケンツト州に生まれ十三歳にしてオクスホオドの大學に入り已に學生として高き譽を得たりき。十八歳の時大學を退きて大陸漫遊の途に上り佛獨伊の諸國を遍歴しプラトー、アリストートルの哲學を研究し、エニスにて星學と幾何學とを修め希臘の悲劇伊太利の短歌を稽查しさて二十一歳にして英國に歸り來たりし時には眞に完全なる當代の理想的紳士なりき。彼れは其の身名族の家に生まれ容貌閑雅、風采俊秀、加ふるに其の爲人聰明廉潔、仁義を重じ禮讓に厚く而して勇武人に勝れ學識は尤高遠なりしかば上は女皇の殊寵を蒙り下は万人の愛敬を得て聲譽一世に高かりき。シドニー二十二歳にして公使に任ぜられて大陸に赴き新教諸國同盟の大議に周旋し二十九歳にして妻を娶り又同じ年に士爵に叙せられき。さて三十一歳の時ポランド國王の嗣の絶えしや彼の國人シドニーを推して其の皇嗣たらしめんことを乞ひしに女皇當代の寶玉を失はんことを惜しみて許さざりき。其の翌年今の和蘭地方の新教信者



が西班牙國王の舊敵軍に抗して苦戦せしやシドニー義軍の一將となりて越え渡り  
 一千五百八十六年十月ストゥアヘンの役重傷を蒙りて陣没す上下おしなべて痛歎  
 哀惜せざるものなかりき。

シドニーが名作『アッカヂア』物語といふは彼れが清閑なる別墅に在りて自家と其  
 の妹とを慰めん爲にとて戯に物せし小説なり。其の脚色の大跡は當時盛行は  
 れたりし武俠と戀愛とに關せる傳奇の趣向に據りたるにて其の結構のなかばは  
 伊太利小説の摸範に従ひて散文と律語とを混じなればは西班牙の作を摸して田  
 野山川に關する叙狀を旨としたり。其の主人公は從兄弟としなる二人の貴公子  
 なり彼等は中古の武士のならばしにまたがひて生死を共にせんことを誓約し諸  
 國を遍歴して冒險の修行をなさんと企て其の本國をかしまだちすまかるに彼等  
 は不幸にしてスバルタの海岸にて破船の災厄に遭ひ不思議にも二人ながら離れ  
 るとなりながら共にアッカヂアの王國に漂泊す本書の卷初はアッカヂアの風  
 景并びに習俗の叙狀よりはじめて牧羊者が漂流者ミウシドラスを救ふことに及  
 べり是れ即ち貴公子の一人にして他の貴公子は其の名をピロクリスと稱せり。

かくて後種々の不思議なる手續にて二人共にアッカヂア王の宮中に客となり其  
 の二皇女に思はれ千辛萬苦の末めでたく結婚して幸福なる世を送りきといふ是  
 れ此の物語の大筋なり。事のことにおよぶまでには破船の厄もあり海賊の難も  
 あり魔仙もあり牧羊者の踏舞もあり唱歌もありアソビ寓言もあり要するに我が國の稗  
 史臭脚紙などに見えたる如き奇怪なる出來事夥多あり。蓋し此の書は已に諸批  
 判家が評したるが如く當代の面影を映じたる者といはんよりはむしろ作家の理  
 想と性質とを反射したるものといふべく隨うて人物も事件を寫實的といはんよ  
 りは寧ろ理想的といふべきもの多し。さて其の行文は頗る巧緻流麗にして間々  
 『ユリヒウエズ』風の濃厚浮織の弊に薰染したれど斬新なる警句と秀句とに富みた  
 る宛然一篇の散文詩なり後にいでたりし詩人等が深く此の書を愛讀して其の想  
 像の泉源をこゝに求めたりしこと故ありといふべし。シエイクスピアの如きも  
 拙くとも其の女性に關する想像と觀念とは恐らくシドニーより得たりし所抄か  
 らざりしならん彼れは『アッカヂア』を精讀したりし一人なりと傳へたればなり。  
 ワイルツ、シドニーは韻語の詩人としても多少の譽無きにあらねどかゝる略史の



## 批評

中に特書すべき程にもあらねば今は略きて彼れが第二の名作のことに移るべし。

著作の月旦の此の期に萌芽せしことは前にもいひたるが批判の緒を發きしものは實にアイリップ、シドニーなり。そもくエリザベス朝の第二期は所謂清淨、教徒の漸く起こらんとしたりし時なり。彼等は積年の淫逸と浮靡とを憤り倫理大道の廢れたるを慨するのあまり總じて虚儀逸樂を惡むと蛇蝎の如く殊に詞客文人を憎みて天下の遊民と詆り弊害の源と貶し國家の毛蟲と罵れり。シドニー斯道の爲に黙止するを得ずして一篇の解嘲を物しき是れ有名なる『The Defence of Poet』といふ詩論なり『詩辨』若しくは『論詩辨妄』などいふ義なり。彼れが此の篇に論ずる所は詩と道義との關係なり。彼れは反復して想像的文學(詩歌小説)の讀者に與ふる悅樂は單に知識を裨益するのみにとまらで道義の念を修鍊するにも大なる効用ありといふ事を證せんと力めたり。此の書に論じたる詩の効用に關する説の當否は兎も角もあれ此の書いで後ヨークス風の過巧綺麗なる文體の次第に廢棄せらるゝに至りしとは事實なり。シドニーの文體は此の書に於て

一段の進境を現じ流石にいまだ其の華麗の弊を全脱したりとはいふべからざれどまた彼の『アイカヂア』風の練巧なる筆にあらざれば明に前日の文致の非なりしとを認めたるに似たり。シドニーにつぎて批評を物せしはユツプなり彼れの作は『英詩之論』と題したり而して一千五百八十九年にはソオルツ、ボッテンハムといふ者更に一大篇を著して仔細に作詩の法を説きぬ『英詩之法』と題したる是れなり。老かれども此等の批評は第二期の大詩人に直接の効用ありしとは信ずべからず何となれば此等批評家中に最も卓越したりしアイリップ、シドニーの詩論すらも第二期の諸傑作、就中シェイクスピア、マアロウ等の傑作を獎勵誘致すべき性質のものにあらでむしる其を妨止すべき性質のものなり。例へばシドニーは彼の劇に於ける三同一致三同一致な作劇學上の科詔時と處さ作さの説を主張し加之悲劇と喜劇との混淆を非としたりき。されば若し第二期の脚本家にしてシドニーが詩論に志たがひしならば彼のエリザベス劇の榮光と稱せられたるマアロウが『フォウスタス』もシェイクスピアの『ハムレット』も乃至エマストルが傑作『マルヒの公爵夫人』もフォードが名作『ブローケン、ハート』も到底世に出づるに至らざりしなるべし。大



批評家の聲が眠れる詩の神を喚醒ますこと無きにしもあらぬものからマブローウ、  
シェイクスピア等の傑作は詩論の生む所にあらざりしことあるけし。

### 詩歌

第二期のエリザベス朝の詩歌はスベルサルの『牧羊者十二月記』にはじまる由已に  
上にいへり。エドモンド・スペンサルが實傳は只微に知られたるのみ最近の推定  
を據として言はんは彼れの生誕は一千五百五十二年なりしが如し。而して彼れ  
がカムブリッヅなるヘムブローック院に給費生となりて入りしは思ふに一千五百  
六十九年なりしならん但し彼れがカムブリッヅ大學に在りし間の經歷は揣摩臆  
斷の説の外には知るに由なし。只彼れが彼處にありしこと七年なりし事と一千  
五百七十三年に卒業してバチエロルの學位を得、更に三年を経てマスタルの學位  
を得しとは蓋し正確の事實たり。さて彼れはカムブリッヅを退きて後北方に  
赴き其の親友の間に寄居して一二年を過ごし或佳人に眷戀し且此の際其の處女  
作『十二月記』の著作に着手せしとは信ずるに足る由あり。『十二月記』は作者が抒  
情の作たること勿論にして就中心を籠めたるは新舊兩教を比較したるあたり、并

びに教師が慈悲善根を描けるあたりなるべく而して當篇の主人公たる牧羊者エ  
リククロウトは作者の影なるべく又女主人公ロザリンドといふは明に作者が意中  
の人なるべし。かくて疑ふらくは一千五百七十八年の末ごろ彼れはロンドン  
都門に歸り來たり其の友がブリエール、ハアエーの紹介にてシドニー並びにリイ  
スナルに面會し一躍して直に最上流の文壇と政事界とに出入することを得しなる  
べし。『十二月記』の公にせられしは一千五百七十九年なり、E、K、と署名したる彼れ  
が友(本名 Edward Kike)之れを校訂して出版しき。カムブリッヅを去りて後のほ  
かなる事蹟だにひとりE、K、が記しおきたるに據りてのみ知るところを得思ふに彼れ  
が其の傑作『神女王』の考案に着手せしは此の時の前後なるべし。『十二月記』は其の著  
らに一世の名家た。かくて後一千五百八十年にいたりて時の權家井ルトのクレ  
脚に従ひて愛蘭に赴きまばし其の秘書官となれり。爾後四五年間の履歴は多  
少明確ならざるところありされど少くとも彼が次第に登用せられて種々の職に  
就き竟にコオク州なるキルコルマンといふ一莊園を女皇エリザベスより賜りて  
其城主となりし事ほどは事實なるが如し。『神女王』のはじめ三卷は此の幽遠閑雅



なる山光水色のうちにもせられき而して著者は之れを其の心友ナル<sup>（？）</sup>リッのすゝめにかかせて一千五百八十九年の十二月に出版し女皇エリザベスの乙夜の覽に供へきといふ<sup>（？）</sup>。此際スパンサルが著作せしは尙外にも夥多ありしがそれらは概して短篇の歌なりきそを一千五百九十二年に一篇に合綴して世にいだしきと聞えたれど今はみな傳はらず。又一千五百九十四年には妻を迎へきと傳へたれど其の姓名すらも詳ならず或はエリザベスと呼びきともいふ。翌年また種々の作あり其の多數は戀愛及び結婚に關したる歌なり其のうち最も名高きは Epithalamium と Colin Clouts come Home again となり。同じ年『神女王』の續篇<sup>（？）</sup>第四、第五を出版しき篇中エリザベス女皇の徳を頌むたるくたり著かりければ女皇勅して年金五十磅を賜ひきどなん是れスパンサルが再度英國に來遊せし時の事なり。同じころ別に數篇の短歌を物しきウイストル脚の女等が結婚を賀せし『プロサラミオン』<sup>（？）</sup>并びに『戀と美との頌』<sup>（？）</sup>などなり。件の頌のうち二篇は壯年の作にて他の二篇は當年の作なり而して後者は伊のペトラルクが高絶幽玄なる戀愛の旨をば歌ひたる者なり。さてスパンサルの晩年はいたまじ

き末路の一例なり。彼れは一千五百九十八年に起こりし愛蘭の暴動の爲に其の財寶を掠奪せられ剩へ其の愛兒の一人を其の邸宅と共に燒き失ひ倉庫として亂を避けて英國に逃れけるが此れより不幸ひきつゝ<sup>（？）</sup>次第に零落して其の翌年の一月に空しくなりけり。或は飢ゑて死にきともいへれど疑ふらくはさまでの落魄にはあらず。さて其の骸は彼れが遺言によりてユストミンスタルなるチヨウサルが墓のほとりに埋葬せられ今も尙四大詩宗の墳墓として崇敬せらる。人或は彼れを稱して詩人の詩人といふ、そは當に醇の醇なるものといふ意味を含みたるのみにはあらず其の俗人の爲にもてはやさるゝよりも詩人の爲にもてはやさるゝことの一倍なるをいへるなるべし。思ふに英國後世の詩人は(ミルトンより近くはナルゾオス、シエレ、キーツ、テニソンにいたるまで)多少スパンサルに負ふ所ありといはんも誣言にあらず。彼れの飄逸豊富なる想像は永久に詩思を鼓吹するの靈力を具へたり。

### スパンサルの『神女王』



スペインサルが高遠なる想像と其のプラトニ的着想とは屢々醇粹に其の短篇のうちに見えたるにもかゝはらずかゝる畧史のうちにてはそれらを一々に細説せん餘地なければ予は『十二月記』をも其の他の諸短篇をも除きてひとり最も人口に膾炙したる(但し玩讀せらるゝことのないと稀なる『神女王』のみを取りいでゝ其のあさましの結構を語り且其の特質を略評することをもて足れりとすべし。彼の作は或方面より見れば『西遊記』に酷似し又或意味より見れば『八犬傳』にも似て我が國の讀者には淺からぬ因縁ありと思はるればなり。

『神女王』は所謂警諭詩(寓意譚)にて其の着想に表裏の二面あり。其の一面を見れば作者みづからも明言せる如く禮式をホーマル、ザルシル、アリオスト、タツソオ等の叙事詩に取りて中古任侠の勳爵士が氣高く勇ましく且風流なる伏邪挫強の功績と太古希臘の鬼神譚とを巧に混和して叙述したる荒唐奇怪なる叙事詩たるに外ならぬと更に他の一面を見れば事々物々に悉く隱微なる寓意ありて人物も事件も所詮は希臘の古哲學と當時の神學の旨とを祖としたる一種の倫理説を有形にしたるものに外ならず具にいへば人の醜徳と淑徳との目に見えぬ軋轢を傳

奇風に寫したるものなり。即ち種々の醜徳と淑徳とに擬したる人物禽獸草木等が此の物語の緯となり人間の迷妄顛倒正覺成道の事蹟が戰國武俠の目ざましき手柄話に作り做されて一篇の經となれるなり。總躰の結構はほと『西遊記』の趣なり。或は曰ふスペインサルは當時公私の道德の甚しく頹廢せるを慨して此の雄大なる警諭詩を物したり其の意古賢人の教育を俗解し且之れを有形の摸範的人物に作り做して冷く世俗を教化せんと欲せしに在り。げにや著者の本願の教訓誨導に在りしことは明なり、何となれば『神女王』の緒言、兼、發端とも見做すべき其の友ロウワールへあてたる書面のうちに著者みづからも明言して曰はく、此の書の大體の目的は温雅貞淑に訓練せる高上なる人即ち士君子の風を涵養するにあり。又曰はく予は未だ國王たらざりしころのアーサル公(題曰サルは英詩人のまげ、彼等のアーサルを重するは我國の戯作をもて義烈の士の肖像となし且彼れをアリストーリートルが説きたる十二の淑徳を圓滿に具足せるものにして描かまくせり是れ上篇十二卷の目的なり若し幸に此の上巻にして世間に好遇せられなば予は更に進みて或は國王となりし後のアーサル公をも寫し以て諸種の公德(政治上の







さいどく／＼明白なり。即ち第一卷の主人公となれる赤十字の武士セント、ウォル  
 シは二心無き人心の誠(Holiness)を代表し第二卷なる士爵ガイオンは過不及無き  
 肉欲の節制即ち宜といふ徳(Temperance)を第三卷以下なるアリトマリチス、カムベ  
 ル並びにトリアモンド、アテガル及びカワドールは各々清淨(chastity)友誼(friend-  
 ship)公正(justice)禮讓(courtesy)の徳を代表せり。第七卷は只其の緒言にやと思  
 はるゝ變り易さを歌ひたる斷篇二章を留めたるのみなれば本文の趣意は知る由  
 なけれど諸批評家の推察したる所によれば多分貞(Constance)を描さんとしたるな  
 るべし。さて總じて本篇にて神、仙國といひ神、仙女王などいへる神、仙の義は精神  
 又は虚靈の義にて所謂神、仙國は天上の圓滿樂土を表し神、女王は無上絶對の神徳、  
 無等無邊の榮光を表したり。又此の神、女王に奉事せるものとしたる十二人の武  
 俠は上にもいへる如く此の靈境にいたるに必要な諸徳にて誠は主に人間の靈  
 性に關したり其の神明に對して忠實無二なる所以なり。また宜の徳は主に人の  
 肉體に關したり其の肉體の樂慾を節制して神の道にかなふ所以なり。清と友誼  
 或は信といふとの二徳は清淨潔白なる男女間の關係を維持する所以なり。而して

清淨はをさ／＼純清なる戀愛を代表し友誼(信)は男と男との堅固なる親睦を代表  
 せり。又其の次なる公正とは大義公道を重ずるの徳なり。思ふに愛の能く裁斷  
 せざるところ公道能く之れを裁斷すべしとなせるにやあらん。清淨と友誼とは  
 愛の變相なり公正は恐らくは最も廣き意に用ふる義の意に近かるべし。以上五  
 箇の美德は人と人との交際に欠くべからざるものなり。若し夫れ第六の禮讓は  
 重に外客即ち初見の人に對して懇切篤實なるを旨とする徳なるが如し時として  
 は俗に謂ふ深切の義に外ならぬものと見ゆることあり。さて又第七の貞は節。又  
 は操の義に通へり志の變渝せざるをいふ。要するに我が曲亭の『八犬傳』に物した  
 る八徳も非科學的分類なれどスペンサルのも頗る粗雜なる分けかたなり倫理を  
 説きたるものとしては二者共に精到明確といひがたけれどそは固より其の作の  
 眞價には關せざることなり曲亭の巧もスペンサルの妙も所謂寓意の外にあれば  
 なり。而してスペンサルは寓意の周到に貫徹して譬喩のうるさきまでに精細綿  
 密なると想像の飄逸なると風調の靈妙なるとによりて實に曲亭に勝り曲亭は其  
 の叙事の結構の貫透して脈絡の紊れざると性情を描くことこの巧なることによりて



スペインサルの上にいであたり。但し二家の作は其の實氷炭の如く相異なりたればかく比較するはなかくに失當の沙汰なるべし。

『神女王』の第一卷第一章は突如として赤十字の武士が馬にまたがり佳人を従へて冒險の旅途に上れる光景を描寫して端を發きたり、されどかばかりにては事の次第讀者に明ならねば著者あらかじめおもひはかりて此の物語の發端を例の書面中に物したり。下に其の大要を叙説すべし

神仙國にケローリアナ(榮光)と呼ばれたまふ神仙女皇おはして毎年に一たび十二日間の盛大なる祝祭を執行し諸司百官をもてなしたまふと例なりき全國の精神男女こごこしく風闕にまわりあつまりて歌舞宴遊し或年祝祭の將に開かれんさするやいさ鄙びたる服裝せる男擲る色もなく突然さ女皇の御前に來て敬禮し願はくは此たびの祀典中に要求せらるべき冒險の事業あらば某におほせつけられたし乞ひけり百官はいふも更なり女皇も此男の姿かたちのいさ賤しげなるを見て一たびは驚き怪しまれれどかゝる請願をゆるすここの大典の恒例なりければ假に其が乞をうけひきて遙なる末座に着かしめられき程もなくて濃き身色の喪服被て乳白の腫にのれる美しき乙女片手には鎗を提げ片手には神明より傳はれる貴き甲冑を荷ひたる一頭の駿馬を牽ける矮麗の奴を將て此の席に入り來りぬ、此の乙女は或王國の公主にて其の名

を登姫(Den)と呼べり(按するにユーナさは唯一の儀、眞を代表す、眞實は唯一にして不二なればなり)姫が故國にはおそろしき惡龍住みて全國を荒らし剩へ姫が父母なる國王さ皇后さをさらへて武銅の塔のうちにおしこめ加之魔術もて繋ぎさめければ姫は悲しき遣るかたなく本國をぬけいで、此の災厄を救はん義烈の士には姫さ王國のなかばさをさらせんといふ父王の吩咐を齎して諸國をさまよひし末今この風闕に來たりしなりけり(案するに惡龍は惡魔を代表し國王夫婦は人間の血統の祖を代表せるなり即ちアダムとイヴさに比したり)さるほどに姫が其のこしかたを語りて神仙女皇に哀訴せるを以前の鄙しげなる男打聞きて席を進み願はくは某をして其の厄を救ふの大任に當たらしめたまへと乞ひけり登姫も神女王もあまりのとおぼつかながりて願にはえも答へずやがて登姫は馬に荷はせてもて來し甲冑を示していふ此の貴き甲冑のいさよく其の身に適はぬ人は決して此のたびの大勳を奏し得べきなん、御身よく此の物の具を着し得るか、鄙しき男おめたる色もなく立寄りて件の甲冑を被けるにさながら此の人の爲に製られけんと思ふほどに適ひけりさて裝成りて立ちたる姿を見れば威儀凛然といがめしく殆ど別人を見るが如くなりき、されば神女王は即座に士の爵を賜ひぬ、此の武士共が胸甲と銀の楯に赤十字の紋章を着けたりければ赤十字の武士とこそは呼ばれければセント、ジョルジといふ尊き武士は是れなり

と。これ『神女王』全傳の發端なり。案ずるに赤十字の武士に上にいへる如く誠心といふ徳を代表させて眞(登姫)に事ふる者としたるは根本の趣向なれど此の『神女



王』の寓意はひとり此の根本の譬喩にのみとゞまらで往々二重にも三重にもなりたれば毎に他の寓意あることを忘るべからず。そも／＼セント、サオルマといふは英吉利國の守護尊者なりかるが故に彼れはスペインサルの時代に於ける英國の國教信徒(新教)をも代表せり。此方面より觀れば壹姬もまた眞を代表すると同時に眞正の宗教を代表せり。さて赤十字の武士の乗れる駿馬は動もすれば理性の制御を蔑如せんとする煩惱邪欲を代表し其の被れる甲冑は義若しくは正を代表せり即ち人の誠心を護る物の具なり。又此の武士の後に従ひて雪よりも白き驢(無欲忍辱?)にのれるは覆面したる壹姬(Duchess)にてそれと並びて道志るべするは乳白無邪氣の羊兒にて最後につゞけるは矮奴なり。矮奴は概して人の肉體若しくは常識を代表したれど時としては例へば本篇の寓意が政治的となれる時には下等社會の民衆を代表せるとあり。蓋し『神女王』の根本の結構は(就中第一卷の脚色は迷悟の大争闘を有形にしたる精神的譬喩詩たるに外ならぬものから其の寓意は動もすれば複雑多様になりて多少狹義に謂ふ嘲世諷俗の旨味をも帶び當時現存の人物をも捉らへ來て篇中の人物に擬したる處もあり又は宗旨上政治上の事

件を取りて隠顯の間にそをほのめかしたる處もあり。即ち比喩は往々二重三重となれることあり個人的政治兼宗旨的倫理的是れなり。個人的とは神仙女王クローリアナを時の英國女皇エリザベスに比したるが如き使魔道人を西班牙王フィリップ二世に比したるが如き傲慢を法皇の暴力に比したるが如き公の徳の武士アーテガルを著者が恩人グレイ卿に比したるが如き又は武姬(妖婦)を蘇國女皇メレーに比したるが如きをいひ政治兼宗旨的とは赤十字の武士の行爲をもて暗に英國教會の經歷を叙したるが如きをいひ倫理的とは根本の哲理的結構をいふ。作者が此の雜駁錯交せる譬喩を如意周細に料理したる技倆は眞に駭くに堪へたりといへども其の譬喩の彌が上に重疊して讀者をして殆ど應接に遑なからしめたるは諸家の己に難じたるが如くなか／＼に厭ふべきなり。加ふるに此の牽強なる譬喩の爲に物語の筋は動もすれば離れ／＼になり中央主人公たるアーサルの事蹟は殆ど忘れんばかりになりて各卷の聯絡おぼつかなくなれり、志かのみならず女丈夫ブットマーチスのいづるに及びて多少の波瀾はありながら尙全體の上よりいへば恰も『西遊記』を讀める時にひとしく妖怪、魔術家、鬼魅、魍魎戦闘、殺傷



怪異、靈驗、冒險、災厄などの同じやうなる筋のみ重なりて心おのづからたゆまらぬに最後には主人公が必ず勝つと定まりたる『西遊記』『八犬傳』の例におなじければ筋を主として讀むものには甚だおかしからず。かるが故に事件を主眼としたる叙事詩としては上乘の作と稱すべからざることを勿論なり脈絡貫透といふ點よりいふも此の書『八犬傳』などに及ばざること數等なるべし。まかしながら到底此の作の價值は事件の結構にもあらず人物の性情を剖析して徹に入り眞に逼りたるどころにもあらずはた恐らくは其の譬喩の雄渾周到なる處にもあざざるべし。思ふにスペインナルの卓然と凡詩人の上に傑出する所以は其の悠然として俗に超絶し其の物語の皮膚の上には間々當世の人物事件などを諷したるにもかゝらず一たび其の靈機熟し神興來たるや飄然として幽玄なる理想を父母とし實を脱し虚に遊び無を有とし幽を明とし宛然として出世間の妙境に達したる處にあるか。彼れは語をもて抽象を畫くに妙を得たり古人彼れを評して詩人中のルーベンスといへる適評なり。所詮スペインナルは高遠なる夢を語る者なり彼れは自家の理想を父母として一の夢幻國を生みいだせり彼れの想像力の幽にして玄なる

日進月化して膨脹擴充したりしエリザベス英國の目ざましき現象にすらあきたる能はで別に理想の新天地を襲り飄逸として夢幻の境に遊びたりき。若し純ら理想の世界に逍遙するを詩人の本領とせばスペインナルの如きは或は詩人の表極に近き者ならん。クレイク嘗てスペインナルを評して曰はくよし彼れを稱して詩人の最大なるものといはざるも吾人は尙彼れの作を評して諸の詩歌中の最も詩歌的なるものといふを得べし。他の詩人は總じて詩人たるの資格の外に他の性格をも兼ね具へて或は考察し或は推論し或は諷諧を事とし或は頓才を弄すると殆ど其が本領たる想像力の正産物を物するの度に相ひとし。ひとり『神女王』に於けるスペインナルの曲調のみは詩歌なり悉く詩歌なり曲として詩歌ならざるはなし。彼れの作は變化窮極無き音樂の妙音につれて綿々と開展せられ來たるまばろしの連続なりと。又曰はく一方に於ては其の妙想を創起し又は受胎するに於ける工夫と意匠と、他方に於てはいみじく美妙を感覺して活ける如く且音樂の如くに諸の言葉を表白する自在の技倆是れ實にスペインナルの詩の他の諸作に異なる大なる特質なりと。げにやスペインナルの詩の如きは譯すれば其の靈妙を毀



損するを定則とせる東西古今の詩歌中に於て最も譯すべからざるものなるべし。彼れの作の靈妙はをさく詞調の間に存すればなり。但しスペインサルが詞致はエリザベス朝に於てだに已に古雅を以て聞えたるほどなれば今日之れを玩味せんとすれば殆どチヨウサルChowalの作を讀むときと同等の困難を感ずべし。彼れの詞の古雅なるは一は其の主題の古史譚なるが爲なりと雖も一は其の理想及び好尙の兎角に保守的なりし爲也。彼れは後のナルタル、スコットScottにひとしく過去を追慕するの情の深かりし人なり、其の平常の生活も思想もむしろ中古的、貴族的にして政治上、文學上に於ける意見も總じて保守的なりしこと明なり。彼れはエリザベス文學の前驅、其の全盛の太氣は彼れが呼吸する能はざりし所。彼のベーコンBaconの論文は『神女王』第六篇の發兌と同年にいでたり、シェイクスピアShakespeareの傑作の如きはスペインサルSpenserの見るに及ばざりしものなり。要するに理想及び好尙の上よりいへば詩人とは致を殊にせる者なり。

『神女王』六卷のうち第一卷を壓巻とするは通説なり。第二卷之れに次ぐ。第三卷

以下は結構に於てまづ前二卷に劣りたりと考かれども一節一章には遺却すべからざる巧妙なる佳什乏しからずとす。例へば第四卷なるギナーナスGinannesの宮居並びにテムズ河の結婚に百川の集へるを歌ひたる節、又は第六篇なる牧羊者とカレドンドの上を叙したる節、及び女神の蹈舞、並びに變り易さを歌へるうちの第二章に見えたる四季の行列の如き是れなり。こゝに第一卷の大要と其の譬喩のあらましとを説くべし。

赤十字の武士セント、ジョルジSt. Georgeが姫と嫁奴をわめて冒險の旅路にたちいでけるは、めは行手の道々に清き小川流れ、咲しき花ども咲き滿ちて、樂しきこと限なしと見えければ、我れも人も天が下は到る處皆此のごとく常にうつくしかるべしと思ひけり、さるほごに天氣いつしか冥曠と黒雲だちて、花どもは俄にうなだれ、風はおそろしく吹き、さみみ姫も武士も行き憚みつゝ、ゆくりなき暴風Stormを避けんとて、さある森のうちに潜みけり、此の森のうちの景色得もいはずめでたく、蒼々と繁れる木々、滋々Shushushuと生へる艸ども、樂しげに囀る鳥、面白く蛛手Spiderなせる小徑Path、物として行人の心を牽かざるはなかりければ、人々そゝるに深入りして、八重Yatsuのやうなる林間の路に迷ひ、進退きはまるにおよびて、やう／＼心附き元來しかたへ戻らまくすれど、ゆけ／＼深入りするばかりにて元の



此の怪しの森の迷路は明に人生の行路難に擬したり。林樹は悉く種々の人間生活  
活を代表せり老懶を國王に擬し月桂樹を勝利并びに詩人に擬し垂椏垂柳を愁に  
沈める情人に擬したるなど管々しきまでに周細なり。

其のうちに來ることもなしに盃だに小昏き森蔭の洞(迷妄の洞)の前に來にけりさてセン  
ト、シオルツは勇を敵して件の洞のうちに進み入りけるに四下暗うして文目を分き  
たしされど其が被たる胃の光にて向ひを見れば女の面したるおそろしき妖怪其の  
奥に臥して居り今シオルツが來たれるを見て猛然さかきいで只一とくちにくはん  
しつ、はトめは武士が身危うげに見えけり

此の怪物は迷妄の洞の精にておそろしき毒蛇なり。

"God helps the man so wapt in Errors endless traine!"

蓋姫がたはらより聲をうけいでや今まことのますらなとなりたまへ勇氣に添ふるに  
信仰をしてもして勇ましく戦ひたまへ御身毒蛇をえ殺さすは毒蛇つひに御身を殺さん  
と叫びひける武士此の言葉に力を得て奮闘し辛うして怪物を踏しけり

案ずるに此の段は發心の第一着として迷妄の障碍を除かざるを得ざる由を諷し  
たり又顯然たる謬妄の認め易くまた滅し易きを諷したり。以下益々く厄難  
は一層陰險なる諸の煩惱と誠心との争闘なり。

かくて迷惑の森を遊れいで、再び旅路に上るほごにいつしか日は全く暮れたり折

ら隠者の姿したる尋げなる番いづこよりともなく來て宿をかさんといひて人々をそ  
が谷かげの庵に誘ひゆきぬ此の翁、外面はいさ殊勝げに見えれどまごは正を思み  
邪をよるこべる卑怯陋劣なる覺術家にて其の名を使覺道人(偽善者)といふものなりけ  
り彼れは日ごろ登姫の無邪純正なるを憎み嫌へりしかばまづ其の守護者たる赤十字  
の武士を除きて彼の姫に憂き目を見せんと欲し其の夜シオルツがよく眠れりし時睡  
覺を使ひて怪しの夢を見させ彼れが心を惑はせ竟に登姫にみだらなる行あるやうに  
疑はせければ武士は淺はかにも恥ぢ怒りて其のあした急に矮奴をぬて例のあら馬の  
走るにまかせて姫をふりすて、去りけり登姫かくまゐりて打なげき其の後をまたひ  
て覺術家の宿をいでけれど荒れたる馬のあがき早くて其の主の影をさへに追はんに  
由なし

此段偽善のおそろべきを諷せり誠も之れか爲にはくらまされ眞も之れが爲には  
欺はさる矮奴と駿馬とは煩惱邪欲の激しきを表す。こゝの壹姫は偽に對する眞  
とも見るべく邪教異端に對する眞正の宗教とも見るべし。

さるほごに赤十字の武士は姫に分かれゆく途にて端無くも一個のサラセンの武士と  
一人の佳人とにいであひぬ武士は其の名を無信(不信者)といひ女はフヒテツサ(眞實)と  
呼べりシオルツ(賊心)はサンフオイ(無信)と格闘して難なく彼れを斃しけれどフヒテツ  
サ(眞實)の名のめでたきと其の面の菩薩のやうなるにあざむかれて得も殺さず剩へ彼  
れが開る處の履歴をまごこゝ思ひて介抱しこの、ちは我れ將てゆかんといひければ



フヒテツサはひたすら嫉を献<sup>つ</sup>ツオルツが心をさらかさんごつごめけり  
 誠の眞に離るゝや邪見と偽と忽ち來たり襲ふ。フヒテツサは假名なり實名をヂ  
 ウエツサといふ。ヂウエツサは貳の義唯一不二なる眞に對する偽を代表す又羅  
 馬舊教を代表す。而してサンフオイは邪見を代表す。誠は邪見を破るの力あれ  
 ども偽を退くるの明無し眞に離れたれば也。されば此の段は一方よりいへば英  
 國々人が眞正の教を抛擲して去ばらく不信(邪見)にあちいりしを諷せり。

さてもしツオルツはフヒテツサを伴ひて往くうちに眞靈の暑き城へがたかりければ或  
 大樹の下に休らひて蔭を求めフヒテツサの爲に其木の一枝を手折りて聖をつくらん  
 としけるに怪しや折れたる木口より鮮血流れいで怪しき聲を發し狭くこゝを逃れ去  
 りれど叫びけりツオルツの驚き怪むを怪樹はおしなだめておのが不幸のこしかたを  
 語るらく我れ元はフラサエヒオ(國語)といふ者にてフレイツサといふ美人を娶とし  
 たりしが或時ツウエツサといふ一人の美しき妙婦にあうてよりは下めの程こそはフ  
 レイツサと彼れとの間に美醜の優劣を定めかれつれ遂には妖婦の魔術にあざむか  
 れてフレイツサを見すてひたすら件の妖婦にのみまたしみぬまかるに其の後ゆく  
 りなくも醜く又おそろしき妖魔の正體を垣間見てければ我れいたく悔い悲しみいか  
 で彼れに離別せんすべもがなと念するうち彼れかくさ知りて大に怒り我れと我が元  
 の妻をなげ妖術もて凌ましき木を化せしめき御身もようせすば同才妖魔の賜にか

るべきぞといふ

案ずるにフレイツサ女は主にプラト一の哲理を代表せるならん即ち懷疑が偽  
 基督教(ヂウエツサ)と純良なる異端プラトニツク、フヒロソヒ)との間に取舍を決  
 しかねたるを表したり。此の時ツオルツが汝等を元の身に復する法無きかとい  
 へるに答へて活泉に浴するにあらざれば能はずといへるはプラト一の哲理のも  
 はや基督教の旨と合體して新活力を得來たらざる限は世道人心に効能無きを諷  
 したるにや。

されどもツオルツはフラサエヒオの所謂妖婦をば我が伴へるフヒテツサとは夢にだ  
 に知らざれば彼れが偽りて固絶したるなさまぐにいたはり其が胸にのらせて又も  
 そのを立出でけりそれはさておき遊娘はツオルツに見すてられても怒める色もなく  
 いやで今いちぢめぐりあはらやとあちこち尋ねめぐりさまよひあるき其の二日目に  
 は心も身もつづれて魂のうさにいこひたる其の姿いみじうけだかし

"Her dainty limbs did lay  
 In secret shadow, far from all men's sight;  
 From her fayre head her fillet she undight,  
 And layd her stole aside. Her angel's face,  
 As the great eye of heaven, shyned bright,  
 And made a sunshine in the shady place;



折から一頭の猛獅あり突然と姫をかまんさてさびかりけるが姫の清淨無垢なる貴  
ささ美しさに撲たれて忽然とおさなくなりてさながら飼犬のやうにこの時より  
念々姫が身邊に陪從して其が非常の驕とぞなりける

猛獅は人間の理性を代表せり即ち下に叙する所は一面に於ては宗教革新以前の  
英國教會史をほのめかしたり。理性が真正の教旨に一味して無知、妄を破らんと  
試みたる趣なり。

壹姫が獅子を將て立寄りし暇が家に母と女と住めりけり母は首にて其の名をコオン  
コオンと呼び子をアベツサ女と呼べり

コオンは盲信を代表しアベツサは無知を代表すると同時に中古の墮落僧院を  
表したる。英語女僧をアベツサといふ。

アベツサは壹姫に物いひかけられても聞くことも言ふことも得せざれど獅子のすま  
まトキ姿を認めればおそろしがりて家の中に逃げ入る母もまた驚きうるたへける  
を壹姫やうくささしなだめてその夜はそこに宿りけりまがるに小夜中になりて寺  
院堂宇に入りて寶物を盗むことをなればひきこせるカルグラボンといふ惡漢入り來て  
盗み物の寶をとりいでアベツサに與へまきりに其の心を取る

カルクは會堂の義、ラビンは劍、強掠の義即ち貪婪なる墮落僧を代表す。

猛獅(理性)は此の賊漢を見るや大にたけりて飛びかり只一かみにくひ殺しぬ

此のあたり寓意こみ入りたれど一面には人間の理性の殘賊の所業を惡むことを  
あらはし一面にはヘンリー八世が諸寺院の財産を沒收せし事を諷せるならんと  
いふ説あり。後の寓意は俗にいふベツケなれば後世の讀者には興無し。さてス  
ペンサルが倫理説によれば人間の道を成ずるは理性の力のみにはよらでむしろ  
神明の冥助によれり、かるが故に著者は第三章の末にいたりて獅子(理性)の落命を  
描けり左の如し

壹姫が盲女の家をたぢいで、尙もツオルツを尋ねめぐるうちに團らすも其の人の彼  
方より來るにあひければよるこぶこ限無し、こはまここの赤十字の武士にはあらで  
前に見えたる使道人の巧に假裝したるなれど姫は未だ心附かず、まがる間さきに眞  
の赤十字の武士に殺されしサンフカイ(無信)の弟サンロイ(無法)といふ者兄の敵を討た  
んさて處々を經めぐり今しもアキマゴが胸甲と楯とに赤十字の紋章を著けたる  
を認めて走り近づき眼を挑みけりアキマゴは卑怯の本性なれば大におそれ惑ひ  
けれど今更逃れんすべなくて眼ひけれど立ちどころに痛手を負はされて倒れきサン  
フカイが立ちかゝり息の根をさめんとするさき假裝のはがれ落ちたるによりてサン



ロイも其の人たがへなりしを知り姫も今まであざむかれたりしを死に驚くこと甚し  
サンロイは姫の美しきを見てひきたて行かまくす、獅子(理性)はかくと見て大にたけり  
躍りかゝりてサンフオイをかまんとしけれど彼れが暴勇に敵し得ずして却りて其の  
命をおとしけり

此の段偽善の眞を保護するが如く見えて竟に保護する能はざるを諷し且道理(理  
性)もまた無法には敵し得ざるを諷す。

あはれ姫はサンロイ(無法)にさらへられて深林のうちに伴はれ辱をも受けなんとした  
る時しも姫が哭き叫ぶ聲を聞きつけて四方の林、山、河等より怪しの精ども群りつゝ  
け来てまづサンロイをおひのけて姫を救ひやがてそが脱しき宿に伴ひゆきていたは  
りかしくくこせれんころなり姫はまばしそこに足をさぐりて此のむくつけきやから  
にくさくさの雅びたる手わざを教へ彼等がいやしき風俗を化せんを力めり  
山精林精のむくつけきは蒙昧野蠻の民を表せり。此の段は人の固有の性の眞教  
の美を認識するも其の美なる所以を覺悟する能はざるを示せるならん。

"During which time her gentle wit she pines

To teach them truth, which worship her in vain,

And made her his Image of Idoltries,"

之れより先まことの赤十字の武士セント、ツオルツはフヒテツサの妖術にまよはされ  
てゆくゆく邪道に陥入り竟に彼れがすゝめに任せて崩れ易き沙丘のほざりに建てら  
れたるいささらくしき宮殿に立寄りける、此の宮殿は邪神女ルシフヘラといふがみ  
づからほしいまゝに女皇と稱してもろくの悪しき神どもを従はせ驕奢暴慢に耽り  
て年ごろすまへる館なりきツオルツはフヒテツサが此の宮殿に宿れる間にサンフ  
オイの三人兄弟の一人なるサンツヨイ(無悦)といふ者こゝに來たり赤十字の紋章にて  
兄の敵を知り決闘せんを求め竟にツオルツとサンツヨイとめざましき格闘をす、ツオ  
ルツは此の戦にて重傷を負ひけるが奮戦して敵手をも倒し殆ど彼れを殺さんとしけ  
るに妖婦靈を起こしてサンツヨイをかくしければ果さざりき其のうちに矮奴(常態)が  
其の本能の力にて其の主の身の危きを窺ひ知りかく此のころを落ちたまへとす  
めければツオルツもやうやく心附き手疵の痛を忍びて隣者の館を逃れいできされど  
フヒテツサが早くもかくと知りてまたひ來たりまたも巧言令色をもてツオルツが心  
をさらかしければ武士は身も心もやうくたゆみ現世に在る限り決して脱すべから  
ざる正義の甲冑をもぬぎすて、或木の下に休らひける、此の油断の折しもオルゴリア  
(傲慢)といふ巨人進み近づき只一撃にツオルツをうち倒し妖婦のすゝめにまかせて或  
土牢のうちに押しこめけり、かゝりしかば愚直なる矮奴はツオルツがぬぎ棄ておきし  
甲冑を荷ひてひざりまことの姫を尋ねあちこちさまよひぬ此の時しも豈に矮奴は精等  
が宿をたらいで、またも赤十字の武士を尋ねめぐりつゝありければ竟に端なくも矮



矮奴は赤十字の武士が災厄を臨み、姫と共に不幸壽命を打歎きけるがたま／＼大英傑アーサルが靈夢に感じて神女皇にあひ見んと志して神仙國にゆかんとてこのあたりをよぎれるに遭ひて一伍一什のこしかたを臨み其の宏大なる助力を得んことを乞ふ。これよりアーサルが其の請を納れて巨人が居を襲ひ難戦して竟に巨人とヂウエツサが騎りたる神變不思議なる怪獸とを殺し赤十字の武士を救ふこと、ヂウエツサが竟に醜惡なる本相をあらはすこと、壹姫の言葉に去たがひて彼れを放免すること、それより赤十字の武士が大に慚愧しやがて自暴自棄の病にあちいらんとせしを壹姫が深切なる介抱と意見とによりて蘇生しさて懺悔の功徳にて前日の重傷を療治すること、並びに信望慈といふ三姉妹が事、ソオルツが更に勇を鼓して壹姫の故國に赴き數日の間毒龍と苦闘して竟に神明の加護によりて彼れ(悪魔王)を滅する事及び眞と誠とのめでたき結婚に至るまでを第一卷のあらましの節とす。第二卷以下の結構は之れに準じて知るべし。

以上第一卷の梗概のみによりても知らるゝ如く『神女王』はうるさきまで教訓の

旨に富みたり。かゝる作は一步を誤らば無味乾燥なる寓意譚となるべく若しくは荒唐奇怪なるお伽草紙の如きものとなりぬべし。然るに此の長篇を綴りながら尙よく其の病に陥らざりしはスペインサルの大詩人たる明證なるべし。ドウデソも之れを説いて曰はくスペインサルの教訓を旨としながら尙よく好詩篇を成すを得たるは彼れが天才に二特質あるに因る。曰はく無形之美を享樂するの力曰はく可憐高雅なる人性を悦ぶの心と。げにや彼れ若し此の二大特質なくしてひとへに教訓を重ずること古今の俗作家の如くなりせば『神女王』は一種の勸懲譚たるにとゞまり詩としては殆ど見るに足るの價なきものとなりしならん彼れが嚴格に過ぎたる道念は美感を滅却して餘あるべければなり。然れどもスペインサルが作は決して教訓一遍の作にあらず、彼れが作の特質は其の道念の嚴格なると同時に造化人間の美を愛し之れを活ける如く描畫するの妙なる天才に在りて存す。而してスペインサルが愛する美は所謂フラトールの美(イデア)にして主と無形中に存する者なり、形骸の美にはあらざるなり。彼れが十二の美德中に美を認めたるも敢て世間的道義のみを重ずるが爲にあらず無形之美、理想の美を愛したればなり。



此の心ひとりよくスペインサルを救ひて大詩人たるを得しめたり。

### 詩歌の四相

エリザベス朝の詩歌は一千五百八十年以來四たび其の質をあらためたり。スト  
ツプホオド、ブルック此變遷を略叙して頗る其の要を得たり。案ずるにエドマンド、  
スペインサルが諸作は英國に於ける文藝復興期の傳奇的精神ロマンチック、スピリットを反映したれども未  
だ當時の全豹を現じたるものに非ずエリザベス時代の英國生活の全分は他の諸  
家の作を通覽しさて後はじめて窺ふを得べし。姑く劇詩(即ち脚本)を除きて尋常  
の詩歌のみを檢するも一千五百八十年以後の詩歌はあつから四種に分かれて  
明に國民生活の進化を代表せり。假に此の四段の進化を個人の一生に譬ふれば  
第一は年少血氣の期にして戀歌、傳奇の歌、空想の歌などの最も盛に行はれたりし  
時なり第二は國民がやう／＼大人びたりし時、即ち放縱なりし情熱が次第に冷却  
し定まれる目的もあらで實行又は思索に狂奔したりし意氣の漸く沈み一意國家  
を重じ國家の爲に行爲し國家の爲に思索し國家の爲に謳歌せんとする愛國心を  
懷抱するに至りし時、すなはち所謂史劇家の輩出し愛國詩歌の行はれたりし時な

り。さて其の次なる第三期は眞に老成時代と名くべき時なり國民の熱心と才力  
とが今はもはや事物の外相の上に向かはずして深く諸相の内面に入れり、すなは  
ち國民の心や、眞摯慎嚴となり其の分別思慮する所もまた頗る深刻となりぬ、こ  
れ詩歌の方面に於ては頻に哲學的諸作のいでたりし時にてシェイクスピアが最  
傑作と稱せられたる悲劇は總じて此の際に物せられき。さて第四期はや／＼上の  
三時期とは趣を異にせり。上の三時期は之れを少年、壯年、中年に喩へ若しくは春期、  
夏期、秋期に喩ふるも不可無きものなれど第五期に至りては之れを老年若しくは  
冬期に喩へんことさすがに穩當ならぬ所あり。蓋し此の第四期は前に擧げたる  
三期の正當なる引續きたるよりはむしろ宗旨上に關する軌轍といふ一新原素を  
加へたる新變遷の端緒なれば、こはエリザベス時代の末年といはんよりはむしろ  
次なる内亂時代の發端といはんかた穩なるものなり換言すればこは舊信仰と新  
信仰との軌轍がまさに関ならんとせる時なり。かの宗旨に關したる詩歌の多く  
出でたりしは此の際なり。

予は此略史に於て以上四期中にいであたりし夥多の作家をば敢て詳叙せんと力め



ざるべし。第一期なる戀歌の秀逸なる者はバルクレーヴが編集せる『黄金庫』の第一巻中にあり、よりて以て此の種の一斑を窺ふことを得べし。其の多數の主題は少年の戀愛若しくは空想の事に限られ其の體はちほむね抒情歌の短きもの即ちソング並びにソネットの體なり。作家の著名なるものはニコラス、ブリットン、ヘンリー、コンスタブル、リチャード、バイチフィールド等、スペインサル、シドニー、マアロウ、グウィーン、ヒール、ロウ、シェイクスピア等はた此の種の作あり。

所謂愛國の詩歌は概して英國の舊史に關したるものなり。かの『治者の鏡』の如きは此の種の詩の萌芽なりといふべくシェイクスピアの史劇の如きは其の圓滿なる果實とも稱すべし所詮愛國の詩歌は國家昌盛の餘光なりき俗にいふ國自慢の念が煥發して詩歌となれるものなり。思ふに此の氣脈を代表したるものは井リアム、フイーナル、サミュエル、ダニエル、并にミカエル、ドレイトンの三人なるべし。其中最も傑出したるをドレイトンをとす。其の史詩二あり一を『エドワード二世』と諸侯伯との内亂』と題し一を『England's Heroical Epistles』と題す、なほ別に『Polyolbion』といふ長篇の作ありこは韻語もて英國の名勝舊蹟を叙狀し兼ねて種々の奇話逸

事を語りたるものなり。卷の數三十韻語の行數無慮十萬なりといふ。

哲學的詩歌の興りしは降運漸く窮極して企業的熱心の鎮定したるに職由す。すなはち一方より觀れば民衆の心に靜坐思索すべき餘裕を生ぜしに因る、されどまた一方より觀れば當時の國民が漸く人生の大謎語に衝突し沈思尋究の必要を感じたるなり。此の種の詩脈を代表する者はダヴィイス、グレボルの二家なりとす。

前者が壯時の作『オルクストラ』の如きは全世界を一舞踏なりと解釋せる者なり而して其の晩年の作に至りては理窟に流るゝことますます多くして詩趣に遠かるといよく甚し『自己を知れ』といふ其の長篇の表題としたるを見ても其の詩の如何なるかを察するに足るべし。シェイクスピアの如きも多少此の氣脈に感染したりし證據其の喜劇より悲劇へ移りし過渡に於てほの見えたりすなはち一千六百〇一年のころなり。なほ此の事はシェイクスピアの條下にいていふべし。要するに此の哲學的傾向は後にホッブス、ハーリントン、ロックなどいふ大なる思索家を出ださん前兆なりき。

## 散文



リ、ロンドンニ等が華文につきてエリザベス朝に於ける散文の名家として傳ふべきは宗教文學にてはリチャード、フツカル、史家にてはナルタル、ロウリー、哲學的論說にてはフランシス、ペリコン此の三家とす。フツカルは一千五百五十二年に生れて一千六百十八年に死せし一代の英才なり。共に第二期のエリザベス文學中に攝すべきものたるよりはむしろ第一期中に屬せしむべきものなれど便宜の爲にこゝに附叙す。ロウリーは當代第一流の俊傑にして秀才の譽高く文武の功蹟の甚からざりしが爲に女皇エリザベスの殊寵を蒙り遠く亞米利加の新土に航してブルニヤの植民及びギアナの攻略によりて更に盛名を博し且はじめて馬鈴薯と煙草とを輸入せり身を終ふるまでに政治、航海、金礦等に關する著述凡そ三拾餘種に及ぶといふ。後世には重に歴史家として知られたれど其の世に在りしや廷臣としても武將としても航海家としても政治家としてもはた詩人兼散文家としても餘々の名高かりき。エリザベス崩じジェームス一世皇位を繼ぐに及びてロウリー故無くして王の忌諱に觸れ罪ならぬ國事犯の罪を得て獄中に繋がるゝこと十餘

年なりしが新に王家の爲に南米に渡航せんことを厭議して一旦其の罪を赦されしにも拘らず企業其の功を奏せざりしがため又もや王の不興を蒙り一千六百十八年更に前罪によりて死刑に處せられき。之れよりさき彼れが十二年間獄に在りしやをさく理學文學の研究に従事し幾多博學なる友人の助力によりて竟に彼の有名なる『世界史』を卒業するに至りぬ。ロウリーが散文の名家として後世に知られたるは重に此の大著述に因れりとす。温厚篤實なるリチャード、フツカルは活動の人としては大に傳ふべきもの鮮しされども文壇の俊豪としての聲譽は長く其の名著“A Treatise on the Laws of Ecclesiastical Polity”と共に傳はりたり。此の著の正面の目的は教會員に對する英國基督教會の權理の基礎を考定し該教會の根本大法を講明し且各會員が常に教會に對して遵守せざるべからざる義務の本質等を論定するに在りき。たゞしそはたゞ直接の文義にして更に深く合味するときにはフツカルの所論は其の關係する所頗る深遠なり彼れは實に英國教會の權理義務を論定して羅馬教徒並びにカルビン教徒の妄を破せんと試みたりといはんよりは寧ろ一切の政治及び宗教上に於ける法



規權理義務等を講明せんと試みたるものといふべし。其の文辭明暢雄勁、そのころ神學的文學の常弊たりし虚飾術學の失極めて渺し若し夫れ語法語格の瑕疵は其の羅旬語格を應用せんと力めたる爲に間々見ゆれど全躰の上よりいへば辭意双ながら此の著の如きはいと稀なり。彼れ爲人忍容の雅量に富めりきされば其の論もまた頗る中正にして穩當なりといふ。

上に擧げたる二家の外に更に特筆すべき一大散文家あり有名なるフランシス、ペーコン是れなり。ペーコンは實にエリザベス朝に於ける散文々學の極頂を代表せると同時に當時の學問界をも代表せる者なり。嘗て英國最大の哲學家と稱せられし溢美なる名譽は今漸く衰へたれども其の學問上に於ける功蹟は明に大書すべき價值あり蓋し所謂歸納論理法は彼れが力によりて普く學壇に弘布せられたればなり。

ペーコンが略傳を叙する前に少しく十七世紀の起頭に於ける英國學問界の景況を説かんに其のころ哲學と呼び科學と名けたりしものは頗る近代のと趣を異にせり。彼のオクスホオド及びカムブリッジの大學の如きは當時已に學問の中心

たりしがそこに於て教授せし哲學科學は所謂スコラ哲學派の餘弊を傳へて兎角に煩瑣なる講究に流れ甚しきに至りては偏に名目の末に拘泥し迂腐爛熟些の生氣なきを例としたりき。最も重ぜられたりしは論理學と倫理學となりしがこれは太古希臘の碩學アリストートルが學說の枝葉に泥み所謂演繹論法の濫用に流れたり。按ふにアリストートルは古代哲學の泰斗にして其の學說の宏博なるや物理、政理、倫理の各部門を覆へり加ふるに其の比類なき綜合力と判別力とはよく彼れをして古今有數の大智者大哲學者たるの位置を領せしめたり。まかれども其の哲學の器械的部門にしてエリザベス王朝に尤も盛に行はれし所謂演繹論理法は觀察精覈用意周到なるアリストートル其人にしてはじめてよく善用すべき一大利器なるも俗學輕々しく之を用ひば弊の生ずるをまねかるべからず。英國十七世紀の起頭は此の弊の顯然たりし時にて革新の必要は日々に學界に逼りたりき。剩へ之れより先中世紀のころより哲學と宗教と互に相接近し來りて遂には羅馬舊教派の神學說と古代希臘の哲學といつしか相密關するものとなれり然るに所謂神學說は本來保守の性質を有し哲學はもと進歩を第一となせるがゆゑ



に二者動もすれば相矛盾し教理これが爲に其の礎を危うして哲學これが爲に其の眞を毀へり。且やアリストートルの學說も其の末流に墨守せらるゝに及びては甚しき保守の學風となり只管抽象的眞理を講究するをのみ目的とし現實に隔たること日に遠く甚しきに至りては殆ど人世とは相關せざるものゝ如くなれり。ベーコンの時に當たりては此の弊殆ど其の極に達し學壇革新の必要はますます著くなり來たれり。活眼達識の士は之れより先きにも屢々スコラ學派の羈絆を脱して革新を行はんと企てたりしが教會の威力盛なるが爲にいづれも其の功を奏せざりしにベーコンいづるに及び大革新の端はじめて開けたり。すなはちベーコンの~~見~~動<sup>イデオロギ</sup>の兒なり空理的學風に反動して起りたる新學說の祖師なり。其の實利的應用に偏局せしは勢の止む能はざりし所ならん。こゝに其の學說の大要を語るに先ちてまづ其の傳のあらましを叙すべし。

## フランシス、ベーコン

フランシス、ベーコンは一千五百六十一年一月廿二日英京ロンドンに生まれたり其の父は時の掌璽官士爵ニコラス、ベーコンなり。フランシスは十三歳にしてカ

ムブリッツ大学に入り夙に穎悟の譽ありしが其のころ已にアリストートルの學說を批議しひそかに思へらくアリストートルの哲學は徒に空論を教ふるに過ぎず人生に裨益する所無しと。大學にありしこと三年やがて駐劄公使の隨行員となりて佛蘭に遊びぬ。當時の佛京は豪奢遊惰の府こゝに遊ぶ者殆ど其の弊に染まざる者なし彼れひとり超然滞留三年の間曾て講學を怠らざりきといふ。たまたま其の父の訃に接し勿々として國に歸る此の時『歐洲現狀論』の著あり是れ其の最初の作なり。はじめフランシスの尙いと稚かりしや女皇エリザベスは屢々其の父ニコラスの邸に臨みフランシスが聰慧なるを愛し其の齡にまして大人びたるを稱へて小掌璽官と呼びしことあり加ふるに時の宰相シ、ル氏ペーリ卿は其の伯父に當たり官縁はじめより淺からざりしが故ありて伯父に忌まれ仕官を求めて得ざりしかばまばらく志を官に斷ちはじめ法律學を修めたりしを傳手に狀師をもて職とせり。されど本來の嗜好は哲理の講究にありしかば暇ある毎に哲學を研鑽し夙く其の『大著』學問の大改正『別名』眞正哲學の大創設の稿を起こしぬ。一千五百八十二年はじめて法庭に出づ同八十五年メルコム撰出の國會議員とな



り多少の名聲ありき。然るに彼れの性華美を好み衣食住なべて其の分に過ぎたりしかば負債山の如く進退殆ど谷まらんとせり。幸にも時の權門エッセックス伯に知られ伯の幹旋によりて大狀師の榮職を得んとせしが又ペーコン卿の爲に妨げられ其の志を果たさざりき。伯は其の失望を慰めんとてト非ケンハムといふ園圃を讓與せり其の價凡そ一千八百磅に當たれりきといふ。ペーコンが伯に負ふ所は嘗にかばかりにどいままらざりしに交誼いくばくもなく破れたり蓋しペーコンの炯眼早くもエッセックスの異圖あるを看破し之れに附隨するの危きを覺り數回諫争を試みしも聽かれざりし故に交を絶てるなり。かくてエリザベス女皇の晩年ペーコン漸く用ひられてミッドルセックス撰出の國會議員となり又女皇の顧問に擧げらる。時にエッセックスの國事犯事件起こる。ペーコン舊恩人の爲に多少周旋する所ありしが女皇の怒釋けずして伯は死刑に處せられたり。伯が悖逆を公告するの公文は女皇の命を受けてペーコンみづから起帥せし者なりといふ。此の頃彼れ小品の論説文を帥す積みて十篇となれるを一冊子となし一千五百九十七年に發刊せり是れ今にもてはやさるゝエッセックスの一部分なり一千六百十二年更に

増補修正されて後又更に。一千六百六年ペーコン四十五歳の時チープサイドの豪商が女アリス、パルンハムを娶る。之れより先女皇崩じジョージムス一世位に即く。ペーコン王に寵用せられまづ士爵ナイトを授けられついで大狀師となり檢事總長となり掌爾官となり大司法官となり一千六百十八年更に進みてエルラムの男爵に叙せられ翌三年またセントアルバンスの子爵となりぬ。彼れが畢世の大著『新機關』ニュー・メカニクスは一千六百廿年に上梓せられき稿を更へしと十二回に及びきといふをもても經營慘憺の著述たるを知るべし。此の時に當たりペーコンが名譽威權を嫉むの徒彼れが陰謀を摘發して上訴す收賄に關する罪凡そ二十三ヶ條なりき。ペーコン貴族院の彈劾を受け一も辨疏する能はずして罪に伏しぬ。すなはち一千六百二十一年其の官職を褫はれ重き科料を課せられ剩へ獄に下されたり然れども王ジョージムス其の科料を免じ在獄二日の後釋放せり。かくて後ペーコンはゴルハムベリーの村莊に退隱し専ら讀書著述及び科學の實驗等に從事せり。舊稿論文の添削『ヘンリー七世紀』の編述『新アトランチス』といへる哲學的架空談の著作及び其の大著『學問改正論』中の自然史に關する分を物せしは此の間なりきといふ。一千六



百二十六年にみまかりぬ。

ペーコンが大著『學問改正論』(“Instauratio Magna” or “Great Institution of True Philosophy”)は六篇にて完結の筈なりしが四五六の三篇は断篇零章をとりめたるのみ。第一篇の正題は“Partiones Scientiarum”にて専ら當時の學問の状況を概論し其の衰頹の原因を説明せる者にて一千六百〇五年『學問の發達』(“The Proficiency and Advancement of Learning”)と題して英文にて出版せしが其の後多く訂正増補して一千六百二十三年あらためて出版せり此の時はすべて羅甸文をもて物し題名も“De Augmentis Scientiarum”と改めたり。第二篇はすなはち『新機關』にしてこは専ら演繹論法の謬妄を説破し歸納論理法の必要なる所以を論じ且其の原理を説明せる者也。曰はく「人間は自然の臣僕兼解釋者なり彼れは自然界の法則及び秩序に關してはみづから作動若しくは冥想して觀察し得たる外を知る能はず又行ふ能はず」と。謂ふ意は凡て談理は實驗を礎とせざるべからずといふなり。又曰はく「人間は自家の觀念より宇宙を作りいださんと欲し又自家の心中よりすべて其の素材を抽出せんと欲したりされど若しまかなすかはりに専ら經驗と觀察とを基礎となさしな

らば空論空説のかはりに事實を收むるを得たりしならん又竟には物質界を左右する大法を知るに至りしならん」と。これはた粗鹵なる演繹法の弊を刺れるなり。按ふにペーコンが歸納論法は英國實驗科學の礎となりしもの所謂『新機關論』は彼れが大著中の最要部分たるや明なり。彼れは此の篇に於て歸納法の諸則を規定せしのみならず論者の動もすれば陥り易き諸種の過誤の根原を論じ且其を矯治すべき方法をも説けり。彼のアリストートルは夙に論理式を制定し三段論法の規則を設けかくして似て非なる推論を豫防せしがペーコンは更に一步を進め論理的誤謬の原因の單に用語上のみ存せずして論者の心内に在るを看破し仔細に僻見の因縁を説けり是れ有名なる四偶像論なり。其の要に曰はく或一族又は或一門の舊慣舊習を崇尊し荒唐奇怪なる傳説を推重し其の他を顧る能はざるが故に謬見生ず是れ一なり。若しくは或政黨宗旨時尙時習等に執着し又はものが得意の書に拘泥し何事を觀察批判するにも其の準繩を棄つる能はず此の故に謬見生ず是れ二。若しくは其の境遇又は其の公職とする所の事業(即ち自家の専門)にのみ着して其の以外の美を認むる能はざるの謬見是れ三。若しくは或學説に



執着するより生ずる膠見此れ四と。

さて第三篇は“Phaenomena Universi”にしてことは事實と經驗とを蒐集し且之れを分類整理する方法を教へたるものなり。蓋し事實と經驗とは歸納法の精髓なり。此の篇中「風の史」「生死の史」は羅甸文にて物し所謂自然史だけは“Sylva Sylvarum”と題して英文にて物せり。さて第四篇“Scala Intellectus”第五篇“Prodroim”第六篇“Philosophia Secunda”はいづれも断篇たるにといまれり就中最後の篇は全く筆を下さざりしなり。これらは今細説するの要なければ省きつ。蓋しベーコンはじめて歸納論法を規定せしと學問の革新を唱道せしとの爲に一代に盛譽を博したれど其の實彼れが説く所はあまりに實用に偏したり彼れはあくまでも厚生利用をもて諸の學問の目的とせり「智識は實力なり」といへる彼れが訓言は能く其の主旨を表明せる者なり。彼れは以爲へらく「自然即ち造化の理を知るはそを利用するの力を得る謂也」と。テーン嘗てベーコンを評して謂へることあり其の要を摘せん曰はく

ベーコンは最大の度コンセンサスに於て常識コンセンサスを有したり。彼れは極めて實踐的なり又實利的なり。

彼れがアリストートルを大才と稱しながら其の學問を非難せしはアリストートルが哲學の人間の利驅を進抄するに益なきが爲に外ならず。要するにベーコンは思索其の物を受する人にあらずして實地應用を受する人なり。其の目は天に向はずして地に向ひ浮虚なる事物に向はずして堅實なる事物にのみ向へり。彼れ已に其の哲學を名けて『新機關』といふ彼れが眼中より見いだし來れば學問は悉く人間改造の器具たるに外ならずりしなり

どげにや嚴密に彼れを評せば彼れは大なる思索家にあらずしてむしろ大なる應用家また大なる修辭家なり。彼れが論説の大かたは絶妙の巧辭をもて表白せられたる常識の集合ともいひつべし。されど其の學識該博にして精根衆に超え一代の卓見家たりしことは争ふべからず。尠くとも英國經驗學派の率先者たるの名譽は何人も否む能はざる所ならん。

ベーコンは羅甸の古文學を崇敬するのあまり近世國語を卑むこと甚しかりき。謂へらく總じて此等近世語は早晚書籍と共に亡滅すべきもの。彼れの書を著すやたまく英國語をもて綴ることあるも多くは別に羅甸文をもて其の譯をなすを例としたり蓋し英語亡滅の後を慮りてなるべし。かく自國語を卑みし應報



は靦面なりき彼れが羅旬文の著作は甚だ多けれども“Novum Organum”を除くの外は今殆ど讀まるゝものなし。然るに其の英文にて物せる“エッセー”及び“The Advancement of Learning”『學問の發達』は我が國人にすら愛讀せられ。其の外『ヘンリー七世紀』“The New Atlantis”及び“The Sylva Sylvarum”もまた英文もて綴られたれど此等は今殆ど讀まれず但しこは其の質の陳腐なるが爲のみ。

所詮ペーコンの後世俗間に知らるゝは重に其の“エッセー”によりてなり又其の文章家としての眞價値は専ら之れによりて見るべきなり。件の論文は總體にて五十八篇いづれも『文章軌範』唐宋八大家文集』などにありふれたる如き短篇にて近世に謂ふエッセー(論文)とは趣異なり。もとエッセーといふ語は試筆又は試文などいはんほどの義にて思ひよれるまゝを咄嗟の筆に物したるを指せるなりきさればペーコンのエッセーも大抵は隨筆めく論文にて近世に謂ふ物々しき論文にはあらず。さりとして我が國の隨筆物のやうに秩序もなく感ずるまゝを筆に言はせたるにはあらず句々洗鍊にして言々圓熟し條理はた井然たり處々散文の詩ともいふべきほどに詞藻うつくしく比喩巧なれど而も一字の冗もなく簡淨の致を極めたり。

或は稱してペーコンの句々は皆格言なり其の一句を敷衍せば一大論文を成すに足らんといふ論に然り。

所詮ペーコンの文は當朝に於ける華なる散文の極致を代表す。彼れの冷靜と圓熟とを以てして尙幾分か華文めく病あるを免れず詩的時勢の影響を見るべし。

#### 第四章 劇壇并びに脚本家

英國の劇も希臘ならびに其の他諸國のにひとしく其の源を宗教に發したり。蓋し文化の尙ほ未だ洽からざりしや僧侶以外に於て文字を解するもの殆ど無く而して法談などいふ事も行はれざりしかば別に或方便によりて愚蒙の徒を教誨する必用ありき。所謂神劇と奇蹟劇とは基督の教旨該教の聖賢義人及び其の經典中に見えたる著明なる事件を知らせんとて僧徒の工風せし所なり。我が國俗或は誤りて泰西の演劇はすべて希臘に緣起せしものゝやうに思へれど中古以後の泰西劇と古代の希臘劇とは全く其の性質を殊にしたるものなり。學者或は中古以後の劇を傳奇劇又はゴシック・ドラマと呼びて古代劇即ち希臘羅馬のと區別する中に就きて英國并に西班牙の劇は純然獨立の緣起を有す絶えて古代劇に因縁す



る所無し。

### 神劇

英國劇の禮式は時代と共に變化せしが其の最も古き體は前に謂へる神劇又の名奇蹟劇なり。或は稱して怪異劇ともいへりたゞし正當にいへば奇蹟劇は重に舊約書の事件に關し神劇はをさく新約書に關するものなりされど英國のは必しも此の區別を具へざりしが如し。皆基督經典中の事件を經とし聖賢義人の傳を緯したり其の脚色の荒唐無稽にして猥雜粗笨なりしは奇蹟劇といふ名によりても推知せらるべし。思ふに我が二十五座三十五座などいふ神樂劇に髣髴たりしものならん。始めて英國にて奇蹟劇を興行せしは一千百十年なり後にセント、アンパン院の住持となりしサオフレいといふ僧の發企せし所なりといひ傳ふ。其の後ヘンリー二世王以來此の種の劇おひくに行はれ詩宗チヨウサルの頃には殆ど普通の興行物となりそを演ずるものもひとり僧侶ばかりにはあらずして平人はたこれに與りきといふ。かくて一千二百六十八年のころに至りては市人中に結社して神劇を演ずる者あまたいできちのく經典中の主要なる事件を脚

本に物して世界開闢より最終審判日にいたるまでの事を演じき其のうちいと長きは三日若しくは八日間もついきぬといふ。又其のころの舞臺は譬へば我が蹄家牀などに似ていづれも二重にまつらひ上なるを正當の舞臺とし下なるを樂屋とし時としては地獄にも代用せりとか。且こゝかして自由に率きまはり得べきやうに車輪をも附けたれば市中の廣き場所にひきゆきて隨時に興行するの便宜ありき其の結構の粗末なりしこと想ふべし。さて當時の演劇社すなはち組合のうち其の劇本の今の世に傳はれるもの三あり Towneley の Coventry と Chester はれなり共に一千三百年より一千六百年までに行はれたりしものなり其のうち第一の組合の劇本は三十種第二のは四十一種第三のは二十四種いづれも近きころシェイクスピア會にて編纂發行せりと聞こゆ。中に就きて最も古きは Towneley の劇本なり今其の筋立の大概を抄録したる者を見るにまづ其の第一編には世界開闢の事ルシフハル(魔王)并に其の黨與の悖叛及び彼等が天界より逐ひいださるゝ事等を含みたり。はじめて場の開かるゝや天神出現して簡短なる白を述べやがて世界の開闢に着手す天人等一齊に神徳を謳歌す神すなはちまづかに帝座を降り



て下場す、悪魔たちち神の空座を篡奪して傲然衆天人に君臨す此に於てや善悪の諸天人争議決せず、たましく神歸り來たりて大に怒り悉く賊徒を天堂の外に逐ふ。次ぎてアダム、イヴの二人創造せらる而してエデンの樂園に於ける二人の幸福を嫉妬する悪魔の白は此篇の結局なり。さて第二の劇本はアベルの虐殺を骨子とせり開場と共にケインに事ふる一僮上場して開場詞の如き物を述べ、觀者の謹慎沈黙して觀んことを警告す。ケインやがて農具を携へて上場し僮と耕作の事に關して相争ふ、アベル上場してケインを遇すると懇なり、ケインかへりて之れを虐遇し且終に之れを殺す。次ぎてケインが呪咀の白あり、僮とをかしみの立廻り及び問答あり而してケインが觀者に對して告別の白を述ぶるをもて結局とす。第三の劇本以下前例によりて類推すべし。概して悪魔をもて重なる人物とし且多少滑稽の素をまじへたり所謂悪魔は間々我が二十五座のばかに相當す中には我が道戯芝居に似たるものもあり。Chester 并に Coventry の劇本も其の性質の大體は上に擧げたと同じと管々しければ今は悉く省きつ。神劇中にいづる主要なる人物はヘロツドとタルマガントとなり甲は古の虐殺者、

乙はサラセンの惡神にて共に我が所謂荒事師の役廻りを演じたりき。ヘロツドの白は概して左の如し。

我れこそは全き人類の大君、命するも打つも解くも縛るも我が心のまいた太陰も我れが命するまいた、まいた心におぼえておけ、我れの權力は無上だぞ、今も昔も行末も我れは無類の剛の者だぞ我れ退れど命すれば太陽もえ照らさぬわえ

タルマガントはおそろしき高言者、争論者、殺人者、世界の制御者、地震と雷との兒、死神の同胞など稱せらる、後には此の二人物の中いづれか一を具へざるを不具の劇とせり。ヘロツドとタルマガントとが當時の劇に於けるは猶我が金平の金平本に於けるが如くなりき。

教劇

神劇一變して教劇といふもの起りぬこれ後の正劇の萌芽なり。そもく神劇の本來の旨は上にいへる如く神學上の事件理義を不學に教ふるに外ならざりしが新奇を追ひ變化を好むの念は演劇者をも看者をも驅りて次第に其の主題の區域を擴張せしめ最初はたゞ目先を變へん爲にのみ挿加せし神學經典外の比喩的人物も月日を経る儘にやうく劇の主要なる人物となり隨ひて劇の筋立もいつし



か世間の事相を主とし、竟には宗教の旨に遠離るに至りぬ。さて此の新體の劇にては常に人の善徳と惡徳とを重立たる人物とせり、後には富貴善行懺悔死などいふ無形の性質及び境遇までが比喩的人物に作られて舞臺に言動するとなりぬ。概して善徳の竟に克ちて惡徳の敗るゝを劇の筋立とせり。かゝりしかば夫の神劇にてはワキとなれりし惡魔は教劇にては主要なる道戯形となり惡徳といふ他の道戯形と共に猥俗を極めたる滑稽的科白を物して専ら看者の嬉笑を買へり、但し惡魔は其の相貌をも言動をも頗る醜くおそろしく物したれば眞の道戯形たるよりはむしろ惡形に近かりしならん。惡徳は後の醇粹なる道戯形の祖なり。教劇の種類は一二のみならず爰には只一つ二つを擧げて其のあらましを示すべし。いと古き作のうち「心意知」と題したる教劇あり、智慧まづ場の上る、やがて精靈來たりて彼れと合躰し共に神の慈悲、七聖餐、五官、理性等に關して問答するとあり、次ぎて心意知の三者おの／＼其の特に司る所の性質を演説す、其の時處女の扮装したる五智常識コンシヤクツ、想像力、決志力、思量力、記憶力一齊に唱歌することありて退場す。さて惡魔王ルシフハル上場し、心意知は人の魂の三性なりと演説し、さて我れ此の

三者を獲ひて腐敗せしめんと欲すといひ、姑らく下場し、又忽ち上場し、難無く其の志を成就す、やがて揚々として高言壯語す、かくて其の演説の將に終らんとするに臨みて、彼れは突然一人の小童、恐らくは看者中の小童を引きつかみおそろしく叫呼しつゝ退場す、これ滿場の喝采を博せん爲なり。惡魔王の去るや、彼れが犠牲となりし三者は、でやかなる衣裳を被りて上場す、今や彼等は、其心を見失へり、かゝるがゆゑに、意まづ邪淫に傾心し、衆皆一齊に起ちて歌ひ且舞踏せんとす、心まづ其の黨類を招集す、嗔、患、來たり、頑固、來たり、害心、來たり、短慮、來たり、破壊、來たり、不和、來たる次に、知、其の從隸を呼ぶ、邪智、來たり、輕蔑、來たり、不義、來たり、不信、來たり、暴虐、來たり、詐、欺、來たる、かくて又意の諸僕來たる、不注意、怠惰、飽饜、貪婪、姦淫、等是れなり。已にして伶人等角笛を吹き鳴らし、一同起ちて舞はんとす、忽然として大爭論起ころ、十餘名の惡徳等皆逃走す、ひとり心意知の三者のみ舞臺に留まる。此の時智慧上場す、精靈もまた上場す、精靈の相貌のおそろしきと惡魔にもまされり、彼れたちどころに六の怖ろしき罪業を生む。こゝに於てや精靈は、じめて我が姿の變はりたるを覺り、而して心意知は此の怪異の自家等の非行に縁起せるを知り、やがて退場



す其の時智恵口を開きて長白を述べ、心意知再び上場して懺悔改悛の意を述べ、精靈かくどきいて痛く打喜ぶ。これを大略の筋立とす。

總じて教劇の旨は善惡兩性の争鬭を諷示するをもて主としたるが中に間々人性の大概がほのかに見えたるもあり。一千五百三十一年前に刊行せられたりし「昔人」と題したる教劇の如きは上帝の獨白をもて場を開けり彼れは人間が七のおそろしき罪業の爲に神を見棄つるを打慨き死の神を召して云々と吩咐することあり死の神すなはち命を奉じて昔人といふ者の許に至りて其の業の計算帳を上帝の宮(冥府)に持參すべしと傳ふ。昔人といふに於て其の信友黨與とびふ者の許に赴き此の長旅の伴侶たらんことを乞ふ黨與は昔人の爲に何人をも殺さんほどの真心はあれど此のたびの事は諾しがたしといふ。次に親族に訴ふ豚に癩癩の患ありて同伴しがたしと辭す。富貴に訴ふ彼れ冷々たり最後に善行といふ女性に訴ふ。此の女尙甚だ孱弱にして殆ど立つこと能はず昔人が携へたる業の計算帳の空白なるを指示しやがて知識の許にゆけといふ。昔人の知識に遭ふや知識に紹介せられて懺悔に遭ひ次いで鞏固、分別、美性及び五智に逢ふ、彼等皆共に行かんと

誓ふ。已にして墓に臨むや美性まづ共に行くことをいなみ鞏固はた逡巡し、分別五智次ぎて辭す知識すら昔人を棄てて去る。最後までも離れざるはひとり善行ありしのみ。

はじめて套の數を五とし更に一套中に幾多の齣を設けしは思ふに「智と學との結婚」と題したる教劇なるべし。又たや、個人性を描き得たるに近しと見るべきは「Like Will to Like, Quoth the Devil to the Collier」と題したる教劇なり。此劇にいづる人物には主人公にして惡徳をも兼ねたるコール、ニウマン、ハンケルといへるをはじめとして其の友 Ralph Royster Tom Tospot、Philip Fleming、Pierce Pickpurse、Outlibert Outpurse などあり。なほ別に名譽、嚴刻、面目などいふ比喩的人物もあり。其中前に挙げたる人物の如きは多少個人的性格に近きものを具へたり。若し夫れ史劇の篇の主人公なる Philologus は明に俗界の名利の爲に神明の教を棄てきに傳へたる伊太利の狀師フランシス、スベイラの替名なり。

### 正劇への變遷



純粹に抽象なる善徳と惡徳とを人物としたる教劇は到底尋常看者の同情を牽く能はざりしが故にいつしか青史に著名なる善惡人の名を借りて此等諸徳を代表せしむること起りき此れを史劇の緣起とす。まかしながら其のころアルタスと呼びアリスタイデーズと名けたる劇中の人物は未だ以て一個人の性格を具へたるものといふべからず蓋しアルタスは愛國心の權化、アリスタイデーズは公正の替名たるに過ぎざりし故なり。且や之れと共に言動する他の人物中には間々純粹の比喩的人物もありて後の史劇とは大に旨を異にせり。此の故にストアホオド、ブルックは以爲へらく所謂正劇の興隆は殆ど此等諸劇とは關係する所なし彼れはむしろ古代劇及び伊太利劇を模範として成りしものといはんが至當なりとさて論を繼ぎて曰はく「さりながら在來の諸劇もまた多少の變遷を経ざりしにあらざり而して此の變遷をして迅速ならしめし者は實に宗教的革命的衝動なりとす。蓋し宗旨上の軋轢の劇烈となれりしや彼の單に過去をのみ再現する演劇はもはや現在に熱衷せる世人を悅樂する能はざりき此に於てや劇もまた一種の黨派的機關となり或は舊教派に利用せられ或は新宗派の一武器となり所詮は比

喩の假面を被りて當世を諷刺する一具となりぬ後の滑稽劇即ち喜劇は多少此の新教劇にも胚胎せりと(以上義譯)案ずるにはじめて喜劇の要素を作り且劇をして密に現實の人間に關係せるものとならしめし者はジョン、ヘイウッドなるべし。ヘイウッドはヘンリー八世に仕へたる劇の作者なり。彼れが作はもとより正當の喜劇にはあらず彼れはその作を名けて間劇(Interlude)といへり即ち合間狂言の義或はツナギの幕とも譯すべきか宴樂又は他の遊戯の間に餘興として演ずべき短き劇を謂ふ。ヘイウッドの作の中名高きは「A Merry Play between the Pardner and the Prior, the Curate and Neighbor Priat」と題したる者なり譯すれば「赦罪師并にフライアル僧、牧師并に隣人饒舌の間のをかしき劇」といふ義なり、こは當時の僧侶の敗徳を諷刺せる者にて其の大體の趣は頗る我が能の狂言に似たり。尙「夫ジョン、婦チツブ、僧ソル、ジョンの間の好笑劇」又は「四ロー」(The Four Ps)などいふ作もあり今煩しければ詳叙せず。蓋し間劇といふ名目はヘイウッドを俟ちて起りしものにあらねどそれを殆ど教劇より分離して一種の滑稽劇とならしめし功は特りヘイウッドに歸せざるべからず現實らしき人物の劇に現はるゝに至りしは彼れが作を嚆



矢とすればなり。

### 正劇

さりながら其の英國喜劇の最も古き標本は、*戯くとも*世に知られたるは、一千五百五十二年に成りきと傳へたる *Rolph Roister Doister* なり。こは宗教革命に關するいと古き著作家中に盛名あるニコラス、エーデルの作る所なり。エーデルは古文學の教師として名高く又ウエストミンスタル學校の教頭としても知られたりき。一千五百五十六年逝く。彼れは件の劇の開場詞中にて余は羅馬の劇詩家プロウタスとテレンスを摸範とすといへり。套の數五而して更に套を分ちて數齣とせり。處は英都ロンドンにて人物風俗等は悉く英吉利を本とせり。主人公はロルフ、ロイスタル、ドイスタルにして女主人公は寡婦カスタンス夫人なり。ロルフがカスタンス夫人に戀慕して結婚をいひいるゝを夫人がきびしく擯斥し、ロルフの友マツシウが其の間に周旋してくさくさの失敗をなすをかしみより終に兩黨の間に笑ふべき争鬭を醸すこと及び夫人が情人なるグットラックと夫人との間の行違ひなど最初の喜劇としては見るべきもの趣からず而して我が浪花の俄芝居な

どに比ぶれば着想落筆双ながら數等の上にあるものゝ如し。

最古の英國悲劇は *Gorboduc* 又の名 *Ferrex and Porrex* なり。サククギルとノオトノどが分擔して一千五百六十二年に作りし所なり。其の脚色の大要をいへば紀元前六百年のころ英國王ゴルボダックといふが有り其の在世中に其の領土を二分してフェレンツクス并にポレンツクスといふ二皇子に與ふ其の後五年二人互に全權を得んと欲して兵を起す國內大に亂れ而してポレンツクスは終に兄フェレンツクスを殺しぬ。太后ギデナといふあり殺されしフェレンツクスを深愛したりしゆゑにかくと聞きて恨み怒り或夜ひそかにポレンツクスの寢室に忍び入りて其の讎を復す。さるほどに庶民大に激昂しやがて蜂起して老王夫婦を殺す。此に於てや貴族等相會して治國の策を議しまづ大に暴徒を討ず。已にして貴族等相争ひ國內紊るゝこと麻の如し而して之を統一すべき皇嗣なし。強者弱者を壓し新陳代謝して國權を握る内亂これが爲に間斷なく全國疲弊の極に沈む云々。これを大跡の筋書とす。此の悲劇は一套毎に必ず一場の默劇を添へたり豫め演ぜんとする事件を知らせんとてなり又初めの四套には其の尾毎に一段の曲を附加し已に



演じたる事件につきて褒貶の意を謳はしめたり。さて爰に留意すべきは此の齊唱曲の外は白の總て沒韻律語よりなれることなり。こは實に劇詩の體式上に於ける大なる改善なりしなり。されど其の他の點に於ては殆ど稱美すべき所なし。さるは現に演ずべき部分はいと掛くして白の大かたは過去の物語より成り加ふるに勲徳の意あまりにあらはに通徹したるがため言々ちのづから自然の妙致を失ひ捏造の跡歴々たりといふ。

さて散文劇の最も古きものはツオルマがスコインが伊のアリオストオの作を翻案せし『The Supposés』といふ作なりとす。こは一千五百六十六年にはじめてクレイネ、イムにて演じきと傳へたり。又伊太利の小説を種本にして劇を作するの例は今は傳はらずなりたる『ロメオ、エンド、ジュリエット』の劇なりこはアリサル、オルツクの翻案に係る。其の他『ダンクレツド、エンド、ボスマンダ』と題したる喜劇も伊のボツカチオの物語を種としたりこは五作者が一套づゝを擔當して合作せしものにて一千五百六十八年法學内院にて女皇エリザベスの覽に供せしを始とす。案ずるに此の作は沒韻律語に關する點だけを除けば他は總じてゴルボダツクが

鑿に倣へるに似たり例へば套の初め毎に默劇を添へ又其の尾毎に齊唱曲を附加したるなど。

一千五百六十八年より同八十年まで諸遊戯の興行録によりて取調べたりといふを聞くに朝廷にて興行せられし劇のみにて五十二篇あり此等の諸作は今は一だに傳はらざれど其の外題によりて察するに其の十八篇は古代(希臘羅馬)の事に關し他の二十一篇は近世の歴史小説等に基き而して他の七篇は喜劇中に攝すべく又残る六篇は教劇に屬すべきものなりとぞ。さてかくの如くおひ／＼正劇の行はるゝに及びても彼の教劇はた全くは廢せられずしてはるかに後年に至るまでも稀々には興行せられき加之彼の神劇といふものさへエリザベスが崩御後に興行せられし例ありとぞ。當時の英國が頗る劇の類に富みたりしを見るべし。

### 劇場

演劇興起の當時にはいまだ一定せる劇場といふもの無かりき。上に擧げたる劇は總じて大學の講堂やうのところ若しくは法學院若しくは朝廷などにて演ぜられしものなり。俳優が自由に演劇を興行するの特許を得しは一千五百七十四年



以後の事なりすなはち女皇エリザベスの嬖臣リイスタル伯が、この優人等が内地の各處に於て演劇することを許されし時をはじめとす。彼等が創築せし英國最初の劇場をブラックフライアル座と稱しき一千五百七十六年の落成なりといふ。同じ年ショーアヂツチユ近傍の野に更に二部の劇場起こりき一をシアトル座と稱し他をカルテン座と呼びぬ。シアトルとは劇部の義にしてカルテンとは帳の義なり。斯くしてロンドン府内のみにても程なく七箇の劇場を見るに至り爾後五十餘年間にPruneの説によれば十九座の多きをいたしぬ。さりながら當時の劇場の好標本と見做すべきは一千五百九十九年にテームズ河畔に建てられし地球座なりとすこはシェイクスピア等一座の俳優の爲に設置せられしものなり。此の座の構造をいはんに内部は圓形にして外部は粗造なる六角塔の形をなせ渠をもて其の周邊を圍繞し且建物の中央には赤き旗をあげたりさて舞臺を除くの外は何等の蓋もなく即ち俗に謂ふ青天井なりしかば驟雨の折には土間の看客は皆濡れき。開場は午後三時を定則とし演技の時間は二時間乃至二時間半を通例とせり三時間に亘りしはいと稀なり。觀者のうち身分高き者は今の樓敷

やうの設の席に着き若しは舞臺なる床几にかゝりて觀覽するを例とせしが尋常の觀者はいづれも土間に立ちて見物しき。此れを土間連と呼びぬ。木戸代は六ペンニー、二ペンニー一ペンニーの三等ありて貴賤貧富を問はず皆自由に入場するを得しが前にいへる舞臺の座席は特に上等看客のために設けられたりしもの故別に一シルリングの座料を課し且床几料として別に一シルリングを課せりとぞ。さてたま／＼床几の不足する時には此等上等客とても或は躊躇し或は横臥して見物しき。彼等は演技中にも煙艸を喫し幕間には骨牌をも弄びぬ。中以下の觀者にいたりては技の果つるや毎に杯を舉げて麥酒を飲み菓を食ひ動もすれば嘲罵争鬪し喧雜雜沓殆ど名狀すべからざるに至りしこと屢あり。或は俳優と觀者との間に口論を生じ往々にして劇外の活劇を演ぜしともあれば或は上等客と土間客との間に行違を生じそれがためにくひあましの林檎空中を彈飛するの奇觀を呈せしこともあり。テイン當時の觀客を評して曰はく彼等は血氣充満せる多情多想像の國民なりき彼等自身が已に一種の詩人即ち劇中の人物なりき蓋しいと粗末なる舞臺の道具立が能く彼等の心眼に金殿、幽谷、深山、荒原等の幻象



を映出せし所以のものは其の多感多想像なりしがためなりと。げに當時の舞臺の粗樸なりしや我が能舞臺の趣に似て更に又質素なりき。舞臺にはさすがに屋蓋ありしも藁のたぐひをもてふきたり而して板間には葭若しくは藁の類を敷き而して總て見切には彩畫を物したる帳を掛け且また正面の引幕も其の初は尋常のフランクネットを用ひ而も其のころはそれを中央より左右へ引き分くるをもて例としたりき今の帳の如く上の方へ巻きあぐるやうにせしは遙に後のことなりといふ。随ひて畫割やうのものもなく又大道具と稱すべきものも無かりき。されば優人の場に上るや支那劇又は我が能にての如く其の何等の人にして今何等の處に在るかを自白すること間々あり或は板札を舞臺の正面に掲げて地の名を示せしこともあり、さるは難船の海原も花園の景色もさまざまに戰場の光景も皆同じさましたる舞臺にて見すればなり。稀に用ひし高塔、禽獸、山林などの形も板にて製りたる甚だ粗造のものなりき。さてまた常時の劇は我が國の劇にひとしく時間の變遷をも嫌はざりしかば劇中の年華の移り變はることいと急なり例へばわづか二時間ばかりのうち或姫君と或年少紳士とが相思ひて出奔しやがて一

兒を擧げ其の兒程無く生長りて或少女と結婚し終にまた一兒を生まんとするに至るまでの有爲轉變を演ぜしとありされど觀る者はそれを異しとも不都合とも感ぜずして能く劇の旨味に同感しきと見ゆ。又そのころには女優といふものもなく總て女形は年少俳優の打扮するが例なりき今日の如き女優并びに自由に移動し得べき大道具の用ひらるゝに至りしは所謂復位期以後即ちチャールズ二世王以後の事なり。

俳優はおほよそ八人より十二人までを一座とし一人にて數役を兼ねて演技したり。現にジョンソンが作『Every Man in His Humour』『人さまざま』の氣質といふ劇には重なる人物十七名も出づるなるにこそ喜劇俳優わづか十名にて演ぜしことあり又同じ作者の『ヒシヤナス』といふ劇には人物三十四名もあるにそれを悲劇俳優の重なる者僅々八人にて興行せし例もありとぞ。シェイクスピア一座のうち最も名高き實悪はリチャードパルベージ(パルバツシとも)にして道戯形の名人井リアム、クムプ、又パルベージに次ぎてハムレット、イアゴーなどに譽を得しはジョホフ、テイロル、女形にて加役にも勝れたりしはリチャード、ロビンソンなど、委しきとは要



なければ今はいはず。若夫作者が開場詞を歌ふを例とせしと、最負の府内に浴くして其の肖像畫を大かたの家に額面に物して掛けたりしと、舞臺の構造と裝飾との質素なりしにも似ず衣裝のいと華麗奢侈なりしと、座主俳優が脚本をほしいまゝに添削せしことなど東西相照して興あることどもは宜しく別に劇史に就きて見るべし。

### リ、ミ、ー及び大學才子の作

ブルックが英國劇の第二期と名けたるは一千五百八十年より同九十六年までなり此の間には彼の『ユーロウエズ』の作者リ、ミ、ーの脚本並びに所謂大學才子の諸作及びシエークスピアの壯年の諸作出でたり。爰にハドソン、セイソツベリ等の最近の査定に據りてまづリ、ミ、ーと大學派との名作をのみ略叙すべし。此等諸家の作は其の體式くさくさなり。一千五百八十七年以前は散文又は韻語にて物すること例なりしがマアロウいで、『サムバルレイン』の劇に没韻律語を用ひしや此の體劇壇を風靡し韻語並びに散文の作は一時殆ど跡を絶ちなき。マアロウの事は尙下にいふべければおらくリ、ミ、ーの作をいはんにリ、ミ、ーが脚本家となりしは『ユ

ウロウエズ』を物せしより遙に後なり。リ、ミ、ーの作は所謂大學派のとは全く別種なり彼れはブルックによれば散文に七種韻語に一種没韻律語にて『サムバルレイン』の擧に倣ひて二種の脚本を物しき『月中女』『エンヂミオン』『マイダス』戀の相變化『處女の相變化』など其の聞とえたる作なれどいづれも多少神祇傳に因み苦しくは『パストラル、ボエム』の氣脈を具へたるものにて正しき劇たるよりはむじろ假面劇に似たる者なり加ふるに其の文致は例のユーロウエズ體の過巧纖細なるのなれば若干の妙なる落想の散見したるにも拘らず劇詩としては固より稱美すべきものにあらず。

大學才子派とは諸大學出身の作家といふ、マアロウ、グリーン、ピール、ロツジ、ナツシエ及びキッド等是れなり其のうちマアロウ、グリーン、ピールの三人を俊秀とす他は必しもいふに足らず。ブルック此の三家を評して曰はく彼等は人間の情慾と行爲との作用を多少眞の劇詩的効力ある筆法をもて書きあらはし、嚆矢なり。ピールとグリーンとは其の作中の人物を種々の境遇にたゝしめて相活動せしめ且相發暢せしむたゞし彼等の筆力は未だ脚色を圓了するに及ばざるなり換言す



れば一齣々々相追ひて自然に結局に達すらんやうに劇を作くるの力量を欠きたり。之れを要するに此の二家は技術を欠きたりされば彼等が作中の人物の語は詞句の詩歌としては妙なることあるも概ね自然の致を失ひ且質ならず。とピールは一千五百七十七年オクスホオド大學にて最初の學位を得又同七十九年に技術博士となり後ロンドンにいでも文壇の一冒險者となり淺ましき放蕩の生涯を経たりしこと當時の専門作家の例にひとし。其の處女作を『The Arrangement of Paris』といふ『パリスの糺問』の義なり。こは例の希臘神祇傳に基きて作れるものにてツエノノ、パラス、ネオスなどいふ諸神祇を人物としたる頗る『バスターラル、ポエム』の趣あり此の前にいでたりし諸劇に比ぶれば詩歌としては勝れること明なりといへども性情劇としては何等の稱すべき點も無し。且やこは特にエリサベス女皇の覽に供する爲に作られしもの故眼目の旨意は女皇に對する追従たるに外ならず。其の他『アルカザルの役』『エドワード第一世王』『老妻の譚』『ダギット王と佳人ベスセレーブとの相思』など題したる作あり『エドワード第一世王』は後の圓美なる史劇の前驅にして『老妻の譚』はまさかにミルトンが假面劇『コーマス』の源泉なり

而して最後に擧げたるは通例彼れが傑出の作と稱せらる。蓋し優美閑雅の妙はシエクレスピヤ以前の脚本家中ピールひとり之れを擅にせりと稱せらる。クリーンは全軀の上より評すればピールに劣りたりといへども才分豊富着想懸利殊に滑稽に秀でたり。彼れは一千五百八十三年に技藝博士の學位をカムブリッヂ大學に得後またオクスホオドの一員たるを許されしかば自ら稱して『二大學の技藝博士』と號しき。其の専門作家となりて後の放逸と悖徳とは當時の他の例に全じ。彼れが種々の著作の最も勝れたるは脚本なり脚本の最も傑れたるは『フライアル、ベリコン』并に『フライアル、パンゲイの傳』と題したる者是れなり。こは千五百九十四年に始めて印刷せられしが劇に演ぜられしは一千五百九十一年をばじめとす。此の劇の主人公の後にエドワード第一世王となりしエールスの公エドワードにして女主人公は掌璽官の女マーガレット、所謂フランスングヒールドの佳人なり。公が狩にいでもマーガレットを見初むることを發端とし從臣シーシーを農家の少年の如く假裝せしめて彼の少女を説かしめんとするを脚色の第一段とす。かくて後公は姿をかへてオクスホオドなる方士ベリコンといふ僧を訪ひ



其の望の成否を占はしむ而して彼の僧が神術は圖らずもレインズトが二心を抱いてマールガレットに懸想し公の爲に彼れを説かずして却りて自家の爲に求婚せることを明しぬ公大に憤る會々レインズト復命す公劍を抜いて之れを誅せんとすマールガレット上走り入りて中裁し假令妾が命を召さるゝともレインズトと別るゝこと能はずといひ且殿下は其の榮譽の之れが爲に汚れんを思ひはかりたまはずやと直諫す。公竟に屈服してマールガレットを棄却す。さて以上をもて眼目の脚色とすれども別にベリオン並びにペンゲイの二僧を一方の方術家とし日耳曼より渡來せるワッデルマストといふ魔法家を他方の敵者として方術くらべの段あり。ワッデルマストがベリオンの爲に破らるゝ場が見せ場なり。さて最後の齣は公エドワードとカステルのエリンノルとの結婚にしてベリオンが豫言を述べざるを當時流行のハハカリとせり即ち後の英國王エリザベスの徳を豫言して讃頌する事これなり。ハドソンの評によれば公レインズト、マールガレットの性格はシェイクスピア以前に無類の作なりと云々。グリリンが作は一三のみならず尙ロツツと合作せしものもあり今は悉く省きつ。

## クリストフアル、マアロウ

クリストフアルマアロウはシェイクスピア以前に於ける英國最大の劇詩家なり。マアロウは一千五百六十四年二月二十六日、即ちシェイクスピアが洗禮を受けし前恰も二ヶ月にカソカルベリイなるセント、ツオルツの會堂にて洗禮を受けきと傳ふ。彼れは一千五百八十三年カムブリッヅ大學にて其の最初の學位を得、同八十七年に技藝博士となり後いくばくもなくロンドンの作者世界に墜落し例の不羈放蕩なる短生涯を過ごしき。彼れは一千五百九十三年六月一日フランス、アールシャルといふ者と爭論の末格闘して命を失ひぬ時に齡卅歳といふ。其の最初の作は『サムバルレイン、ゼグレート』と題したる悲劇にして其の着想の壯大なると其の没韻律語の雄渾勁拔なるとは實に一世を聳動しマアロウが詩名ロンドンの上下に轟きぬ。まかしながら今の所謂脚本を標準として評すれば此の作の如きは白（まじ）を集めて一篇を成せるものといはんよりはむしろ種々の演説を聯ねたるものと評すべし人物の名は相異なれどもそが演説する所はいづれもあなむ頭腦より出でたらんが如く聞かざる即ちバイロン、シェレリ、ミルトン等が作と失を同じ



うせり。思ふに其の一時をうごかましは其の想像の雄勁にして燃ゆるが如きと其の斬新なる没韻律語が他の陳腐爛熟なる有韻律語と相照らして異彩を放ちしとに由るところ多かるべし。されど『タムバルレイン』は彼れが純粹の處女作なり此の作によりて彼れを評價するは妥ならざる所あり明に彼れが技倆は駁々として作毎に進みたり。『モルタの猶太人』に於ては無慚の貪婪を描き『醫師フオウスマスの哀史』に於ては無限の知識餓食を寫し『エドワード二世』に於ては醇粹なる史劇の模範を示せり。かるが故に批評家或は彼れが不幸にして短命なりしを惜しみて歎ずらく彼れにして海運ならざりせばエリザベス朝の文壇に吾人は二個のシェイクスピアを見得たりしならん。ホイッソッペリ解して曰はく此の評は當たらず。マアロウ偉なりといへど全く諷諧滑稽の才を欠けり。彼れの悲壯を自在にする才力と豊富なる想像の才とが此の特質を兼備へなばげに他のシェイクスピアを成すを得たらん猶其の度の一層小ならん場合には他のホルマルを作り而して其の物すこく且とされ／＼なる場合にすら他のダントテを作らんが如しと。ハドソンもまたいふ喜劇を成すの力は明に彼れの有せざりし所なり而して

そは高尚なる悲劇を作らんには必須の力なり。此の理や古くはプラトンの時代に断定せられたりし論點にして其の健全にして正確なる蓋し動かすべからず現んやシェイクスピアの實例が更にその理の當然なることを確定せるをや。思ふにシェイクスピアの能くシェイクスピアたるを得たりし所以は職として其の能く人心にありとある諸能力を兼具し能く整頓し能く調和し或は之れを明々地に或は之れを冥々裡に各篇のうちに利用せしに由ると。案ずるにマアロウの兼作家に卓越せる所以は其の落想の雄大なるに在りベン、ジョンソンの所謂マアロウス、マイチー、ライン、マアロウが雄大の句是れなり。然れども彼れが雄大は無規放埒にして尙頗る修練を欠きたり之を金剛玉のいまだ琢磨せざるに喩ふ其の傑作と稱する『エドワード二世』だにシェイクスピアが傑作の史劇に比ぶれば皆に數流の下にあるのみにあらず明に其の質を異にせり。マアロウはむしろ抒情的劇詩家たるの傾あり。まかはあれどシェイクスピアの作と雖も其の三十歳前後の手に成れる者の就中史劇の或二三の如何にマアロウのに髣髴たるかを思へば行年三十にして世を辭せしマアロウの天才は未だ輕々しく評定すべからざるに似た



うせり。思ふに其の一時をうごかまじは其の想像の雄勁にして燃ゆるが如きと  
 其の斬新なる没韻律語が他の陳腐爛熟なる有韻律語と相照らして異彩を放ちし  
 とに由るところ多かるべし。されど『サムバルレイン』は彼れが純粹の處女作なり  
 此の作によりて彼れを評價するは妥ならざる所あり明に彼れが技倆は駁々とし  
 て作毎に進みたり。『モルタの猶太人』に於ては無慚の貪婪を描き『醫師』<sup>ドクター</sup>オウスタ  
 スの哀史』に於ては無限の知識餓食を寫し『エドワード二世』に於ては醇粹なる史劇  
 の模範を示せり。かるが故に批評家或は彼れが不幸にして短命なりしを惜しみ  
 て歎ずらく彼れにして海運ならざりせばエリザベス朝の文壇に吾人は二個のシ  
 エークスピヤを見得たりしならん。ホイットペリー解して曰はく此の評は當  
 たらず。マアロウ偉なりといへど皆全く諷諧滑稽の才を欠けり。彼れの悲壯を  
 自在にする才力と豊富なる想像の才とが此の特質を兼備へなばげに他のシエー  
 クスピヤを成すを得たらん猶其の度の一層小ならん場合には他のホルマルを作  
 り而して其の物すごとく且とざれ／＼なる場合にすら他のダンテを作らんが如し  
 と。ハドソンもまたいふ喜劇を成すの力は明に彼れの有せざりし所なり而して

そは高尚なる悲劇を作らんには必須の力なり。此の理や古くはプラトンの時代に  
 に断定せられたりし論點にして其の健全にして正確なる蓋し動かすべからず况  
 んやシエークスピヤの實例が更にその理の當然なることを確定せるをや。思ふ  
 にシエークスピヤの能くシエークスピヤたるを得たりし所以は職として其の能  
 く人心にありとある諸能力を兼具し能く整頓し能く調和し或は之れを明々地に  
 或は之れを冥々裡に各篇のうち利用せしに由ると。案ずるにマアロウの衆作  
 家に卓越せる所以は其の落想の雄大なるに在りベン、ジョンソンの所謂マアロウ  
 ス、マイチー、ライン、マアロウが雄大の句是れなり。然れども彼れが雄大は無規放  
 埒にして尙頗る修練を欠きたり之を金剛玉のいまだ琢磨せざるに喩ふ其の傑作  
 と稱する『エドワード二世』にシエークスピヤが傑作の史劇に比ぶれば管に數流  
 の下にあるのみにあらず明に其の質を異にせり。マアロウはむしろ抒情的劇詩  
 家たるの傾あり。まかはあれどシエークスピヤの作と雖も其の三十歳前後の手  
 に成れる者の就中史劇の或二三の如何にマアロウのに髣髴たるかを思へば行年  
 三十にして世を辭せしマアロウの天才は未だ輕々しく評定すべからざるに似た



り。近世シエイクスピア研究の盛大となりしや人皆相争うてマアロウが作を玩讀し合味咀嚼す宜なりといふべし。ブルック曰はく、マアロウが作はよく其一生の閱歷と其の共に著作せし作者社會の生活とを反映せり。蓋しマアロウは不信神多想像、多感多情、放逸遊蕩なる詩文人の生活を過ごしき而してビール、ヅワートン等に至りては更にまた甚だしきものあり彼等は皆劇場と酒樓と牢獄との間に其の一生を終へにし當時の放蕩なる作劇者の代表なり。彼等が作は能く人間の善美なる側面をも描き得たれど不羈放逸なる少年の痕跡は歴々たり。彼等の劇は粗大放膽、剛強にして不平等なる生氣其の中に充溢す、又奇異にして荒唐時としては野蠻の風あり。又屢、溫柔なる情緒に富めり其の多情にして多感なるや間々婦人の情に似たり。而して其の人情を描き感慨を寫すや常に過大誇張に流れざるはあらず。要するに彼等の作は何等の適宜をだに具へざる者なるべしと雖も其の絶えて無生氣不活潑の弊を存せざる多少此の失を償ふに足らんか。又其の粗野なるを病とするも雄勁なるは及び易からず而して是れ一は其の時勢の然らしめし所なり。蓋しエリザベス朝は奇なる照對コントラストの充満したりし時なり烈火の如き作

業と多感多情の冥想とが流行したりし時なり。又男女間の空想をよるこび武俠の遺風をほまれとし猥褻陋俗を避けずして戯語をほしきまゝにしたりし時なり。公には企業冒險類に行はれ私には口論鬪争間斷無く接踵し文壇は平靜なるが如くにして辨難思索は盛に行はれ一方には信神の念磅礴し他の一方には懷疑不信仰の念勃々たりし時なり。而して件の情勢の全分は正しく彼等諸作家の劇中に描き出だされたり只其の彩色のあまりきら／＼しきに過ぎたるのみと。

ティンまた其の『英文學史』に於て當代を細評せり。其の大略にいほくエリザベス朝は古今無比自由放埒の時代なり隨ひて劇もまた千古唯一自由放埒なる自然其の物の活潑なり。夫れ時人は當世の感情を最も著鋭に懷抱するものなり故に其の聲は衆の聲さなる、されば尙武の羅馬教的西班牙はサルヴァンテス、カルデロン、ロイプ、テ、エーガに於て當代の解釋者を得たりき或は閑雅平穩なりし希臘國勢の、ソホークリーズに於ける、或は能辯にして世故に老いたりし佛國の、紳士の通人ラシーンに於けるが如きも同類なり。而してエリザベス朝の英國が庶民の社會より劇の詩人をいだしたりしは、た此の例に漏れず。ベン、ジョンソンは瓦師の繼兒にして其の身もまた瓦師たりきマアロウは靴師の子、シエイクスピアは羊毛商の子、マッシンジャルは紳緞の家僕、いづれも貧賤艱苦の見なりき其他ビール、ロウ、マアロウ、ジョンソン、シエイクスピア、ヘイウッド等



昔俳優、多少賈値の苦味を嘗めざりしは稀なり而してシェイクスピアの如く一劇部の  
 歴主たるにいたるまでに出世したりしは殆ど絶無にして稀有なりし所なり云々。  
 テーレンはまた當時の作者が如何に當時の特質に薫染してありしかの證としてナッシネ、  
 デツカル、キッド、ピール、ロツジ、グリーン等の放蕩陋劣なりし境界とその淺ましき墮落  
 の次第を叙しやがて其の間に牛耳を取りて劇詩の開祖と仰がれしクリストファル、  
 マアロウの性行と著作を評論せり。彼れはマアロウが神を信ぜざりしと、其の放埒  
 無慚なりしこと、其の詩才の超凡にして其の性情の激烈なりしと、彼れが一時俳優たり  
 しと、卑劣な情緒をしたりしと、情事のもつれより人を殺さんとし却りて其の命を失ひ  
 しと等を叙し、烈火の如き情の生活を過ごふし作者の作はそも如何なるものな  
 らんか、觀者之を想ひ見よと問ひて彼れが作、タムバルレイン、モルタの猶太人、エドワ  
 ード二世を評し、タムバルレインは殘忍刻薄功名と所領の擴張との外に餘念なき魔王  
 の如く猶太人パラパスは私欲の凝結したる一種の鬼の如しといひ且曰はく是れ十六  
 世紀の活潑なり當時の人は猶丁年の小兒のごとし凡そ情の動くややがて之れを實行  
 すること電光石火の疾きがごとし例へばパラパスの人を殺すや猶豫の念なく其心の  
 刺衝なしエドワード二世までもまた同ト彼等は情の極端と愛の極端との間に相移る  
 こと極速なりと論じ遂にマアロウの傑作、フォウスタスに及びてフォウスタスが万事  
 を知らんと欲し万物を其の有せんと欲する熱心の小兒の熱心に似たるをいひ其の  
 メヒストアイリ、ズと共に羅馬に至りて法王の宮に登りての悪戯の如何に小兒らし

きかを評し又如何にマアロウのフォウスタスとギョエテのフォウスタスが相異なる  
 かを論じマアロウのは原始の醇なる人にして血氣の盛なるや烈火の如し即ち情慾の  
 奴隸となり空想の玩弄物となるべきものにて全く實現界の人間也ギョエテのフォウ  
 スタの如き哲學界の人物にあらずといひマアロウの劇は實に英國劇の種子にして彼  
 れの作のシェイクスピアのに於けるは猶ペルシー、ジョーの畫のラファエルのに於ける  
 が如しと論じたり。

又論ずらく、當時の劇は寫實的なり當時の作者等は模倣的同情に富めり故にその作の  
 多くは目撃の事實を形を變へて殆ど其のまゝに現したるものに外ならざるなり。夫  
 の古代劇は秩序と美とを旨とし等整の美を失はざらんを力めき。整秩は古代美術の  
 性質なりエリザベス劇は其の直反對なり、比例と適宜とは殆ど空し。突如として二十  
 年後の事件を描き忽然として五百リ、ク以外の地を現す而して悲劇の最中に喜劇あ  
 りて人物むらがりいで、ほし、いまいに間對す、混雜又混雜其の脈絡時としては捉らへ  
 がたからんとす。蓋し彼等が人物を描くや複雑なる事實中より單純なる思想を抽し  
 來たりてそを描くのみを以て足れりせず敢て無數の特質と無限の細差別を具へ  
 たる複雑なる事實の全分を描かまくせり功名心、怒、愛などいふ通なる煩惱若しくは福、  
 貧、痴、癡などいふ純なる質を描くとに満足せずして驚くべく複雑なる人性の全力を  
 寫さんせり遺傳、教育、職業、年齢、交遊、談話、習慣并に其他の諸影響をも併寫せんせり。  
 必竟するに英國劇の條理は外より來たらすして内より來たり即ち其の劇が能く統



一の美を保ち支離滅裂の美を脱し得たるは人物の性情の中に統一の理存したればなり云々」云。

エドワード、ドウデンもまた其のマアロウ論のうちにて於てマアロウが特質を月旦し彼れをもて獨のシルレルに比しシエークスピアをもて獨のギョエテに比し且曰はく「英國の劇は譬へば其の初めは一個の小學校兒童なりき彼れは僧侶よりいと粗末なる敬虔を學び而して其の朋輩よりいと粗末なる談話を習ひき指す神劇を。さて一個の青年となりしや強健にして多感、性急にして無賴、倨傲、不羈、放蕩、淫逸、其の抱負や高遠其の言や誇大、其の友に對するや懇切、其のみづから持するや狂暴、正に是れシエークスピアが作中の放逸公子世をいふ五後に實現せられんとする謹嚴と深慮と偉大なる老成との素を含めり」と。これ重にマアロウの作を批せるなり。又曰はく「エリザベス朝の衆劇詩家中詩の技の大なるとに於てシエークスピアに次ぐべきは只一人あるのみ。彼れ若し幸にして命長かりせば作劇術の殊なる領分に於て無上の高地位を占め或はシエークスピアとすらも肩を比するを得たりしならん。按ふにシエークスピアは主實派オラトリス又は自然派の最大家となりマ

アロウは主想派イデアリスの最大家となりしならん。夫れシエークスピア並びに彼れに似たる者の發途點スタート・ポイントは常に或具象物なり人倫界に於ける現實なる或物なり即ち性情カラクタと行爲アクションとなり彼等が技術の所製作は如何なる批判解剖の蒸溜罐に投ずるも人の性情と人の行爲との二者以上なる原素に分拆する能はず彼等は實に此の二者をもて原素とせるなり。然るにマアロウ及びマアロウに似たる者の發途點は抽象なる或物なり即ち煩惱パッション又は觀念アイデアなり彼等が著作はすべて之れを一煩惱若しくは一觀念に歸することを得云々。マアロウを評し得て餘蘊なしといふべし。

## シエークスピア

古今空絶の作家非リアム、シエークスピアに就きては予は敢て多く言はざるべし。彼れが閱歴に關する臆測其の爲人に關する揣摩、想像、其の技倆に關する月旦は已に万牛に汗せしむべき著述となりて列國の文庫に充滿せり。今や童蒙もまたシエークスピアの何人たるかを聞知し而して専門の學者もまた未だ其の何等の人たるかを詳悉する能はず他無しシエークスピアの傳は希のホーマル、我が近松の如く縹緲茫漠として探究するに由なければなり。英國に在りてはニコラス、ロウ



以來、獨にありてはレッシング、ギョエテ、シュレーゲルこのかたシェイクスピア景崇の度月に年に加はり所謂シェイクスピア會員の稽古研鑽殆ど至盡せざる所無しと雖も此の不可思議作家の實相は尙いまだ洞破せらるゝに至らざるなり。若し邦人のうち彼れが爲人著作、技倆等に關したる最近の考察を知らんと欲する者あらば宜しくシュレーゲル、ゲルギナス、ウルリチ、エルツエ、エルデル、ハドソン、ドゥヂン、ヘールズ、ロイド等の著に就きて其の大概を窺ふべし。予は此の略史中に於て古來無數なる評論并に臆測のあらましをだに再述するを得ず。否最も肝要なる事柄すらも我が『邦語文學講義』に掲げられたる坂田典治氏の『シェイクスピア』に譲りてここには二三の要件のみを掲ぐべし。

井リアム、シェイクスピアは一千五百六十四年四月二十三日(?)アール、井ツク州なるアザン河上ストラットホオドにて生まれきと假定せらる。其の父はジョン、シェイクスピアといひ其の母はメレ、アヂンといひて共に中等社會のやゝ下級に位したりしものなりとぞ。所詮シェイクスピアが幼年の生活、其の教育の模様其の容貌、舉止、習癖等に關して吾人が知り得たる所はおほむね皆空漠たる推測の沙

汰のみ。彼れは其のはじめまばらくストラットホオドなる或學校に入りて修學せしのみと傳へたり此の故に同代の劇詩家ベン、ジョンソンは彼れを評して彼れは只僅少の羅旬語と尙一層少き希臘語とを知らるのみとそしりたれど此のベン、ジョンソンは眞に博學洽識にして自尊倨傲なりし詩人なれば彼れが貶して淺學といひしものは果して眞に淺學なりしや否や未だ容易に斷ずべからず。最近の考索は次第に彼れが學識の博大なりしと其の諸國語に通じたりしとを證せんとせり。通例シェイクスピアが用ひたる語の數を一万五千言とすホールヂンの如きは二万四千言なりといへり孰れにしてもミルトンが用ひたる語數よりも多きこと數千言ミルトンのは八千言あるは一万七千言と稱すこれによりてもシェイクスピアの學識のなみくならぬは知らるべし。さて彼れは十九歳に滿たざるころ七歳年上なりシア、ハサエイといふ女を娶り後六ヶ月にして一女スーサンナを生ましめき。爾後一二年間は思ふにストラットホオドの地にとまりてありしならん一説によれば此の間其の父を助けて羊毛商の家業に従事せりしならんといふ。さて彼れが生計上の必要に迫られ二つには立身の緒を得んと欲して



はじめて首都ロンドンに立出でしは思ふに一千五百八十五年の頃なるべし。其の最初の間の業は梨園に於けるいと卑賤なる職なりきともいひ俳優の見習やうのものなりきともいひ傳へたれど詳ならずたゞし其の後數年の間に彼れが次第に立身して俳優としても重立ちたる者の中に位し作者としてもグリーン、マアロウ等と拮抗すべき身分となりしことは事實なるが如し。彼れが當時の交遊中にはエツセツクス、サムプトン、ペグブロークなどいふ權門貴紳もあり、また詩文壇の名家もあり。若し最近の推定に大なる誤謬なくば彼れは此等諸交遊の爲にたとへ尊敬せらるゝに至らざりしも深く愛重せられたりしが如し。同輩ベン、マヨノンンは後に彼れを評していはく予は彼れを愛したりき而して今も尙彼れを追慕するの念大なり。彼れは實に公正磊落にしていみじき想像、めでたき思想、温雅なる詞藻に富めりき。さるからに其の一瀉千里の筆は時としてはそれを抑制するの必要ありし程なり彼れが機才は實に彼れが命ずるまゝなりき。若し其の機才を規正するの力はた其の命ずるまゝなりせばいかばかりめでたかりけん。され彼れの美は其の端を償ひて餘ありき云々と。又同代の士志ばく彼れの聰慧

にして温雅なりしを稱せり就中 Gentle Shakespeare といふ名稱は明に彼れが性の温厚閑雅なりしを表するものに似たり。一千五百九十三年彼れ其の處女作と自稱せる『オラスとアドニス』を出版し翌年また『リッククリーズ』をいだし此の前後に於て彼れが物せし脚本相ついで出で其の死するに至るまで作せし數明に彼れが作と考定せられたるものゝみにても三十有七篇の多きに及びたり。さて此等著作より得し所の利益は尠少なざりきとあはしく彼れはいつしか數劇部の座主となり一千五百九十七年には其の故園ストラットホオドにてニウ、プレーズといふ莊園を購ひ後幾ばくもなくして(或は謂ふ一千六百十二年)みづからもそこに移り住みき、其の故園と家族とにとをさかりしこと十二年の後なりきと假定せらる。退隱後の生活は甚だ平靜にして多福なりしが如し。一千六百十六年四月二十三日五十二歳にて逝りぬ。三子ありき一男一女なり。シエイクスピアが作は其の存生中に彼れが許諾を経ずして幾たびもほしいまゝに出版せられしがいづれも甚しき錯誤と謬脱とに富みたり。今日彼れが作として傳はれるはいづれも此等杜撰の刊行と彼れが死後七年目にいでし有名なるア



オリオ版とを参照し更に諸家の綿密なる校訂を経て成れる者なり。此の第一フオリオ版は作者が友人等の編集刊行せし所にて諸版のうち最も信ずべき者なり。其の後一千六百三十二年に其の再版成り(所謂第二フオリオ)又一千六百六十四年に第三フオリオ版いで又一千六百八十五年(所謂第四フオリオ版)に於て第一フオリオ版に劣れりといふ。例へば第二フオリオのごときは生中に臆測の訂正を加へたるがために一層の錯亂を醸したり。又第三のフオリオ版には更に七篇の作を附載したるが其の中『ベリクワーズ』の幾分を除くの外は恐らくシェイクスピアの作ならじといふが最近の定説なり。所謂七篇とは『タイルの君ベリクワーズ』『ロンドン奢侈者』『トマス、ロオド、クロムエルの傳』『ソル、ジョン、オールドカッスルの傳』『清浄教の寡婦』『ヨオクシヨア悲劇』『ロクリンの悲劇』なり。さりながら彼れが諸作の眞偽に就きての説は今尙一定せず又其の著作の年月に關しても異論まじくなり。通例彼れの醇なる作とせられたる物は下に擧げたる數十篇に過ぎず而して其の著作の年月の次第もドウデン等の主張する所によればほと下の如くならんといへどこれまた臆測の沙汰に過ぎざれば

讀者は須からく只其のあらましを示すものたるを記應すべし。

#### 脚本の部

- 『タイタス、アンドロニカス』 (一千五百八十八年より同九十年までの間)
- 『ヘンリー六世上篇』 (一千五百九十年より同九十六年までの間)
- 『ラザス、レノポアス、ロースト』 (一千五百九十年)
- 『錯誤の喜劇』 (一千五百九十一年)
- 『エロナの二紳士』 (一千五百九十二年より同九十四年までの間)
- 『眞夏の夜の夢』 (一千五百九十四年より同九十六年までの間)
- 『ヘンリー六世中、下篇』 (一千五百九十三年)
- 『リチャード三世』 (一千五百九十一年、或は謂ふ一千五百九十六年より同九十七年までの間)
- 『リチャード二世』 (一千五百九十四年)
- 『ジョン王』 (一千五百九十五年)
- 『エニスの商賈』 (一千五百九十六年)



『ヘンリー四世上、下篇』

(一千五百九十七年より同九十八年までの間)

『ヘンリー五世』

(一千五百九十九年)

『悍婦ならし』

(一千五百九十七年?)

『井ンドソルのをかしき女房等』

(一千五百九十八年?)

『マツチ、アヅー、アバウト、ナツシング』

(一千五百九十八年)

『アズ、ユー、ライキ、イット』

(一千五百九十九年)

『第十二夜』

(一千六百年より同一年までの間)

『オールズ、エル、ザット、エンツ、エル』

(一千六百年より同二年までの間?)

『メシニア、フオア、メシユア』

(一千六百三年)

『トロイラスとクレシダ』

(一千六百三年? 或は同ふ一千六百七年改訂)

『ツユリアス、シーザー』

(一千六百一年)

『ハムレット』

(一千六百二年)

『オセロ』

(一千六百四年)

『リア王』

(一千六百五年)

『マクベス』

(一千六百六年)

『アントニーとクレオパトラ』

(一千六百七年)

『コリオレナス』

(一千六百八年)

『アセンスのタイモン』

(一千六百七年より同八年までの間)

『ペリクリーズ』

(一千六百八年)

『シムベリン』

(一千六百九年)

『あらし』

(一千六百十年)

『冬の夜がたり』

(一千六百十年より同十一年までの間)

『ツウ、ノーブル、キンスメン』

(一千六百十二年)

『ヘンリー八世』

(一千六百十二年より同十三年までの間)

詩歌の部

『非ナスとアドニス』

(一千五百九十二年?)

『リウクリーズ』

(一千五百九十三年より同九十四年までの間)

『短歌集』

(一千五百九十五年より同六百五年までの間)



此の中『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』の四篇を通例四大悲劇と稱したれど尙別に掛くとも十餘篇ほどはシェイクスピアの傑作として見るべくいづれおろかなるは無しまた實に四大悲劇のみにては此の大詩人の秘蘊を窺ふに足らざるなり。ハドソンの嘗て『ハムレット』を評して最も少く此の書を読める者最も多くハムレットを知り得たりと爲すに似たりといへるたゞちに移して廣くシェイクスピアを読む者の上に適用し得べしざるは僅に彼れが作の一二を走讀せる者はシェイクスピア豈知り難からんやといへれど彌々細に咀嚼せる者は彌々其の深邃にして幽微玄妙なるを認め來たる。カーライル曰はく人十歳にしてシェイクスピアをよろこび七十歳にしてなほ其の趣味の津々たるをよぼゆと。シェイクスピアの作は實に大洋の如くにいと深くしていと廣し、かるが故に彼れが壯時の著作たる短歌集のみを取りて之を眞にシェイクスピアが實情の反映なりと假定し而して彼れを探らんと試みたる者、あるは曖昧零碎なる口碑に據りて彼れが爲人を推定せんと試みたる者、若しくは自家の定見を彼れが作中に讀みて徒にそのが影を追求せる者は皆ことごとく失敗せり。シェイクスピアは彼の偏狹なる

主觀の詩人と同じからず其の描寫する所は客觀の自然と客觀の人間となり。彼れは自在に自家の理窟を解脱して無私無我の筆に客觀の諸法相を畫きたり。彼れは人世の暗黒なる方面をも明快なる方面をも涙をも笑をも千差の性情をも万別の煩惱をも其の三十餘篇の劇中に悉く之れを描破したり。彼れは第二の自然なり第二の能造なり。

ベンジャミン、ジョンソン

新文明は毎に新文學を生ず。詩人は俗に先ちて當代を表白す、是れ其の時に豫言者と名けられ若しくは能説者と呼はるゝ所以なり。而して彼等が當代の理想又は普通觀窓を表白し盡くしたる時は概して時勢の一變せんとする時なりすなはち該文明窮極の時なり。『源氏物語』成りて藤原氏の盛極まり曲亭みまかりて幕府竟に衰へたるまた此の例に漏れずといふべし。此の故に大詩人のいづるは或は革命の兆たることあり大詩人は豫言者すなはち時勢の序を作るものか、はた其の跋を綴る者か未だ容易に斷ずべからざるなり。志かしながら所謂詩人にも大小あり僅に一代の理想及び觀念の幾分のみを表白する者と其の全分を表白する者



どの別あり。前者は十百を以て數ふべく後者は常に一二にといまる。シェイクスピア、ジョンソンの如きは後者、マアロウ、エブストル、フオド、マッソナル等は前者也。前者は先唱者にして後者は連唱者也其の歌ふ所は同類なれども一は全を歌ひ一は分を歌ひ一は先じて歌ひ一は後れて歌ふ優劣の存する所以なり。もとよりジョンソンの才分はシェイクスピアに比すべくもあらねど若しエリザベス劇壇に於いてシェイクスピアの對敵たりし者を求めば彼れの外にあるべからず。彼のポームントヤフレッチャルヤ巧はすなはち巧なりと雖も要するに第二流以下の作家、彼等のシェイクスピアに於けるは出雲半二等の老近松に於けるが如しジョンソンの巍然として別に一家をなしシェイクスピアに對峙せしに似ざるなり。フルラル二大家を評して曰はくジョンソンは西班牙の大艦艦の如くシェイクスピアは英國の軍用艦の如しと。彼れは莊嚴仰ぐべく此れは鬼沒神出彼れは不動山の如く此れは變幻自在殆ど端倪すべからず。

ベンジャミン・ジョンソンは蘇國エドモンスターンの一僧の子

俗にはベン・ジョンソンと稱す猶井リアム、シェイクスピアを呼びて井ル、シェイクスピア

ヤミいへるがごとし。或は是れをもて作劇家の時人に輕ぜられし體なりとするもの

かれといかにやなればは親愛の意をも含めるならん必しも侮蔑の意にはあらざらん  
 一千五百七十三年父の死後に生まれき。かくて其の母の一煉瓦師に再嫁せし後は義父の職を助くるかたはラエストモントンの學校に入りて志はらぐ學業を修めたりしが煉瓦師の業を厭ふのあまり中ごろ出奔して兵籍に入り和蘭地方に従軍して西班牙人と戦ひ十九歳にして本國に歸りやがてカムブリッジの大學に入りぬ。たゞし同校にとままりしはいと短き程なるべし何となれば翌年すなはち二十歳の時妻を娶りついでロンドンにいで、俳優となりぬと傳へたれば也。かくて後また轉じて劇の作者となり或はひとりにて或は他の作者と共に劇數十篇を綴りたり。其の頃同輩と口論の末に決闘してみづからも傷き敵手をも殺しこれが爲一時は獄に下されしが僧侶の庇蔭によりてゆるされその後は専ら作劇に従事せり。其の名高き作 *Every Man in his Humour*、*人さまたけ*の氣貫は一千五百九十六年はじめてロンドンにて演ぜられき。此の作其のはじめは人物服裝景致などはすべて英國のを寫しながら時處は伊太利の事蹟のやうに取かなしを作



どの別あり。前者は十百を以て數ふべく後者は常に一二にとゞまる。シェイクスピア、ジョンソンの如きは後者、マアロウ、エブストル、フォド、マッシュンヤル等は前者也。前者は先唱者にして後者は連唱者也其の歌ふ所は同類なれども一は全を歌ひ一分を歌ひ一は先じて歌ひ一は後れて歌ふ優劣の存する所以なり。もとよりジョンソンの才分はシェイクスピアに比すべくもあらねど若しエリザベス劇壇に於いてシェイクスピアの對敵たりし者を求めば彼れの外にあるべからず。彼のポーモントやフレッチャルや巧はすなはち巧なりと雖も要するに第二流以下の作家、彼等のシェイクスピアに於けるは出雲半二等の老近松に於けるが如しジョンソンの巍然として別に一家をなしシェイクスピアに對峙せしに似ざるなり。フルラル二大家を評して曰はくジョンソンは西班牙の大艦艦の如くシェイクスピアは英國の軍用艦の如しと。彼れは莊嚴仰ぐべく此れは鬼沒神出、彼れは不動山の如く此れは變幻自在殆ど端倪すべからず。

ジョンヤミン、ジョンソンは蘇國エストミンストルの一僧の子

俗にはメン、ジョンソンと稱す猶非リアム、シェイクスピアを呼びて井ル、シェイクスピア

ヤといへるがごとし。或は是れをもて作劇家の時人に輕ぜられし體なりとするものあれどいかにやなかばは親愛の意をも含めるならん必しも侮蔑の意にはあらざり

一千五百七十三年父の死後に生まれき。かくて其の母の一煉瓦師に再嫁せし後は義父の職を助くるかたはラエストミンストルの學校に入りて老ばらく學業を修めたりしが煉瓦師の業を厭ふのあまり中ごろ出奔して兵籍に入り和蘭地方に従軍して西班牙人と戦ひ十九歳にして本國に歸りやがてカムブリッヂの大學に入りぬ。たゞし同校にとゞまりしはいと短き程なるべし何となれば翌年すなはち二十歳の時妻を娶りついでロンドンにいでも俳優となりぬと傳へたれば也。かくて後また轉じて劇の作者となり或はひとりにて或は他の作者と共に劇詩數十篇を綴りたり。其の頃同輩と口論の末に決闘してみづからも傷き敵手をも殺しこれが爲一時は獄に下されしが僧侶の庇蔭によりてゆるされその後専ら作劇に従事せり。其の名高き作『Every Man in his Humour』『人さまざま』の氣質は一千五百九十六年はじめてロンドンにて演ぜられき。此の作其のはじめは人物服装景致などはすべて英國のを寫しながら時處は伊太利の事蹟のやうに取りなして作